

摘む芹のかう細かくては根ン仕事  
新しき自転車蓬摘ならん  
万作の風襟首を掠めゆき  
ハイライト当るが如く初ざくら  
芹摘の足許沈下ずぶずぶと  
この山がいちばん早き初ざくら  
一ところ枯枝に鳥の羽毛かな  
二輪草薄き日差しに首延べて  
山腹を通る人ごゑ初ざくら  
野蒜摘野辺に散らばり鼓草  
野びる引くや土みしみしと軋みけり  
むづむづと浦島草の芽を出せる  
一叢に柵して二輪草の群れ  
摘草の籠はとみれば野かんぞう  
水の上の雨の桜も佳きものと  
踏みしめゆく畦がぼこ鼓草  
海浜の大島桜ちる里山  
芹摘の足場暗中摸索なる  
鉄気水芹摘の葉の赤茶けて  
晩酌に摘む芹これだけあれば佳し  
土地人と直ぐうち解けて芹摘む妻  
野かんぞう料理る話に執し摘む  
芹摘の腰を労り棒立ちに  
ひっそりと花と萍裏山に  
末寺の二、三のこりて初ざくら  
仁王門見たその足で初ざくら  
春の雨くわりんの幹を伝ひゐて  
芹摘の泥こびり付く頬なりと  
野遊びのこゑだるまさん転んだと  
山裾に野遊び組と芹摘と  
摘み草の一人ひよっこり頭を擡げ  
野遊びのこゑ高らかに谷罅  
たんぽぽに佇めばみなこちら向き  
この道を上ったところ山桜  
頬骨の兀と花冷えしてゐたり  
隈取りを深く木五倍子の雨湿り  
生ま生まと木五倍子一雨ありさうな  
さうですか食べられますか野かんぞう

野っ原に芹摘む人とたんぽぽと  
野遊びの帰り支度か服叩き  
摘草の七つ道具を見せ呉れぬ  
黙々と摘草辺り暮るるまで  
それではとシヤベル借り受け摘草す  
芳草に摘草の指ぐと拭ひ  
おたまじゃくし去年居し沼の辺をあるく  
とみかうみ蝌蚪居ぬ沼と見定めぬ  
尚早の蝌蚪を諦め芹を摘む  
野蒜玉ピリと少々小粒でも  
野蒜玉わが古里の地味なるか  
里山に彩どり添えぬ垂れ木五倍子  
実朝の墓へ木五倍子の垂れ継ぐ道  
初ざくら水上に張るその一枝  
晶々と桜花芽の雨雫  
桜花芽雨晶々と降るばかり  
きのふけふ雨の横槍初ざくら  
雪洞吊る蕾む桜に先立ちて  
赤味帯ぶ桜花芽の並木道  
天空より花の千鳥淵見たし  
花咲けば人出づ千鳥淵おもふ  
髯面の長男厭ふ杉花粉  
亀気長に眺めゐるそら鳥曇  
春分の鯉に乗り上ぐ鯉がゐて  
散り継げる花を召しませランラン  
芹摘にあらず目当ては蝌蚪の紐  
無駄足とおもひてゐしに初ざくら  
鯉に鴨それに草亀加はりて  
雨冷えの夜冷えとなりて雪交じふ  
初ざくら海近ければ鷗来て  
漁減りて海星ばかりがのこる海  
開花今雨に足踏みじれったき  
里山の海へ続ける春霞  
はくれんの零る坂道一筋に  
野びる掘すっぽ抜けたる根に蚯蚓  
弾む畦からすのゑんどうそここに  
草野球からすのゑんどう咲ける野に  
かたまっておやおや此処に踊子草  
ひやひやと一分止まりの花の雨  
一両日雨で足踏み初ざくら

春の昼とろんと消えしラムネ菓子  
縮み上がる夕冷えのなか初ざくら  
小米花疾うに佛花と決めてをり  
小米花庭より祖（おや）の出入りせり  
辛夷咲く街路真直ぐアスファルト  
曇日のこれはこれにて初ざくら  
雑木中いつかいつしか初ざくら  
雛の夜更けて胡美方（こびほう）デヴユウ  
談

春の月夜道に洩るる夜来香（イエーライシヤ）

春分の佛花を一つ供えしのみ  
すれ違ふ墓所の入口入彼岸  
オスカー受賞式

ハリウッド春祝ぐレッドカーペット  
春なれやショウビジネスは海越えて  
著ぶくれてこの一着に終始せり  
宿木と古巢は枝を異にして

雨の日の玻璃の裡から花桃見る  
薄氷ことし一、二度突つきしのみ  
百草（ももくさ）に声掛け春の土いじり  
地虫出づ土にたっぷりまみれ来て  
米寿

母上に八十八度草萌えて  
欠伸してこどもがみせるおとな顔  
スタジオに持ち込む河津の初桜  
水浴びてめちやくちや嬉しチューリップ  
啓蟄のかさぶた剥がす男の子  
豆の芽のどれも万歳してゐたる  
かさぶたの如き地虫が地を這ひて  
紋白蝶ひっそりガード抜け切りて  
始祖鳥のやうな文様氷面鏡  
天つ日に弾けて咲けるにはざくら

郁李の咲く真晝にて事も莫し  
花影に如雨露を注ぐ影法師  
鼻唄がそれとなく出る桃咲いて  
郁李に朝昼となく春日差し  
千草引く母の小さき背庭隅に  
千草引く母の佇ちては蹲り  
塵取に引きしからからはこべ草

春の風吹き抜く音に芯のある  
強吹きのかなだか嬉し春のかぜ  
ものの芽の噴ける土塊まさぐりて  
一つ一つ化佛の如き櫨の芽  
でも好きとだんご虫掌に這はせぬ  
風鳴ってくわりんの芽吹きそむるそら  
クレヨン画へんてこりんな蝶飛ばせ  
春大風吹きて郁李面食らふ

沈丁の香のほのとして他所の家  
がらっぱち挟虫土潜り出で  
植木鉢そこを退ければだんご虫  
街路樹の辛夷掠めて風疾走

返本して戻る街角早辛夷  
妻云へば赤門脇の花見たし  
里山の桜巡りも二タ山目  
赤門を過ぎし辺りの初ざくら  
山椿人目があればはばかられ  
残り鴨ぷると古刹の池の端  
漣なす光のさゆらぎ春の鴨  
掲載の自作も桃も面映ゆし

花は皆口開けてをり春の昼  
忘らること振り払ふ春の夢  
桃散れり時間の散れる如くなり  
桃崩る時間の崩る如くなり  
他派といひ人を括れり鳥雲に  
とりつきて花の箱根の男坂  
日に膨れ桃の苔の裏むもの  
自ずから定まる一語桃の花

春と云へばさう三越の包装紙  
悼 木原さん  
つちふると少し突慳貪に君

日は永う団地廻りのバス車窓  
字幕スパー春夜の地震を告げゐたり

供華は今夏菊その都度あつらへて  
月夜道唄出て菅原都々子の唄  
鬱勃と来てあふぎゐる桐の花  
大向日葵トランペットは背後より

向日葵をあふげる如く師を憶ひ  
歳旦吟鳥澁がましきとおもへども

## 隅田川

台東区川辺の花見所かな  
 花の鳥ちらちら朝の気の動く  
 隅田川ゆったり花の高堤  
 花どきの電車轟々橋渡る  
 きしきしと翼使ふや朝ざくら  
 朝ざくら匂ふ隅田の川明り  
 隅田川堤に登り花の人  
 川岸の仮設トイレに花吹雪  
 老人の涙目らしきもの飛花に  
 春光のすすと朝の吾妻橋  
 墨堤の浮浪者に湧く朝ざくら  
 花冷の碑一つ渡し跡  
 飛花当る雪洞舟和の芋ようかん  
 手を拍って同窓生の花宴  
 法事あり野州田沼の花の野辺

## 栃木 田沼 法事

麦生見て忌日の昼の葛生線  
 忌に参らず車窓に辛夷この度も  
 停車してホームが足らず麦畑  
 かりそめの花の日選び相田の忌  
 花冷えに併せ修す忌疊の上  
 花冷えの酒なおらいの二柱  
 花冷えの疊の上の佛ごと  
 お念仏寺領の花に届けよと  
 開き切る木瓜の花より勝ノ丞  
 佳四郎忌辛夷乾いて吹かれをり  
 昼霞野州田沼の田の涯（はたて）  
 渡良瀬川花菜霞となりにけり  
 はらからの十三回忌麦の里  
 真ん中を川ながれをり昼霞  
 麦青む法事に参らず両毛線  
 萌え出づる麦見て喪服葛生線  
 人焼ける畑麦畑からからに

## 安針塚

喘ぐ息どつとばかりに桜散る  
 キキと舌焦げんばかりの轉りや  
 平日の山のさくらを一人占め  
 平日の山の鳥来て花見の座  
 花どきの山に柵を採りに婆  
 落椿其処は踏まれず此処も又  
 只一つ大分離れて落椿  
 紅椿はすかいに道ついてをり  
 花冷えにまくりしシャツの袖おろす  
 平日の山一人攀ず壺すみれ  
 島一つ泛かび上がれり花の上  
 靴に泥重たくなりぬ山桜  
 頂の花に奇声を女どち  
 雲脚の動ききわやか山桜  
 海見んと登り来たれり花の山  
 吹かれをり桜の上の花見の座  
 さんざめく鳥ごゑに酔ふ花の山  
 しばし居る木椅子は花のつめたさに  
 花の山高みがあれば高みより  
 横須賀の花の幾浦お弁当  
 横須賀の海に張り出す木の芽山  
 潜水艦溶け横須賀の昼霞  
 山鳥の精しく花の枝伝ひ  
 山鳥の呂律に合はせ花の散る  
 弁当の箸もて指せる花吹雪  
 平日の桜の中を通りけり  
 花よりも湿り気帯びて斜面（なぞえ）径  
 花闌くと山の鴉の胴間声  
 里山の下り口三つさくら季  
 沿線の六（む）駅目で降り花見かな  
 春うらら車中にひらく謡本  
 花満つる頃の里山見直され  
 花過ぎし里山也と捨て置れ  
 芽吹きそむ山小綬鳥の空弾み  
 烈風にどうするどうする山桜  
 諸葛菜呆けて佇てば日の薄れ  
 側溝に声挙げ流る一花片  
 落椿たうたう踏んづけ仕舞ひけり

上っ張り脱いだり着たり花冷えに  
落花一片ふるふるそこに蜘蛛の糸  
花冷えを樹下にかこちてゐたりけり  
つま先を伸せしききに山桜

花冷えのしんしん山鳥黙るとき  
花冷えの到れば重ね着加減して  
高笑ひ女ばかりの花筵

花筵持ち山巔に目当てあり  
蛇口より水迸り朝ざくら

花見弁当ひらけば鳩の優しく寄る  
初蝶の今来たこの道返りやんせ  
初蝶のそこそこそこと指すに飛ぶ

覗きゆく米屋小暗き花の昼  
萬屋の小暗きに婆花の昼

井戸生きて花冷えの水汲める家  
里山にことしも登り花見かな

里山の見馴れたる景芽吹けるか  
里山の見頃の花に事足れり

発つ鳥も静ごころもて花の山  
花木五倍子山惜しみつつ下るかな

雲行きの怪しき山の花きぶし  
山の縁縁と巡りて花の山

ここからは一心に下る水木の芽  
魁の花もくもくと対ひ山

淡さにもいろいろありて木の芽山  
谷戸住みの醍醐味は是山桜

入れ替りくる初蝶に目移りす  
初蝶のとまどひせるも須臾の間

さまざまな思ひの中の里桜

## 舞岡

飛花を追ふ介護老人車椅子  
水道で洗ふ手赤し初ざくら  
薬に懸けて帽子の忘れ物

老人のおでこの先の初ざくら  
写メールを花の山より送りをり  
坂上に日限地藏花は二分

葱坊主こころ廃田相次いで  
花なんぞ見向きもせざる畑鴉

すかんぼや女はとかくがやがやと  
突つ伏せる枯芦の上にシロハラが  
鶯の縄張りありと谷を指し

芽木の皮だらんと栗鼠の発情期  
ツンツンとコゲラ見えみて榛つつく

田蛙のけくけく啼くは先がけ組  
春水に小鷺の臍の惚れ惚れと

落椿一人遅れて山の道  
真昼間の生唾のんで照花菜

遠く見し菜の花を今至近距離  
山桜押し出しのよき幹と枝と

里山の風もとりわけ初ざくら  
一樹一樹手を添え桜振り仰ぐ

野に山に早め早めの花見かな  
花の枝山の鴉が跨りぬ

いやに大き古巢丸見え桜の木  
ぼこぼこ何の木の芽か里山に

寔れ辛夷一ト生峠を越してをり  
桜狩すこぶる風の強き日に

春の日に山の古巢の在処かな  
田の底の朽葉に蝌蚪の身を寄せて

覗き込みおたまじゃくしのゐるかゐる  
こどもごゑ生々木五倍子生ふ山に

尾根道のぱつと展けて山桜  
ふはと置く蓬の上の新聞紙

桃の咲く畑の縁に道付いて  
菜の花と薺ぽかんと昼の畑

弁当をとりつつ目遣るすみれ草  
鳥落とせし花房ならん山の道

畑の昼菜の花いろの尿をして  
弁当を片づける音犬ふぐり

里山にお先走りの花咲いて  
土筆摘むフェンスの向う明るくて

鼻先に畑土匂ふ野良仕事  
雑木透く桜一本里山に

手移しに渡さる蓬匂ふかな  
地虫出づ地べたにラジオ野良仕事

この山の年々淡白壺すみれ  
紋白蝶花大根の丈を飛ぶ

灌木と競ひて咲ける山桜

里山にゆつくりと吹く花の風  
尾根道の桜一、二分風の中  
山桜たふんと水筒背に鳴りて  
なづな生ひ繁る畑を遊ばせて  
根っこより見上げ端山の山桜  
谷に伸び一枝早き山桜  
山道の踏み均されて花の風  
山道や鶯に息整えて  
馬の背みち山の桜はまばらが佳し  
比ぶるに雀を目安花の鳥

春笋に竹の葉添えて都より  
春笋の零せる京の土淨いし  
竹籠に送られ京の筍ぞ  
筍を貰ひさっそく若竹煮  
春笋に左手を出し秤りけり  
湯掻きたる筍の湯気独り酌む  
手重りの春笋しんに冷えゐたり

かくて過ぐ彼岸仕舞いの雲夕べ  
つちふるに先づは目のゆく物故欄  
福助の少しつめたく花の頃

ストリートライブ花冷え募る伊勢佐木町

(ザキ)

宇宙戦艦大和續篇花の夜  
ほろほろと砂場に転げ込む落花

文楽の出囃子のごと花吹雪く  
花見酒過ぎ志ん生の語り口

俳句を日誌風に

今日は花俳句の一日一話かな

庭先に蠅の出てる午前中  
蠅生る家にぶらぶらしてゐては  
初ざくら枝の先っぽの方を見て  
林間に日差しの通る初ざくら  
沿線の桜切符を撫しながら  
稲荷など地下であつらえ桜狩  
ドラエもん映画ねだられ春休

齋藤

年長の芳三郎逝くなづな季  
なづな季田沼の通夜は泊りがけ  
通夜へ日の傾き落つる花菜畑  
青む麦こんなに早く逝くなんて  
棺釘寒むざむと打つ年長者  
火葬場裏茶毘に付す間の山桜  
物音を立つるを憚り春寒通夜  
白菊添え悼み止まざる汝の歳月  
もう一度呼び掛け暮春の枢窓  
花冷えの底出棺の釘打たる  
直会の酒に暮春を深むのみ

聞けば・・・

出棺の家成り昭和十三年  
古ぼけて春寒疊棺桶脇  
出棺や杉菜の道をしづしづと  
杉菜冷え直会の道戻りけり  
夕花菜棺は家に据え置かれ  
親族入れ替わり立ち替わり  
人燃やす春昼の水絶やさずに

花の昼人を焼く間を腹ごしらえ  
花の焼場抜きさしならぬ時が来て  
茶毘の煙花の明りに紛れけり  
骨壺の温み奪ひに花冷えす  
古里に逝く人絶えて紫木蓮  
紫木蓮もくもくと日を送るのみ  
紫木蓮たまさかに人通る路  
戒名を読み返しをり春の宵  
茶毘に付し来りて蓬に目を落とす  
浅々と明けけりゆすらうめの空  
花過ぎの日々あだごとの積みかさね

入園児の大きあいさつ喉ちんこ  
鯛釣草待ちに待ちたる入園式  
入園も進級もあり桜の園  
入園の名簿に見出づきりん組

入園式林の如く父母林立  
花と迎ふ園長先生河馬のごと  
黒板に桜の花文字入園す

花冷えの地下鉄森の中に出づ  
真つ向より飛花まぎれなき風くるよ  
花御堂いらかの上の空真青  
八重桜八重ことごとく日を返す  
増上寺門の内外の植木市  
花吹雪薨の反りを深めけり  
花御堂鎮座御空の大いらか  
母

米寿まで生きたついでの花見せん

山道のぬかる路肩に飛花加ふ  
いつせいに日の射すごとく飛花降りり  
花吹雪易者は八卦うち振りて  
涙垂れに今も桜の坊主山  
明日雨の予報に繰り出す花の人  
花を見る人出の中へ車椅子  
日曜の花散らす雨罪作り  
花の日々ふつから御飯炊きあがり  
いつしか殖えをりし戸毎の桜草  
横通り花のはたての山仰ぐ  
花の雨上枝の一所散らざりき  
狛犬に櫻は天辺より芽吹き  
曲毛のごと櫻芽吹けり杜のそら  
止まり易き樹木見つけて囀れり  
越して来て一年になるチューリップ（ご近  
所）  
話こもり易し小春の診察室  
初ざくら脇から道を訊かれけり  
花筏日を経し彩を泛かべけり  
紫木蓮晴天に帰す花のいろ  
古櫂のインチキ臭き芽吹きかな  
秘薬めく牡丹の花粉花瓣のなか  
何處となく立派に見える薔薇の家  
一遍さん背を吹かれゆく若葉風

牡丹見るといふに佛に願いごと  
水打つてひさぐ鰻屋隅田川  
けふ妻を連れて普賢象桜見に  
嗅いでみてくしゃみが出さう白牡丹  
幼稚園あつちこつちにチューリップ  
芽吹き出す頃と訪ふ孔子木  
花びらにうっすらと翳白牡丹  
眞昼間のそよりともせぬ白牡丹  
花曇園児半ベソかいてをり  
交む鴉隣家の屋根に貌を見せ  
頼りなき作務衣の着心地青嵐  
構はれぬ日々続きをり柿の花  
夕チツボスミレ登り慣れたる山の道  
朝寝して通勤の日を遠くせり  
貸し借りはお互い様や桐の花  
些少の借り皆持ち合はせ鳥雲に  
作務衣より素足抽んで庭仕事  
去年植えの・・・  
花付けしこと違いなきチューリップ  
花の日々振り返りをり仏ごと  
足遅き母を伴ひ桜狩  
古書即賣案内元は紙魚之會  
萍は一つから殖ゆその一つ  
苗ものに母の小遣いあらかた消ゆ  
詣で人櫻芽吹き遅速見て  
いつ見ても櫻の芽吹きへんてこりん  
桜薬降る山駅から見えてみて  
無縁墓椿の上に椿落つ  
筋通すことが第一今年竹  
結構なミモザと云ひて仰ぎをり  
気安く咲き気安く散りし桃なりき  
目借時この頃妻にして遣られ  
夕暮を呼び出してゐる白山吹  
通り抜けできる裏路地大でまり  
湯上がりがこれ亦よくて初鯉  
締め鯖を相手にむつつり酒を遣る  
一つ風呂浴びて晩酌初松魚  
鯉時年金暮らし忘れ酌む  
湯上がりの手首の赤し鯉時  
冷奴堅牢箸をつけんとす

黙々と箸のおもむく冷奴  
晩酌によかると地場の初鯉  
鯉時酔ひがだんだん醒めてくる  
蕃茹に塩たつぷり昭和世代なる  
振り塩の手馴れたるものトマトの上  
筍の煮物を助く花かつを  
筍御飯妻はいよいよ口達者  
大でまり訪問の宗告げてをり  
郁李に庭のいつしか暮れてをり  
淡く淡くチャンチンモドキ芽吹きけり  
まるめるの今年の花をつけてをり  
締め鯖にすぐ出来上がる緒ら貌  
都忘れ母の晩年ゆるやかに  
洗濯物掲げ出づれば春の星  
一山を覆ふ芽吹きに音の欲し  
夜櫻に繰り出すまでには程遠し  
鯉幟尻尾煽られ空たたく  
山桜散らせる風のおまげかな  
莫迦映すテレビの画面春埃  
都忘れこの頃家に籠りがち  
着均しの木綿の下着薫風裡  
花ことし雨にはかばかしからざるよ  
雨まみれ薬を離さぬ桜の木  
ひねもすの金魚問答玻璃越しに  
やうやうに花影を出づ増上寺  
風吹いて横へ横へと桜騒  
翼得しごとく桜は風を得し  
洗ひざらしの作務衣着て夏来むかへり  
大風にわななき桜薬降り  
大人しくしてゐる春の蠅でなし  
チューリップばかりの庭に飽き飽きす  
北上の風に勇める鯉幟  
耳掃除五月の妻の膝借りて  
金亀虫疊み切れざる翅一部  
莫山の墨書土の字匂ふ頃  
止まり易き樹木見つけて囀れり  
越して来て一年になるチューリップ  
梅ガ枝の如し志功のなぐり書  
ガレージに新車てかてか柿若葉

淡淡と夢二ほうふつ花大根  
紫蘭咲く風の日歩きとほしけり

皐月賞ある日の野毛の酔っ払ひ

### 野毛大道祭

鼻の辺り少し日焼けて大道芸  
白粉の素肌ののりやマイム芸  
白塗りの首夏のピエロに野毛情緒  
カタコトの日本語あやつり大道芸  
明日佇つは何處の路上か瘦せピエロ  
南風に載せジャズ風ちんどんミュージック  
「ちこう寄れ」されば南京玉すだれ  
大道芸川端柳吹かる辺に  
投げ銭を促す夏帽大道芸  
客巻き込み薄暑の野毛の大道芸  
薄暑の身きりきり絞り軟体芸  
南風吹き抜け野毛の縁台将棋かな  
大道芸遂に火のつくジャグリング  
薄暑の野毛髯のチャップリン笑ひ集（と）  
る

大道が檜舞台やヌード芸

粋を売る大道芸人単衣着て

かば焼の煙の流れて大道芸

髯・マント全て手作り大道芸

こきこきと風船鳴らしバルーン芸

「イマジジン」涼しくテキサス生れの大道芸

紙芝居黄金バットにつちふる風

髯に南風タイムスリップしてチャップリン

人間ジュークボックストランペットの涼

大道芸ネタを小出しに野毛薄暑

もめごとや野毛坂下の春の闇

野毛しのぶ焼酎・闇市・進駐軍

夏帽のゲストをなじる大道芸

風船より軽き身ごなし大道芸

炭酸水ハヤシライスの木村屋にて

南風の中パントマイムのはじまりはじまり

↓

野毛の祭当たり馬券のやうな空

投げ銭客数ふる仕草してクラウン

筍掘り済みて日の入る竹林  
念頭に九段界隈花咲けば  
上野山にふらり桜の下見かな  
晩年の桜冥利に尽きにけり  
一吹きに桜ざはめき渡るなり  
春曉起き抜けの水一杯を  
はがき書く皐月の水性ボールペン  
図書館は家より十分柿若葉  
「俳句分類」丙号を読む春の暮  
桐咲いて巡りに巡る月日かな  
定年後五年になるか棕櫚咲けり  
書き損じくしゃくしゃにして青あらし  
腰越の蛸を枕に何書かん  
骨離れよきこと煮付の赤メバル  
百日紅嫩葉揉まれること喜び  
青あらし通るところが判りけり  
つつかけて大楠あほる青あらし  
頭上より孕み鴉の喧嘩腰  
青梅雨のくどきチラシにくどき彩  
親指に梅雨忍び寄る尿の音  
雨のあと風が清めて春落葉  
笑ひ過ぎて腹痛きかな柿若葉  
奨めらる鮪の三味線・潜水板  
グラビヤの五月の暦ガレー船  
一病あれば  
心臓は取り替えきかず大朝寝  
はつなつの湯上がり手の掌に缶ビール  
筍の挟られし創底光り  
傍らにビールの空き缶かはたれどき  
とろとろと木の芽明りの甘茶仏  
谷に懸かる桜一枝だんぜん佳き  
春休機関車屋やえもんせがまれて  
藤の花垂るゝ短歌と云へば子規  
田の墓にいつかいつしか麦青み  
作者名ぶらさげし句や目借時  
遠くに目遣れり机の蟻吹きて  
庵原の新茶召されよとて宅配

古茶啜り松茸といふ砂糖菓子  
楠若葉揺らぐ光のつつましげ  
徐々に徐々に彩替ゆ樗狢犬に  
逗子駅前ああやっぱりと燕見き  
花了へし山の櫻のはだえ哉  
紫蘇の香の染みつく鯨に昼の酒  
ぽかぽかと葱の坊主に棒の雨  
おほやうな暮春の妻に倣ふもの  
蜂に針大儀を持ちて闘ふか  
直（ぢか）咲きの酢漿草コンクリートの上  
洗ひざらしの作務衣羽織れば夏一如  
花過ぎの月も白塗り大道芸  
目の粗きフェンスを潜り梅雨雀  
花過ぎの日々愉しみは大リーグ  
大道芸立見燕が頭を掠め  
多事に多謝そんな昔があり燕  
これと云ひ為す事のなし垣手入れ  
川下へ燕急くことあるごとし  
萍に吾が空けし穴何時塞がる  
日曜は晴れてつやつや桜の実  
葉ざくらを月の始の風わたる  
葉ざくらを慕ひて川の風が来る  
足取りも軽く新緑映る川  
ゲートボール春昼をなほ単調に  
ゲートボールの球音芽吹く高空へ  
国道をよぎる残影初つばめ  
たんとんと川は続けり初つばめ  
若葉風一字ふはりと翔たんとす  
舗道染め雨のユリの木若葉かな  
藪からし同士相手を掴み合ひ  
藪からし調子に乗りて断ち切られ  
八幡さま梢渡ししに若葉風  
境内のずん樗桐若葉して  
八幡さま裏の十薬・消防倉  
藪からし寂寥拭ふべくもなく  
賛 末廣醸造 大吟醸「玄宰」  
鯽山椒妻方の出は会津なり  
蔵元の八十翁の冷酒享く

蔵元の冷酒召せとや太っ腹  
冷やし酒末廣酒造蔵元より  
壇ひやと末廣といふ酒の銘  
酒造り夏の磐梯山の水  
夏来迎ふ酒「末廣」の封切れば  
酒は会津肴は三浦初かつを  
唇に当ててよかりし猪口の涼  
冷酒にほろ酔ひ箸の上げ下ろし  
冷やし酒とろんとろんとして来たり  
冷やし酒酌むやこころも末廣に  
長寿國會津の酒にあやかる首夏  
冷やしのむ庄助さんの國の酒  
磐梯を覆ふ萬緑ひやし酒  
盃を猪苗代湖にして皐月  
酒もまた会津鬘負や虎ヶ雨  
酒酌むや鱧山椒に会津っぽ  
皮切りに会津の酒を夏座敷  
金色に水神宿る楠若葉  
薫風に逆らひ歩む一年生  
退け時の一年生過ぐ桜の実  
陽炎へる紅茶の湯気にアップルパイ  
鴉つるむ森の上なる白日輪  
今月は西(にし)向(む)く土(さむらひ)  
四月盡  
だみごゑに誰だジャスミン植えたのは  
青あらし闇駆け抜けて駆け抜けて  
青あらし一夜吹き抜き青木っ葉  
青あらしばたばた戸叩く一夜明け  
つつかける雨に処置なし青あらし  
風よりも雨が厄介青あらし  
あはあはと暮春の露の炊き合はせ  
肴には豆腐がよけれ山椒味噌  
はつなつの香を封じ込め山椒味噌  
精勤の彼の日々薄れ山椒味噌  
ふるふるの豆腐一丁山椒味噌  
青あらしさんさんこずきゆきし木々  
青あらし思ひ遣らるる闇の木々  
映像に傘の骨折る青あらし  
寝ねんのは薄着がよけれ青葉の夜

大道芸立見薄暑の仏具屋まへ  
一日はつちふる野毛の大道芸  
赤鼻のピエロ一札五月空  
春塵の巷人埋め大道芸  
野中詳介君 外務省を定年 海外赴任多  
れば  
燕飛ぶ或る日定年挨拶状  
つばくろの日本に落ち着くとふ定年  
蝸牛行動半径同じうす  
玄関のドア開けしまゝ黒揚羽  
蝸牛塀に沿ひゆく午の風  
角立てて何と交信蝸牛  
ぴしぴしと雨横殴り青あらし  
烏雲に白塗りパントマイム芸  
ぴったりと夜に入り収まる青あらし  
暮春なる妻の手擦れの惣菜帖  
五月空昨夜の嵐は何事ぞ  
五月晴れもこもこの枝払はねば  
風かほり菊の挿し芽の時分とも  
新緑の椎経て家にとほる風  
種植えの昼のポピーを日の透ける  
広辞苑割れば新緑殺到す  
お掃除に部屋あけ渡すみどりの日  
雨雫桃の青実の混むところ  
葉ざくらの下記す句は鉛筆書き  
朝刊の活字濃く見ゆみどりの日  
たんぼぼの絮を飛ばして濱日和  
みどりの日コンビニ麺麭の安売り日  
森閑たる青葉の森に雷とよもす  
遠雷のいつしか失せて海の照  
陸続と丘吹ける風紫蘭分け  
戒名をノートに控え春の暮  
夏蜜柑咲かせ一人居婆の家  
ジャスミンの芬々馬鹿に蒸す日かな  
夏蜜柑庭にたちこめ昔の香  
この家の人でありしか垣の薔薇  
家翳る俄曇りに黄の薔薇  
青葉の枝払ふ一雨来るまへに

青葉空く缺の音降る頭上より  
一樹又一樹青葉を空き整え  
穴埋めパズル妻が投げ出す暮春かな  
絵パズルの助け舟乞ふ目借時  
大リーグモンキーバナナ剥きながら  
老人の間食モンキーバナナかな  
棕櫚の花一寸バナナを思ひ出し  
によきによきの徒長枝空かんみどりの日  
青葉冷え作務衣の襟を搔き合はせ  
賜りてさっそく賞味冷吟醸  
漆黒の蟻がとことこ洗面所  
庭土の安売りがありみどりの日  
青芝を蜥蜴は泳ぐやうにして  
石ころの彩の蜥蜴を発たせしか  
青あらし吹き余りしが空木揺り  
伽羅木にもう蜂が来て夏間近  
夏木空き了へて腕の蚯蚓腫れ  
連休は何處へも行かず柏餅  
起床して掃除洗濯五月妻

一夜干し烏賊のカーテン風岬  
お隣の豆柿そのうちお裾分け  
二つ三つ蹴飛して足る草の絮

一番茶摘み取り始む山北町  
連休の二日目若葉曇りかな

静岡、庵原郡 影島智子さん  
毎度のことかたじけなくも新茶かな  
茶畑も荒れに任すと農俳人

心臓の営み如何に青葉の夜

真夏夜をチャンバラ好きの映画好き

連休の帰省ラッシュを大写し

縄跳び唄切れぎれ五月の風に乗り

連休の庭石に伏す昼とかげ

十葉の暗緑謳歌聞けとこそ

コロッケに連休初日の昼ごはん

蝸牛連休出歩く当てもなく

先づ並べ菊を挿す鉢五つほど

菊を挿す母の指南を横より受け

赤玉土粒細かきに菊を挿す

枝空いて五月の風を通す庭

小潮にて干潟は海の底にあり

金沢八景

万歩計州崎の松の緑見て

翠（みどり）見て身体に馴染ます万歩計

タイル貼魚店夏めく鎌倉に

庭掃く他黄金週間何すべく

緑立ち放題年金暮らしかな

三着の作務衣に衣更へにけり

ペット屋にざりがに入荷五連休

齋藤緑雨

緑雨の忌コラムニストが取り上げて

連休の「天声人語」に緑雨の忌

晦日なる新聞コラムに緑雨の忌

毒舌家齋藤緑雨の忌なりけり

毒づくといふにあらねど十葉叢

松の芯浪うらうらと寄せにけり

おせおせの干潟の波となりにけり

東京のつつじといへば根津権現

青き踏む妻と共々万歩計

蝸牛課題は生活習慣病

黄金週間さほど距離出ぬ万歩計

永き日を妻切り抜きしコラム読む

竹秋の妻読むひとり暮らしの本

楠の咲く懐にゐて鳩ひっそり

楠の花咲いて白暮を募らしむ

菖蒲湯に貝の切り傷いたく沁む

水鉄砲広場の鳩をねらい撃ち

人怖じせぬ雀皐月の鳩に伍し

鱧釣舟出船待てる橋たもと

瀬戸神社明けてもくもく楠若葉

真鯛釣ぎうぎう詰めに乗合船

栈橋に蟹弁天屋荒川屋

沖合に若葉曇りの鱧釣舟

釣人のごったがへせる真鯛船

杜青葉堂屋根緑青尽くしけり

もくもくと楠咲く神社素通りに

辞書二、三牽きて黄金週間了ゆ

楠の花あふぎてゐたる初老の眼

境内の片隅木斛花つけし

洒落た句の一つもあらなと薔薇を詠む

広前に日を経て白む楠の花

楠の花水舎の水の高鳴れり

美目のよき露摘む一雨くる前に

冷や酒にたしなめらるゝごと白暮

生ふるものなべて拒まず春の山

大徳寺別院

目からして剽軽な竜滝の間に

栄螺採入り江の翠溶け込めり

五月くる何より楠のもくもく感

松の芯釣舟沖へ繰り出せり

砂搔いて皺むてのひら汐干狩

走り書押さえ皐月の醤油壘

更衣たよりなき襟搔き合はせ

棕櫚の花生々垂れて負け惜しみ

箆筒より出す夏物の海原なす  
懐古

手術日を前にし四千六百日  
梅雨の暇惜しみて妻の片づけもの  
片づけ魔妻の籠れる梅雨一ト間  
夏支度箆筒のものを掻い出して  
ピザ焼いて連休気分愉しめり  
更衣一ト色褪せし藍作務衣

空撮の花びら型の五稜郭  
まだ青き市庁舎脇の桜の実  
湧く風に桜青実の打ち合うて

柏餅人物談義言い得て妙  
狸めと人を眨め柏餅  
目借時妻に揚げ足取られけり  
風の街更衣して足慣らし  
綴じ込み広告どつと連休初日かな  
野遊びにこの頃婆のリュックかな  
風太郎達に隅田の花吹雪

走り茶の宅急便か紙袋  
消費税込みの草餅にて判然  
ごみ箱の在りし辺りに蛇いちご  
疾風のこづきまはせる楠若葉  
若葉して青葉す杜に神在ます  
青あらし鴉翼を重さうに  
楠の花雨しろしろと降り出せり

萬の薔薇咲かせ主の心意気  
老い先はやがて二人に花かたばみ  
六郎の街灯点る星月夜  
春眠の風茫々の中に覚む  
風折れの菊の手当に添え棒す

青あらしいちにち庭木揺りて暮れ  
菖蒲湯を明日とせる湯に鼻唄も  
一束の菖蒲を買へば華やいで  
目借時句評の蘊蓄煙たかり  
黄金週間立川文庫取り出して  
青あらし葉を裏返す小気味よさ  
芍薬はうまく言へねど節度と粋  
目借時俳句時折ぎなた読み

鈴蘭植え団地暮らしの母子なる  
肺胞に葉ざくらの風ふかぶかと  
リハビリの夏暁の妻に夫添へり

江戸錦鰯をはたはた春の暮  
江戸錦面と向ひて古風な装（なり）  
十匹で何んぼの和金売れゆきよし  
閉じてまた開く金魚の口愛（めぐ）し  
枝空いてユリの木の佇つ夏の街  
春夕べ煮豆は大正金時とよ

ざらざらと何の擦り傷菖蒲の湯  
魚の腸（わた）又候（またぞろ） 蠅に集（た  
か）られて

酒の香に何か知らんが春の虫  
蚊の蠅の一茶七番日記かな  
麦畑を追はる鴉のへらず口

菖蒲湯の菖蒲做ひて横たはる  
菖蒲の香沁み込む新（さら）湯掛湯して  
はからずも苺買ひ来し母と妻  
苺食べ後引く味や今少し

当節の人驚かす大苺  
朝々の楠を撓めて五月風  
桑の実のべたべた落ちてなおざりに  
嘗て此処に脇道ありし蛇いちご  
おざなりに春の落葉を掃く夕べ

雨予報箱根辺りに強き雷  
はおるもの一枚足せと梅雨予報  
新築の二階より垂れ鯉幟

風の吹くなかの一日の端午かな  
長男の部屋はそのまゝ子供の日  
鉛筆は2Bが好きこどもの日  
いつまでも子供扱いこどもの日  
古茶淹れて七番日記続き読む  
一病のよくも悪くも古茶をのむ  
ばか、かきの句が頭をよぎる傘雨の忌  
楠の花零るほかなき明けの雨  
風送る葉ざくら並木既にして

夏みかん三日月形の花散れり

夏みかん落花うつむき歩く路地

夏みかん散りてぬかるむ雨の路次

じめじめした裏路地落花夏みかん

さらさらと砂糖ステイックこどもの日

自転車に余る菖蒲を買ひ来たり

ぶらんこは濡れづめ雨のこどもの日

番組を漁りて雨の端午の日

てぐすひく怪獣映画こどもの日

アニメ観て黄金週間最終日

黄金週間途中晴るゝも雨で了ゆ

地魚の柴の鯿の薄造り

自転車の少年菖蒲戦がせて

茸槽猿の歯形の生々し

八景島

遊園地若葉風切る複葉機

汐の香のうすうす流れ庭石菖

海浜のデイゴの見ゆるレストラン

浅草の夏の素の香を吾妻橋

土買うて下見がてらに種物屋

箱蒔のけさ朝顔の芽が三つ

朝顔蒔く穴ぼこに種子一つづゝ

土退けて種子朝顔の縮みし葉

朝顔苗本葉が出たら植替どき

朝顔種子浸すに休眠するやつも

朝顔

花種子買ふヘンリーブルーの名に魅かれ

傾けて漣なせる種袋

種袋鳴らし選る貌殊勝也

ひめじょおん作り過ぎない庭が佳し

茶箱出し疊に夏もの拡ぐ妻

宮城産酢海鞘に舌を巻きにけり

海鞘料理る妻は手馴れたものである

気前よく掛け湯使ひて菖蒲風呂

朔日の妻と向き合ふ首夏の卓

くるぶしをぶつつけおお痛甚平着

灯点して黄昏いろに首夏家内

脛を吹く風来るからに夏夕べ

茶を植えて八十八夜の浄水場

酢漿草や母の世色褪せつゝも古り

蠅虎稚くも貌老成す

お気に入り房州団扇使ひ初め

海芋覗く者として不審がられゐる

街往けば正面からくる青あらし

青嵐煽られし身を立て直す

しよぼくれし灯に床延べる梅雨疊

枇杷啜り零して舌打老いのしよぼくれ

休校の開港記念日向日葵蒔く

過ぎる日も来る日も雨の蝸牛

向日葵蒔くその掌叩きて土煙り

向日葵の双葉乍らも聳えたり

ふっ切らん老いのしよぼくれ黴退治

青梅雨の庭木空いても空いてもや

コスモスの種を蒔きをり細目して

通学路次一瞬きに揚羽消え

開港の歌あぢさゐを見下ろしに

青あらし転けし菊鉢そのまゝに

角々を確かめありく卓の蟻

文机の稜線が好き走りの蟻

晩酌の頭上を飛べる夏の虫

厨より紫陽花渡る風が見ゆ

盆の縁奔りに奔る蟻一つ

暫くは容をなぞり壺の蟻

晩酌の卓這ひ回る蟻迅し

雲脂落とし紙面に頭たす半夏生

十葉咲く団地の昼はひっそりと

檀ふみ

放談の著物先取り夏衣

斯く晴れて徒生りの裏路地枇杷

ベランダの聳ゆる家のアマリリス

ねずみもち咲く路次風景相変らず

珊瑚樹の花図書館へ向ふ路

街中の昼顔の咲く小公園

昼顔の花了ふ容雨の中

殊に樗八幡様の杜若葉

昼顔をひっそり過ぎぬ影法師

あじさゐの挿し木狭庭の瘦せ土に

箱蒔の向日葵の種蒸れをらん

愛宕神社

段（きだ）擦りて愛宕の杜の夏落葉

愛宕社の段うすうすと薄暑光

隙間なく葉桜覆ふ愛宕の杜

受診序で愛宕千日詣でかな

ほおづき縁日近し愛宕の杜冥く

皇居東御苑

河骨に皇居御苑の風秀で  
夏草の丈なす皇居内ポスト  
二重橋柳丸々松亭々  
風起ちて皇居御苑の菖蒲の田  
ヤットウの皇宮警察森若葉  
皇居の森青葉楊梅立ち交じる  
濠の水皇居の蜻蛉きて掬ふ

若葉せる日比谷公園久しぶり  
泰山木家並を一つ抽ん出て  
葉桜の影置き運河鎮もれり  
公園の緑風風太郎に見ゆ  
風太郎ベンチにあふぐ五月空  
うまごやし小学校より子供ごゑ  
風太郎緑陰ベンチ一人占め  
草野球少年皐月のこゑ絞る

踏切を何か急かれて立葵  
里山に賑はひ運ぶ花の人  
煤けたる樹皮で鎧ひし冬櫓  
少女等は昔ブルマー運動会

三浦半島 三崎口 妙音寺

神奈川の縣花尋ねて崎山に  
もりもりと三浦三崎の椎若葉

大様に燕飛ぶなり三崎口

大蚯蚓の骸舗道の灼けてをり

葉っぱ影まだら模様の青無花果

竹葉落つ音擦り抜けてゆくごとし

葉ざくらの下闇匂ふ風絶えて

里山の百合したたかに苔みけり

螢袋山土蒸れし香を放ち

刈草の乾く香の中道祖神

毛虫這ふ山暗がりの木下道

三浦半島 小網代湾

馬刀葉椎みどり溶け込む油壺

崎人の農薬散布大根畑

夏雲は半島に沿ひ東京湾

チゴ蟹の挨拶応へ遣らねばと

海蝨の道ややこしき何處が端

煙草喫ふ老蟹舟の片陰に

ヤドカリの一種

海老いろにコブヨコバサミの大鉢

小網代の蟹の棲み分け聞く干潟

甘藻場に甲烏賊の寄る夏近し

共生

目の悪きすじ鯊テツポウエビに蹤く

共生てふ生き方選ぶテツポウエビ

浜大根何處から降りても小網代湾

干天草傍に老漁夫莨喫ふ

巾着湾囲み斑（まだら）の椎若葉

脛にも毛碁盤模様の弁慶蟹

芦原蟹ぴんと遠目が利く目立て

甘藻場を台湾ガザミ離れけり

赤手蟹ハケ道伝ひ来ることも

漂へるガザミの脱殻昼の月

瑠璃蠅の妖しさ放つ森の径

倒木を潜りひよっこり赤手蟹

海浜のレストランにも赤手蟹

とうすみの交む細身のくねりざま

あめんぼう関節利かし泳ぎをり

窪といふ窪に海蝨照干潟

チゴ蟹の雄とよみづいろ覆面して

コメツキ蟹健啖にして砂団子

赤手蟹見来し翌日暗に雨

乾びても平氣の平左海蝨は

チゴ蟹の右に左にさゆらげり

夏作の大根畑往く万歩計

茱萸をもぐ女の腕の種痘跡

赤手蟹森との共生計らねば

小網代の森の育てし赤手蟹

三崎の森蟹を生かして蝨生かして

赤手蟹見んと携ふ万歩計

チゴ蟹のだんだん見えてくる干潟

踊るチゴ蟹近頃運動不足にて

昼月に海蝨の道あえかなり

巾着湾蟹がさ走る蟹干潟

青ざめて台湾ガザミの挟み傷

小網代湾干潟観察蟹講座

川蜻蛉飛んで翅色薄めけり

海蝨のころりころりと忘れ潮

小干潟に毛房磯蟹長らへし

赤手蟹森の木暗に鯰呼吸

芦原蟹評すに一寸凶暴と

穴掘れり森の隠者の赤手蟹

小網代の岩の下好き平磯蟹

小網代の鳶が天敵豆拳蟹（まめこぶし）

蟹の目線及ぶあたりを蟹装ふ

鳶狙ふ蟹の文様なれば地味

鳶いるわいるわ干潟の蟹狙ふ

蟹四十餘種棲む崎の集水域

鉄砲海老発止と関節鳴らしけり

チゴ蟹の小心者に芦の風

チゴ蟹の万歳小旗持たせたし  
ロンパリの蟹の目干潟観察会  
岩の上に長靴二本遠干潟

家苞の三崎の鮪に庭の紫蘇

茉莉花に皆鼻持つてゆきにけり  
素馨とはあえかな響き持つ花よ

水巡らし江戸一目凶夏霞  
寺に松寺に過去帳みみづ鳴く

甚平にて調髪のみの散髪屋  
髪刈つて戻るにはひも天瓜粉  
煮冷しの茄子汁底なし沼めける  
立読みの堂に入りたる甚平着  
街角のこんな所に山法師  
山法師きれいさっぱり散りにけり  
病院を抜け来し患者合歓あふぐ  
青柿の容整えゐる葉陰げ

箱根行

夏潮の煌めき寄する国府津駅  
緋カンナに国府津の海の展けたる  
海の日を国府津止りの電車にて  
国府津駅萐ふかすに片陰無し  
七月の真鶴半島海に入る  
ピンボケの沖雲半島梅雨に入る

紫外線予防徹底夏帽子

宮ノ下富士屋ホテルの庭つつじ  
氷菓出し富士屋ホテルのシェフなりし  
蛸袋上りづくめの塔ノ沢  
射干に湯ぼてり覚ます塔ノ沢  
瑞々しき水木花拳ぐ塔ノ沢  
濃あぢさゐ登山電車はぎくしゃくし  
野放図に枇杷生る梅雨入の温泉場  
箱根今梅雨入始めの町雀  
遊船待つ片手に箱根周遊券

箱根湿生花園

素っぴんのノハナシヨウブに逢ふ水辺  
おやまあとノハナシヨウブの辺に寄れる  
山妻にノハナシヨウブの季(とき)ありし  
山妻にノハナシヨウブの面影も  
ノハナシヨウブ美人の尺度を御代に連れ  
群れたがりノハナシヨウブの一叢は  
つんつんとノハナシヨウブの丈比べ  
別嬪のノハナシヨウブはつんと佇つ  
ノハナシヨウブ湖より風の途切れずに

繡線菊見る目元もやもやしてきたる  
花しやうぶ流水掠めゆきにけり  
木下闇桑の実の落ち紛れけり  
河骨の茎ひよろひよろと水中に  
河骨は竜眼に似て葉叢の中  
笹百合の低き丈吹き風余る

弁当の折を開けば遠郭公

鬼下野木下闇より窺ひをり

仙石の空うち晴れて水弟切草(ミズオトギ  
リ)

木道に首さし延べて樊噲草(ハンカイソウ)  
木洩れ日の樹下を好みて樊噲草(ハンカイ  
ソウ)

極めつけタカネグンナイフウロかな

余所者に一泡吹かす大葎切

大凡の見当つきある大葎切

繡線菊の盛り過ぎしはピンボケに

繡線菊に掛けて女の褒め言葉

狐めくニッコウキスゲの細面

ニッコウキスゲこころ萎れて面目無し

お弁当ニッコウキスゲに向き合ひて

霧湧かす花別名をゼンテイカ

葎切によゝと啼かれて迷ひ路

烈風は大葎切こゑ荒げたり

吹きつける風に綾なす青葦原

もう一声葎切あらぬところより

葎切のこゑ裏返る疾風中

風下モの葎切のこゑ掻き消され

葎切の品性かなぐり捨てしこゑ

葎切は詭弁を弄す如くなり

葎切に平常心の何時戻る

葎切に天網恢々昼の月

青葦の根もとながれて澄める水

葎切に青葦の葉の擦れて鳴る

大葎切湖の方より風絶えず

葎騒に昂ぶり啼ける大葎切

仙石原

青すすき奔らす風の仙石原  
青すすき道をいつぼん通しけり  
さはさはと風渡り見ゆ青すすき  
仙石原ゆらゆら遠目の青すすき  
篠の子を手折り篠の子搏ちゆけり  
青すすき伝ひのぼれる風一目  
風筋のあからさまなり青すすき  
湖の風搏つてうごめく青すすき  
青すすき次々搏つて馳せゆく風  
青すすき仙石原は風に富み  
鮪すいすい空木の映る水底を  
くさぐさの虫の疇も青すすき  
虫の音も振れ吹かるゝ芒原  
白靴に青すすき原分け入らん  
八千草の仙石原の夏の虫  
一本道青き芒に陥没し  
右に左に青薄騒一本道  
青すすきちぎり道なほ尽きず  
青すすき振り返るとき蒼ざめて  
翻る青薄原ゆく白シャツ  
青すすき掻い撫で仙石原の風  
青すすき煽る大風吹き抜けに  
ラムネ玉ころりと仙石原晴れて  
青すすき靡く葉叢のみえる茶屋  
老鶯に暫く浸り茶屋の椅子  
郭公に得したやうな顔をせり  
足どりのどんどん軽くなる郭公  
郭公に顔を泛かせて対しけり  
郭公の余韻心に冨せり  
郭公を箱根巡りの余録とす  
郭公のあなたと知らる風の向き  
郭公を聞き留めし顔皆したり  
郭公とおもはず妻の指さす方  
郭公のこゑ湖の方よりす  
バス停まで歩いてゆくや遠郭公  
風上ミの葭切のこゑより大き  
郭公の長啼その後無かりけり  
碁盤目の別荘路地ゆき遠郭公

郭公の連呼昂ぶり流る川  
郭公をのびのびと聞くのびのびと  
宮城野温泉会館  
水木咲く青山にして温泉（ゆ）の湧ける  
紅鱒棲む急流にして冨せり  
万緑の中の一川ルアー釣  
紅鱒釣四方の翠巒映す水  
ルアー釣箱根のみどり映す水  
湯本  
弥次喜多の湯とや燕に軒を貸し  
泰山木花の始末をだうつける  
葉ざくらの暮れ出す湯本小学校  
夕燕揚げて時鐘は「箱根山」  
プール張り箱根町立小学校  
喉鳴らし巢燕躰寄せ合うて  
十葉生ふ旧箱根道一里塚  
地元の老人の云へる  
夏の宵置屋の三味の音いまは無く  
竹の葉散り置屋廃れし海道脇  
乙鳥の時折高く元箱根  
翠巒の夜風吹き込む宿の簷  
褪せ暖簾夜風に返る弥坂ノ湯  
汗ながす大衆浴場弥坂湯に  
弥坂湯に箱根巡りの汗ながす  
湯上りのハーゲンダッツ氷河の涼  
湯本駅川風任せ夜の風鈴  
温泉場ちゃんこ鍋屋の赤提灯  
登山電車灯蛾の舞い込む向ひ窓  
早雲寺  
早雲寺夏木の下の剣道場  
槇落葉バラバラ搏てる剣道場  
早雲寺常磐木落葉して墓域  
槇落葉連歌師宗祇ねむる墓  
青葉風一日鳴りて宗祇の墓

連歌師の墓を常磐木落葉搏つ  
椎落葉踏みて山越え早雲寺  
湯上りの廊渡る風青葉宿

秋空になすりつけたるやうな雲

昼顔に無聊の息を凝らしつゝ  
西瓜切る甘きところを平等に  
ポケットの位置に戸惑ふ更衣  
昼顔にあっけらかんと空晴れて  
酔海雲に口をすぼめて梅雨夕べ  
卯月曇り訃報に某の妻とあり  
あらがねの光放てり泰山木

ひるがほは時間を湛えゐることし  
藻の花の懈く光れり阿字ヶ池  
白濤の絶えず起つなり枇杷の沖

新庄

うす濁り夏に間のある最上川

発電風車

夏来迎ふ風の悪所の風車

山麓は青田曇りの庄内路

栗の花白雲洩れて日が射せり

くさぐさの夏の果（このみ）を庄内路

羽黒山

汗たじたじ羽黒権現三の坂

霧の香に八百萬神在す羽黒山

羽黒山のぼれる汗も有難や

羽黒山けふは飛鳥見えぬ茶屋

二の坂で音（ね）を上げ聞けり時鳥

有難や苔を褥の修験道

霧の坂羽黒詣での息整え

羽黒山足下を蟻も登りをり

心臓を病む身に夏の修験道

修験道夏の霧吸ふ苔の道

参道を少し外れ摘む木苺を

参道の笹に大きなかたつむり

苔に雨羽黒山麓息づけり

霧の中羽黒詣の深呼吸

青田中掛け値なく美し大鳥居

南谷

黒蟻の這ひみるばかり南谷

森青蛙孵りて鳴けり南谷

南谷桜の古株梅雨湿り

三脚据え鶴撮らんと首手拭

幽明の蝶たゆたへり南谷

南谷ヤゴがのぼれる杉木立

南谷いもり泳げる池ほとり

蔓でまり木立をのぼる南谷

篠の子の木雫浴びて南谷

南谷ここがさうかと扇子して

夏霧を今もかほらす南谷

走り根に梅雨黒びかり南谷

梅雨濡れの木橋二つ目南谷

南谷去年一昨年の杉落葉

河骨の静まりかへる南谷

羽黒山門前

霧被り羽黒詣の随神門

爺杉の靈力霧を生み継げり

夏木立間に轟く祓川

羽黒山某院某坊四葩咲く

羽黒山三十三坊霧の中

板蕎麦を待つ間頭上の蠅を追ふ

またたびの葉の照る羽黒参道口

麦切りに羽黒の清水使ひけり

板蕎麦を頂き羽黒の清水乾す

雨烟る羽黒講宿女貞

茶屋の婆勧むを抓む民田（みんでん）茄子

羽黒山茶屋の突きだし民田茄子

羽黒講宿坊額の花盛り

麦切りを小屋に羽黒麓茶屋

山頂

涼しとも蒙古撃退成就の鐘

羽黒山大鐘露を生みにけり

垂直にこゑを落としぬ蟻地獄

霧のこゑはつとしたり蟻地獄

鏡池

森青蛙けくと神意を告げにけり

夏霧のゆっくり動く杉の間

霧霽れて三神合祭殿葺替

羽黒権現茅葺霧に波打ちて

蔓でまり羽黒権現靄懸り

羽黒詣で了へておかしき蝶番

羽黒権現姥百合に霧ながれけり

河骨のきんきらきんに山蛙

森青蛙産卵楓を選びけり

遊船に夏の灯の入る酒田港

鶴岡

象潟

枝豆を植えに植えたり秋田富士

雲の峯立つに間のある羽黒山

刈草の幾日経つらん早苗いろ

せせらぎに未だ丈を得ぬ青すすき

栗の花廃屋傾ぐ村はずれ

四方青田ここは庄内柿の里

田草取月山臨む裾野田に

庄内の夕日小川の軽鴨に

夏霧の中秋山は鳥海山は

ただちや豆採り頃前の旅にして

酒田

若葉して敏達（びだつ）七年噴火の山

この向きの夏秋田富士よかりけり

ブナ青葉して鳥海山の保水力

プランクトン食うて夏ガキ太る海

鳥海山の夏場の雨の桁外れ

象潟の合歓を襲ひし雨後の風

合歓若木象潟の雨誘ひけり

岩ガキ漁解禁の海前にせり

葱坊主越しなる象潟小学校

鳥海山の湧水夏ガキもたらせり

鳥海山の裾野馳せくる夏の雨

鳥海山の長き山脚海霧に入れ

酒田港

蚶満寺

夏霧に溶け込む漁船酒田沖

刈草の湾を漂ふ終のいろ

刈草のながれゆくなり最上川

港に浮き河下り来し刈草にや

酒田港半夏の夕日落つるまで

梅雨夕日しづしづ沈む酒田港

出船所ウッドチェアーに海猫の糞

夏牡蠣

名札立て商ふ岩ガキ小砂川産

海猫アジュールライン ニューとびしま

目の前で割かれ象潟夏場ガキ

夕卯波飛鳥航路の船揺りて

夏ガキは鳥海山の雨の味

刈草の岸壁に寄る酒田港

目の前で割りて夏場の岩ガキを

夏来迎ふ酒田の夕日屋並の間

岩礁に人夏ガキでも採らん

指させる岩ガキそれを賞味せん  
旅土産子規も啜りし夏ガキを  
旅人の喉に納まる夏場ガキ  
雨しぶく露店に夏ガキ注文す  
鳥海山の溶岩（らば）めく夏牡蠣二口に  
岩ガキに岩ガキ積み上げ商へる  
岩ガキ買ふサイズあれこれ惑ひけり

玉川温泉

自炊場に打ひびかせて山清水  
首筋にヒリと梅雨入の酸性湯

大沼

木道いつぽん滴る山を前方に  
いっぺんでウラジロヨウラク好きになり  
同音にヘエと女ら銀龍草  
呼ぶこゑに後戻りして銀龍草  
イボタの木イボタの花と指されても  
雨水輸出で入りつして細蘭  
八幡平雨のほひの銀龍草  
転がれる向きを気にせず落し文  
露叩き上がりし雨が嘘のやう  
霧呼んで行儀の悪き岳樺  
銀龍草女五人に囲まるる  
木道よりもうせん苔に目を凝らす  
をみなの手ツルコケモモをまさぐりて  
沼渡る雨やワタスゲずぶ濡れに  
ワタスゲの雨吸ひ過ぎて絮のしよげ  
木道を伝ひくる音水芭蕉  
一雨に沼の嵩増す蛭蓆  
襟首に沼よりの風コバイケイ草  
一雨に木道の濡れ青葦原

田沢湖  
生保内（おぼない）の青田しんしん鎮守の  
森  
湖に日の一刻射し込む夏薊  
またたび過ぎ又またたびの八幡平  
またたびに杉間のみどり深きかな

杉叢の間にまたたび瞬けり  
墓のうら植田のみどり湛えけり  
またたびに降りだしさうな出羽の空  
鳩の湯の辺りや朴の残り花  
何だろと見上げて朴の残り花  
後生掛温泉

天候は出たとこ勝負夏嶺行  
後生掛の燕拳げをり地獄谷  
生保内節短夜の湯に響かせて  
一驟雨青森椴松濡らし去る  
梅雨蝸湯治話が長くなり  
虎杖の葉に雨音の大きかり  
後生掛の湯治棟見ゆ虎杖越し

湯治棟

郭公に自炊煮炊きの火を強く  
自炊棟その間を飛ぶ岩燕  
もう覚めて燕の飛ぶや湯治棟  
半夏生朝が来てゐる自炊棟  
くさぐさの病ひ秘し入る青葉の湯  
自炊棟軒燕翅ひるがえし  
煮炊きの火こもごも半夏の自炊棟  
漫画本手にし半夏の湯治棟  
腰痛の腰を引きずり夏湯治  
硫気顔撫でられ夏曉の露天風呂  
青すすき露を止どめぬ露天風呂  
夏曉の湯浴びに湯治の床もぬけ  
揭示して句会のチラシ湯治棟  
日焼け爺指折り後生掛俳句会  
辿りゆく手摺り霧冷え湯治棟  
湯治棟半ズボンもて仕切りけり  
湯治場の網戸に虫の灯を取りに  
浴衣干す針金ハンガー湯治棟  
かがんぼの閉じこめられし湯治棟  
湯治棟窓に手拭覗かせて  
三々五々伏寝の梅雨の湯治棟  
雑魚寝して団扇片手に湯治人  
場所割りの市松模様湯治棟

六月の自炊棟廊冥く長し  
蚊の姨に消灯時間湯治棟

湯治人煮炊きの火使ふ六月尽

うしみつのががんぼ離る脱衣籠

老鷲にぼうと朝の煮炊きの火

郭公にぼちぼち起き出す湯治人

自炊棟短夜明けて煮炊きの火

郭公に湯疲れの身を漂よはせ

郭公にとろんとろんと睡りかけ

自炊場に梅雨の炎を挙げガスコンロ

湯治人ボソボソ話しみる夏夜

湯治人涼しむ手持ちの烏龍茶

#### 散策路

落し文早出の旅の足先に

郭公に歩めば腸の整ふか

鳥博士俳句仲間に一人欲し

椴松に渡る風見ゆ遠郭公

探勝路半ばに聞けり時鳥

硫気・夏霧笹を枯らして流れけり

ぐつぐつと煮ゆる泥湯や雲の峯

小坊主地獄

灼け湯元八大地獄のその一つ

小坊主地獄夏草泥に照り負けず

泥湯噴く芒が根元微濁音

湯けむりの翳の這ひゆく青すすき

夏草にろんろんと鳴る蒸気孔

木道ゆく吾を打越して時鳥

木道の先へ先へと遠郭公

時鳥囃せば郭公啼きそびれ

同行女人

日傘して噴湯と心音一つにす

懸巢翔く椴松より椴松へ

時鳥渡りソラビソ林の上

ゼンマイと云ひかけコゴミと云ひ直す

破れ傘花かかぐ茎間延びして  
行けど行けど似たやうな路ブナ若葉

#### 八幡沼

雪溪の風パと絶えて浮塵子殖ゆ

吹かれゐて雪溪いろのナナカマド

雪溪の風に椴松頭を削がれ

雪溪の風にウインドブレーカー鳴る

雪溪のなだるる横に八甲田山

雪溪の横のシラビソ林描く

雪溪の風を受けつつスケッチす

雪溪に迫力山小屋眼下にす

残雪の落ち込む地塘深翳り

焼山に残雪二夕刷け眼下に小屋

雪溪の半ば風向き変りしか

高嶺草雪溪瘦せて来たる辺に

人寄せてその名は知らぬ高嶺草

雪溪の風横殴りミツガシワ

雪溪の風がたらさうヒナザクラ

雪溪を見下ろす柵に蟻を見つ

浮く塵をすいと離れて水すまし

山風の荒くて小柄水芭蕉

細菌の影地塘の底に届かざり

カラマツ草九十がらみの媪見る

股間より覗く地塘のチングルマ

木道に払ひ浮塵子のごときもの

山の雨霽れて浮塵子のごときもの

返事怪し夏草の名を問はるゝに

話声びたりと止まり岩鏡

木道に杖止めワタスゲ魅入る女（ひと）

木道をダッコバンド負ひ夏帽子

岩木・岩手・森吉の見ゆ夏の嶺

茶臼岳コース下り来て花談義

峯雲が聳ちてむくむく畚岳

レストハウスでキヌガサ草の話など

青嶺下りバスの向ふは盛岡

見返れば峯雲の立つ八幡平  
夏山の広がる裾野の先に町  
翠巒の風岩燕吹き落とす  
盛岡駅まで揺られゆく登山帽  
足首の屈伸運動登山バス  
乗車して青嶺の裾野育ちの子  
青嶺攀ずよろよろ岩手県北バス  
又一人客を拾ひて登山バス  
昼寝覚岩手県北バス後部

#### 盛岡駅

旅人に盛岡駅の作り滝  
滝頭より鳩の翔つ作り滝

関節を鳴らし甚平やおら起つ  
夏椿杳と石門明けにけり  
海猫の糞透明に夏至明けにけり

八幡様櫂青葉の擦過音

古団扇カタカタ鳴らす夜なりけり

夏の日の漲る空の下に海

えらい日の続く庭木を網戸越し

まんべんなくはらからのこと願の糸

俄仕立の朝顔棚を設えぬ

メリハリつく家居風鈴吊りてより

半生を振り返るごと麦酒乾す

清拭の手拭い絞り暑に對す

独酌の胸乳へ送る団扇風

鳴神の幕引とんと目途たたぬ

千里如面山ぶだう酒の送り主

昼顔閉づしっかり花の稜（かど）立てゝ

時余る年金暮らしに時計草

夕立の音立てゝ街呑み込めり

朝顔のくたんと十時廻る日に

花火了へ戻れる人の誼み顔

棚咲きの朝顔に風縦横に

港みらい虹を立たしめ娶る君（横浜ランド

マークタワーにて）

山ぶだう酒渋味（タンニン）と云ひ酸味と

云ひ

浜木綿をあほる浦風祭り来る

灸花まじまじと見て過ぐるのみ

合歡の花昨日の驟雨忘れをり

昼顔の花閉づる刻来たりけり

町雀けふは夕立まぬがれて

遣り過ごす韋駄天驟雨バーガー店

夕立が人を走らすバーガー店

自転車は礫と消ゆる浜おもと

箆枕年金暮らし快適ぞ

酒にして贈らる岩手の山葡萄

山ぶだう酒持病直せと賜はりぬ

ぶだう酒のコクに喉（のんど）のこだはり  
て

山ぶだう食（お）して強かれ心の臍

心の臍山ぶだう酒に整えん

山ぶだう酒いろの血流身を巡り

迅雷の合間合間を雨の音

入れ替はり立替はりして雨と雷

風鈴も鳴りを潜めて迅雷下

浪々の身をいまさらに昼寝覚

林火忌を憶へばそれに連なるひと

林火忌の朝動き出す街の音

白昼の真中に覚めて白縮

あらためて大暑と聞きて太吐息

白雨の飛沫のなかに街かすむ

空蝉は白雨飛沫を浴びてをり

空蝉のそもそも語り遣る孫に

空蝉をおっかなびっくり抓む指

ながらへし夜店の金魚一揺らぎ

蝉脱の高さも夏の菊の丈

夏バテに躰動かし拭掃除

我起居棚朝顔の数持み

ほてい草うすむらさきに昼の過ぐ

祝ぎごとあり葬の紺溢る晨

白縮一枚以て暑を凌ぐ

一對の燕の描く飛翔線（祝婚）

縮のシャツそれもと妻の追剥ぎめく（洗

濯）

汝が廚処より現るごきかぶり（妻へ）

汝が領分廚より現る油虫

油虫触り犯せるものの数

油虫下見の現場灯さるる

パソコンの画面を舐めに油虫

ごきぶりのちらとこちらを見て隠れ

一つきり金魚屋に咲く布袋草

雁来紅落ち目の彩と見たりけり

音曲に合はせて咲くか烏瓜

真昼間のみそはぎのうち解ける彩

もう構へず胸乳に送る団扇風

烏瓜窺ひ咲ける夜の怪し

埃だつ畳の感触昼寝覚

熱帯夜はと覚む夢のもうこりごり

晩夏の妻言ひ負かすにはあらねども

隆々と瘤大寺の百日紅

太幹にしてなかなかの百日紅  
紅極む百日紅は寺に置け  
みそはぎの紫ならん寐覚の眼  
みぞ萩の風あることを知らず花穂  
青芝がぐんぐんボール落下点  
墓地垣の片陰の中歩みけり  
墓守にすれ違ふ径暑のさ中

雄日芝に雨透きとほり透きとほり  
過ぐるこゑへくそかづらと言ひ捨てに  
銀杏の生る木生らぬ木思し召し  
昼顔も小振りに花の了り方  
つんつんとへなりと野辺の秋草は  
日曜日はやばや隣の秋灯  
浅間山まだ嘖くといふ秋の暮  
浅間山鳴動ひそめ秋の暮  
陋巷に秋冷到る並木より  
地区図書館朝涼の顔集はしめ  
図書館に甚平で来て本待つ間  
図書館の席取りの列今朝の秋  
図書館の窓秋冷の到る楡  
図書館の中庭に秋待てる樹々  
秋色のこれより亘る街並木  
昼顔の残りの花期を尽してや  
秋草の末廣がりに晝の雨  
捨て置かれ珊瑚樹の実の爛れ彩  
穴感通しどぎまぎしてゐる妻  
来客にすててこの腰泳がせて  
すててこで通しこの夏了らんと  
すててこのまゝ出て受け取る回覧板  
紅芙蓉ゆふべの雨に重くれて  
樟青實朔日の雨上りけり  
しじみ蝶雨の香を曳き雨後の庭  
しじみ蝶抓むその手のみぢ大(孫 美雨)  
新田でありし地名残りの萱数穂  
ゑのころに起つ朝風の行方みる  
萱初穂泥亀新田たりし地に  
かなぶんの喰ひ破る葉の穴数多  
峰雲の力づくにて作りし塔  
折り返しべつたら市を物色す  
面白がり方に百態敗荷  
山風の当たる櫛より紅葉せり  
腹に据えかねるところをはたた神  
仮綴じの蛾の翅一片零れをり  
芙蓉の明例ふるもの見つからず  
午から晴れ芙蓉の気色とりなおす

船蟲に持ち場持ち場のあるごとし  
煮浸しの鯉を返す八月尽  
好例と引き合ひに出す集(たか)る蟻  
切返すごとくに白雨上りけり  
昨(きぞ)よりけふ気力の優る紅芙蓉  
まるっこく仏がほして秋の鯉  
世間体そんなものはと敗荷  
かまつかに殴りかからんばかりの雨  
すべりひゆ繁茂なにぶん古き庭  
苦瓜の渋面雨に叩かれて  
百日紅再燃雨の日曜日  
黒文字の若木購ひすってんでん  
隼人瓜当世風を通しけり  
バクテリアや虚数のごとき働きを  
小用を足しに葎の真ただ中  
長たらしき呼び名の火花揚がりけり  
あめんぼの鏝迫合の何時果てる  
乙姫の使い走りに楊子魚  
言外にくみとれるものおでん酒  
芙蓉咲きこつちを向ひて呉れぬ花  
気転能く利くひと秋の空の下  
向日葵の列縦隊駐屯めく  
花芙蓉静寂を破るものも無く  
ちやうちんあんかうへんでこりんな竿立て  
ゝ  
着飾りていづれが鴛鴦のナンバーワン  
綱引きのここが分かれ目ふんばれよ  
秋雨の次々搏てる葉の強(こわ)し  
口許に力を入れて綱引す  
抜読の文庫本閉づ夜の秋  
空模様芙蓉は彩を使ひ分け  
浮足立ち晴天の日の花芙蓉  
枯蠅螂矍老師然として  
十二月ごたごた事を溜め込めり  
はたた神患ひごとくに付込めり  
徒浪の十一月となりにけり  
徒浪の盆供曳きては打寄せぬ  
物惜しみせぬは芙蓉の境地なり  
風の日々早呑込の芙蓉咲く  
解禁の海女の磯入り礁蔭

夏草に雨横なぐり五能線  
藺枕に首転がしているうちに  
指先に団扇の当る昼寢覚  
独り言ひ独りうなづく昼の虫  
聞き分けて違ふ虫の音三つほど

雨に馴れ雨の隙とぶしじみ蝶  
かさぶたを搔きこはす癖八月尽

新涼やあらかた骨の膝小僧

土埃立つ道にこそ田村草

鮑金（がね）一丁持って海底へ

かまつかや来し方透いてみえるとも

犯人を妻の見破る夜の秋

朝顔の数の引算晦日へ

紅蜀葵倒れ易きを立たせ咲かす

芙蓉咲きけふもぼんやり日を過ごす

颱風裡常と変つて桂浜  
ズタズタに四国分断颱風裡  
手始めに四国を襲ふ風颱風  
颱風列島放映潮岬より  
やられしは九州一円出水の景  
颱風の斯く荒れをると鳥取港  
くさぐさの鉄路運転見合はせて  
茶の間にも寄せて颱風余波の浪  
吹き込んで来るもの颱風余波の雨  
泣き面に蜂の颱風まだ来るよ  
颱風禍まざまざチャンネル切り替えても  
颱風のそれは無いだろ土砂崩れ  
お隣りの芙蓉にけふの気色あり  
暇さうな蠅虎も秋のもの  
夾竹桃一兵卒の戦記読む  
放映の龍陵会戦裸でみる  
ユリの木植え街もモダンに人もモダンに  
白雨の中来て新聞配達夫  
かまつかの焰あかりに種宿す  
生りものを愉しみにして秋の庭  
白雨が打つなりこんどは遠くの葉  
草と草擦れ合ふ音も秋のもの  
芙蓉咲くその時期おほよそ正しかり  
尿に起ち虫音の滋き夜と知れり  
鶏頭と言へば十二所光触寺  
昼顔にピエロの面白重ねて  
秒針のいよいよ頭てる虫時雨  
昼顔と萱取り合はせ一輪挿し  
寐落つまで耳が遊んで良夜なる  
虫音聞き踏みしむ真夜の厠板  
水中花活けて愉しむ気などなし  
小雨にもすぐに馴染みてしじみ蝶  
また夕立こどもだましのやうな空  
裸癖つきし家居を改む秋  
朝顔の種採る愉しみこれからよ  
ガサつける辺り一変法師蟬  
家ぬちより涼しき風の通る路次  
秋の蟬ばたと物の落つやうに

けふも雲見て秋風を心待ち  
さきに寐し秋夜の妻の後向き  
飽きの来ぬ豆腐が無難冷やし酒  
新諸選るずんぐりで無く痩せて無く  
ラバウルに灼けし零戦見て船旅  
かなかなのそれも時折夕餉まへ  
朝顔に水やる朝の内がよし  
よその子とすぐうちとけて水遊び  
曉蝸教ふるこゑに重なりて  
あと幾たび団扇を使ふ日のありや  
白雨の仕上げに風を送りくる  
曉蝸それも一回きり薄明  
母の写経始まる朝の遠蝸  
煉瓦塀へボン住みしほどの辺り  
急雨来る韻き裸にはおるもの  
秋雲の一瘤駱駝めくが往く  
生白き流れ雲ゆくもう秋や  
居ながらに高浪映像颱風裡  
昼顔を風が素通りしてゆく許り  
新涼の街路樹亘る風が見ゆ  
石火矢のここに炸裂まんじゅさげ  
取り敢えず右から廻る蛭蓆  
虫の音が通り易くて草の隙  
さき尖り吾を刺す草秋さざす  
天下の険もみづるにせよせぬにせよ  
はつなつの草の起伏をなだめ雨  
ゆつたりと構へ芙蓉の安息日  
白雨が水路作れり日照雨  
町雀群れなすことも秋はじめ  
芙蓉喰ふ虫まんまるな穴開けて  
ぶらさがり止まりが好きで秋の蝶  
土用浪船首のやうに岬伸び  
昼顔が金網攀ずる変電所  
屯してロウソク立ちの曼珠沙華  
芙蓉とぎに驚くばかり巨き木に  
興が湧き敢えて葦咲く道を探る  
芙蓉散り法器のやうなその落花  
良夜めく思ひを萱の一輪挿し  
うち捨てゝうち捨て倒る敗荷

曼珠沙華空気愉しむ季来たる  
秋草の風に打合ひ古ぶ穂か  
栗御飯味はふためにあと黙す

何時からや大人ばかりの栗ご飯  
こおろぎの音を借り今宵先師のこゑ（林火  
忌）

曼珠沙華一ト花咲かす土貧し  
はるばると秋刀魚は南下この刻も

西日の日々つつしむものに無駄費（つか）  
ひ

秋刀魚など贅沢肴は豆腐でよし  
紹興酒晩夏の酔ひのよるべなく  
百葉の長よ身に入む紹興酒

独酌の秋先取りの紹興酒  
竜淵に潜む色愛で紹興酒

秋雨降り四辺おちつく紹興酒

先師師と思ひ巡らせもみづる中  
生しらす商ふ旗に秋の雨

万願寺とうがらしとや火の恋し  
賀茂なすの素の味秋はもうそこまで

かなぶんのぱたと何處かに秋の居間  
暈這ふ秋のかなぶん背のみどり

池といふ器のかたち秋高し  
 天高しなどと称して老い過ぐる  
 天高きまでとはゆかぬ街の空  
 木の葉髪刈られ仕上げに耳の毛も  
 耳毛きる音も爽やか散髪屋  
 仰臥日誌秋果むさぼり止まぬ段  
 うすべにの芙蓉の日色掬ふ風  
 箱蒔きの槍鶏頭の尖柔し  
 曇り日の雲抜け芙蓉に射す薄日  
 糊の効きわろき秋暑の古切手  
 蕎麦啜れば風船葛越しに風  
 お隣りの起き出すけはひ花芙蓉  
 山頭火水を求めて里の秋  
 その殻も薄手に秋のかたつむり  
 菊にゆるく萩にしつかり縄結はえ  
 塩原をトテ馬車のゆくもみぢ季  
 句会まへ一杯ひっかけ焼鳥屋  
 晴天に割るゝことなき熟れくわりん  
 木斛実に盟友いつか遠ざかり  
 机の上片づけぬまゝ秋初風  
 曇日のひかり押さえてねこじやらし  
 初秋の眼鏡置きしは机の筈  
 秋の水一輪挿しの瓶のぼる  
 屁理屈の一つもなくて水澄めり  
 理屈などなく澄む水でありにけり  
 理屈などなく澄むものに水と空  
 曼珠沙華ひよろひよると伸ぶ頃ほひか  
 秋草に舗道余熱を持ち続け  
 豆腐屋が近所になくて茗荷どき  
 ぼりぼりと煮干し肴にぬくめ酒  
 寸酌の手許明るし秋灯  
 読みかけの箇所を探すも秋灯下  
 通りがかりのもう吊つてゐる秋簾  
 秋扇開いて閉じて思案事  
 蜘蛛の囿の獲物にこれといふもの無く  
 吾の掛かる他に餌の無き女郎蜘蛛  
 毛虫捕るもうそのあとは盲打  
 一合と決めたら一合ぬくめ酒  
 濁り酒飲み過ぎ許してはならず

菊師また菊を育てゝ二本松  
 秋旅の小物揃えも支度の裡  
 蜻蛉が止まりて石のつぶやける  
 甚平と作務衣の間の冷え込みよ  
 穴惑出さうな日なり庭に佇つ  
 眼鏡拭き玉砕シーン敗戦日  
 鮎落ちゆく奥羽山系藍を増し  
 秋の蚊を打ちて血しぶき浴ぶ肌（はだえ）  
 物陰に隠るまで追ひ蚊の名残り  
 再来の秋の蚊遂に仕留められ  
 履物に妻の温みや後の月  
 養生は一生のこと水引草  
 かぼす貰ふそれでは今晚秋刀魚にしよ  
 朝顔のぶり返し咲く今日の数  
 鶏頭の黒づむまでに装ひて  
 庭石に懸かりて楚々とこぼれ萩  
 小康といふべき日々を槍鶏頭  
 風はまたひかり伴ひ猫じゃらし  
 しぶとく咲く朝顔諸との掛け合はせ  
 コンビニの老人向けに売る秋果  
 庭植えの数へるまでもなきくわりん  
 秋風が見えるが如く眼鏡拭き  
 長き夜のごろ寐して読む手が痺れ  
 食卓に愛でてゑのころ一輪挿し  
 秋草を手折り戦がせゆく家路  
 大き梨半分ほどを妻とかな  
 為し得ること為し得ざること鳥雲に  
 一合が習ひの晩酌衣被  
 二人して食ふには大き梨折半  
 梨を剥きその一片に楊子立て  
 子の帰宅待ちある妻に梨を剥く  
 朝顔の了りといふに伸びる蔓  
 家苞のそれが発端むかご飯  
 長き夜といふはこれから二十日月  
 梨なんぞ剥いて無聊の手を濡らす  
 刺客篇読む地虫鳴く夜の底（史記）  
 秋日差布団の芯の熱ぶまで  
 野っ原が宅地に変り秋高し  
 ばんばんに布団膨らみ秋高し

次から次あさぎ揺らして湖の波  
絶え間なき風に小躍り花芙蓉  
ものの果て見届け種を採りゐたり  
日毎見て朝顔種採りまだかいな  
秋引き寄すけはひ一日一日が  
虫しぐれ風に掬はれ掬はれても  
かたつむりばたばた落ちて秋の庭  
花サルビヤ旺んに空澄みみたり  
サルビヤと言ひ退ける人目敏かり  
断ち割れる梨は芯まで冷えてゐし  
風湧いて風船葛を掌  
槍鶏頭張り合ふ天の底抜けに  
花瓶の水取り替える音涼新た  
とりとめなく秋の日注ぐ草っ原  
捨て置かるものにごろ寐と秋団扇  
十月からゴミの捨て方変る町  
夾竹桃片陰恃みそこ出でず  
秋暑なほ石の祠に赤鳥居  
湯立神樂日に日に秋の日は透きて  
秋麗の宮司は佐野家湯立舞  
街路樹の間吹く秋の風漫ろ  
ユリ落葉二三歩足につきまよふ  
安穩のいつまで秋のかたつむり  
擦れて鳴る並木の木の葉秋浅し  
だんまりの一人家居や花芙蓉  
草っ原一つ潰され槌の秋  
茗荷の子けふ採れたれば昼は蕎麦  
土用秋芽先日缺いてけふまた缺く  
新聞の手重りそぞろ寒の朝  
そそくさと用足し了る秋暑の町  
黄落期風も漫ろに歩も漫ろ  
花芙蓉ひるむところを風毬打  
まんじゅさげ薙ぎて悪餓鬼健在ぞ  
へし折らるために生ひ来し彼岸花  
寺町の一本坂道夏落葉  
木斛の赤実覗ける寺の垣  
寺町の秋を尋めゆく坂がかり  
赤門を潜りて曼珠沙華の道

鳴声のみんな遠くて秋の蟬  
鼻缺けし石の狐と曼珠沙華  
仁王門めがけて来たる秋の蝶  
言葉尻かなりしつこく法師蟬  
秋興の日曜画家に亀の鼻  
蟬の穴そこに在りけり画架の横  
一尊を拝し出づれば曼珠沙華  
初秋の言葉交はしつ写生会  
蜻蛉がちよつかいだして蜻蛉に  
ゐのこづち払へるこゑの大わらは  
称名寺裏山お化け八重葎  
さちさちの行方辿れば葉の揺れ処  
蟻達がどうのかうのと蚯蚓曳く  
法師蟬念の入りたる納め方  
曼珠沙華見えてきて描きかけ絵筆とる  
立木より日は洩れ易く曼珠沙華  
太鼓橋少し色抜け曼珠沙華  
実時の殺生の戒曼珠沙華  
曼珠沙華水面に映りお曼茶羅  
沓履きて古刹の秋のあめんぼう  
曼珠沙華難しいともその描線  
秋の池描く水面を広くとり  
山これより化粧へるけはひ榎の実  
そこ動かぬ蜻蛉にたうたう根ン負けして  
青鷺の直立陶ではあるまいに  
墓域より人家へ飛んで曼珠沙華  
蜻蛉の翅しろしろと夕づける  
まんじゅさげ阿蘭陀屋敷の唄が出て  
どこそこが色づくとなく孔子木  
楷樹ありまた来る頃に色づかむ  
秋暑のこと家鴨に言ってもはじまらぬ  
車椅子その高さより曼珠沙華  
新譜の出たてを睨みつつ過ぎぬ  
寺町の子の下校みち玉すだれ  
雄日芝のざつくばらんのあな手強(てごわ)  
かたばみは秋の花つけ敬老日  
朝顔の咲き継ぐ花の締めくくり  
池越しに家鴨のけんくわ神の留守  
ローマピザ薔薇の芳香の紅茶淹れ

ピザ生地をまだのし足らぬ秋の昼  
めつきり秋らしくなる日をピザ焼く香  
水揚げのよき秋草の一輪挿し  
道草の雄日芝摘み来て一輪挿し  
生きのよき萱を折り来て一輪挿し  
ゑのころを束ねて卓の一輪挿し  
日もちよき一輪挿しの狗尾草

金澤文庫称名寺の庭園は奥州平泉毛越寺の  
それと同形式なれば

毛越寺式庭園今に曼珠沙華

これもって無聊引き締む菊脛

押相撲裸叩いて観戦す

白星の一つ一つが押相撲

相撲見て膝を叩いて晩酌や

負相撲鬻が全てを物語る

負相撲開き直りを期待せむ

叢雲の縁といふ縁秋夕焼け

須臾の間の秋夕焼けを爪立ちて

裏山を歩いてアキノキリン草

満腹の腹先すっかり虫の闇

炊事まだ終らぬ妻に虫滋し

長き夜の水を一杯飲み不起つ

虫の音のけふは身近に六畳間

ねずみもち植う家主の顔見たし

サフランの鉢植えなどして建ちし家

余所者として空稲架をあふぎをり

街道に沿ひてぼつぼつ稲架立つ邑

稲架棒の風雨に瘦せて寄る年波

のっぺりとしてゐて稲架の棒勁し

稲架組んで田につくねんと棒の影

草虱はたき合ひゐる音のする

稲あかり飛び込むガソリンスタンドあり

前をゆくお尻の辺り草虱

浄見寺 大岡越前守墓所

秋興の忠相の墓所尋め当てぬ

忠相の生れ在所や諸島

秋情を籠めて寺林のヤブニツケイ

零余子蔓引つ張つてなほ辿る径

零余子採小粒ばかりで止めにけり

竹林を栖に秋の大きな蚊

諸畑に束ねきれざる蔓の山

道つけて蚊遣りを腰に山仕事

一幅の絵をみるやうな栗の附置

青と茶の間（あはひ）を刷きて栗の毬

毬栗の淡彩愛づる草の上

毬栗を割る重宝な靴であり

落栗の路考茶いろ帯び幾日経し

毬栗のやっかいな棘どうしやう

毬出づ栗太郎次郎三郎と

がさこそと音のしてゐる栗林

一箇所にとめて栗の毬を割る

山日和糸引くやうに栗の落つ

おのづから山の日和に栗爆ぜぬ

風小僧落としてゆきぬ山の栗

栗林二三日強く風吹きぬ

拾ひ来し栗茹でる火のもどかしく

吉田牧場

案内を乞へる牛舎の秋の昼

秋の蠅集（たか）る牧牛見せ呉れし

たまらんと牛も首振る秋の蠅

牛に蹴く秋蠅も飼う牛舎かな

牧草の微風受けつつ秋の色

草の名を数え上げゆく牧の秋

牧草の隙より洩るる秋のこゑ

ひゆるひゆるり牧草の隙昼の虫

秋草食む牛に逆光しかめ面

犬蓼の彼方に牧の馬と牛

秋蝶の来てゐる牧の畜霊碑

黒牛をわつと離れて秋の蠅

づかづかと獣医秋暑の牛舎に入る

秋天にかざし獣医の注射針

干竿に牧夫の作業着秋晴るる

日に爆ぜるものの音して牧の秋

爆ぜ擦れるものの音して牧の秋

牛舎より牛のもうもう赤のまま

牧牛の尾を振る他は秋の風

牧場にて貰ひ来しもの草虱

吾を馬と間違え牧の虻が来し

蜻蛉の咄嗟に我を交はしゆく

鶏糞のふんぶん秋の昼深し

青团栗踏みしめゆけば古墳群  
円墳を打ちてしやまぬ椎青実  
刺しに来る古墳の秋の執ねき蚊  
へらへらと蜻蛉の翅日にかざし  
吾亦紅山間を風吹き抜けに  
風が風追ひ越しゆけり狗尾草  
菊芋と凶鑑で識れり手折り花  
じはじはと化粧ふ端山でありにけり  
化粧ひ甲斐なき里山でありにけり  
里山の化粧ふと云へば化粧ふ彩  
銀杏落つ日はありながら風日和  
銀杏のよく落つ日なりと石狐  
掃き浄めゐる新涼の石畳

芋虫のごと馳す電車秋風裡  
茅ヶ崎 えぼし  
品書は天候次第夏魚  
しじみ蝶降り立つほどに石露けし  
開き閉づ翅の切なし秋の蝶  
菊芋の長けて切なきまで青空

人体の不思議展 東京国際フォーラム  
秋冷の東京に出て人體展  
ガラス張り回廊色づく樹木の上  
タブー視の垣の払はれ人體展  
正視して絶景秋の人體展  
異空間現出秋の人體展  
うそ寒しプラスチックてふ手法  
プラスチックとは組織や器官を出来る  
だけ生きている状態  
に保存する技法。シリコン、エポキシ、  
ポリエステル系統の樹脂  
を献体にしみ込ませる。  
そぞろ寒自律神経系標本  
人體展もみづるものに骨格筋  
わが患部心臓もあり人體展  
もみづりて全身血管附置標本  
如実とは管・筋もみづる人體展  
正視せる人體標本うそ寒し  
尿管は腎臓を出て水の秋

做蛇笏（誰彼もあらず一天自尊の秋 飯田  
蛇笏 椿花集）  
標本としての脳天自尊の秋  
做漱石（仏性は白き桔梗にこそあらめ 夏  
目漱石 明治三十年）  
佛性はここにうそ寒神経網  
鼻に通る秋風人體展出でて  
人體展出でし身色無き風の吹く  
人體展出でて何やら自尊の秋

ORZO

ミーハーとして寄る秋の丸の内  
透ける日に秋のタンポポ駐輪場  
甲乙なく春のタンポポ秋のタンポポ  
ハイキングコース入口秋タンポポ  
ハイカーに秋のタンポポ歩の弾む  
金屎（かなくそ）の如き零余子を金澤山（き  
んたくさん）

碧揚羽に蹤きて六国見山へ  
蜻蛉に石段は無し吾にあり  
蜻蛉に無き石段が吾にあり  
山に摘みこれも双子の零余子なり  
小庵の空蟬耳門の簷のうら  
北鎌倉始めての路藪めうが  
寺町の細路残んの百日紅  
綿虫に道を訊きゆく多聞院  
わず玉を煽り横須賀線の風  
言うならば葛這屋敷荒れ屋敷  
土盛りしそこが山頂草の花  
山道に登音待てる猿茸  
萩叢の横より突き出すボンネット  
洋梨の油絵一つ洋菓子店  
涼新た撫でて点字の賃金表  
櫛紅葉いろの皮椅子洋菓子店  
秋蝶の翅の内側化粧ふ智慧  
鎌倉の有為の奥山むかご採  
六国見山秋草に日が燦々と

六国見山風の間に真に法師蟬  
菊芋の跋扈仮バスターミナル  
活け花にフォックスフェース寫眞展

控えをる頓死頓生いぼむしり  
倒れ易き草花多き露の庭  
事もなき日の始まりの露葎  
移ろひゆく彩をとどめて葉鶏頭  
また母を其処に佇たしめ葉鶏頭  
看取りの日々芙蓉は花を幾つもつけ  
かまつかのこれが限度といふ紅蓮  
看取るもの看取らるるもの天高し  
鶏頭花妻に看護の日の永く  
種採れり介護まぬがる日の妻は  
妹に母を預けて花野行  
出来早き栗を茹でゐて明日子規忌  
子規庵の葉取り出し明日子規忌  
種採って収（しま）ひし紙袋の行方  
茶碗蒸し皮剥き少し手伝へり  
まだ青きも拾ひ来たりて茶碗蒸し  
くわりん落つ因見当たらずこれ自体  
A R S 版子規歌集繰り秋灯下  
身支度を待つ間水引草いじる  
身支度の間に馴れて昼の虫  
こんな筈でなかりし銀杏拾ひとなり  
また一人加はる銀杏拾ひかな  
浴衣の子はしやぎ了りて帰りけり  
ねこじやらし程はしやく子に育ちけり  
除けきれぬ雨の小径の猫じやらし  
蜻蛉の翅折る没日により深く  
花野歩き疲れ残りふくらはぎ  
虫の夜を揉みて遠出の疲れ足  
鶏頭のありし辺りの闇深し  
鶏頭の没す辺りの闇窺ふ  
冬珊瑚白き実殖やし秋始まる  
子規庵へ道筋忘れ秋の風  
子規庵に秋の草木の脈はしく  
朝寒の薬袋をひらく音  
燈台みち的を外さぬるのこづち  
猫じやらし一、二本摘みあと摘まず  
敬老の日を放映の「老いぬ脳」  
先んじて敬老番組二三日前  
捕虫網出会ひ頭の蝶逃がす

登り口団地の裏とよ草の花  
草の花山道のさき確かめて  
毒茸どうやら道を間違えし  
きのこ山へんなどころに踏み入りし  
数珠玉や使い途なき三角地  
山頂に憩へり秋の蝶と吾  
紅葉山道間違えておりてしまふ  
紅葉狩一行あらぬ所に出  
追憶の熟れ無花果は蠅呼ぶ木  
明月院横へ出る路葛の花  
実石榴のみだりに多くこの界限  
秋社の日鳩を追ふ子のいつか鳩  
ボート漕ぎ一方的に射す西日  
鳩に餌撒く婆ちゃんの敬老日  
秋風に馳せてころころ犬真白  
かまつかの関のこゑ挙ぐ容して  
ゆきつけの蕎麦屋の風船葛かな  
金網の外にも内にも猫じやらし  
川沿ひをい行く鰯など飛ばぬかと  
ねこじやらし老若の穂の入り混じり  
秋興の為せる句通りいっぺんたう  
旅のプラン菊人形の二本松  
秋季版時刻表繰り旅のプラン  
早紅葉湖畔に近き予約宿  
昼顔を見て過ごす日もあと幾日  
ときに執拗ときにあっさり秋の蟬  
お年寄駄菓子ほおぼる敬老日  
この木の実何の実枝毎へし折りて  
挨拶を交はしゐるかに虫二つ  
チツチツと虫の音刻む夕支度  
あっさりとけふが逝くなり秋の蟬  
くわりんの実ことし三つ程多かりき  
干鯛この頃気になる骨密度  
秋風の一撫でに飛ぶ机のもの  
黄落どき葉っぱのフレイディ舞ふ林  
秋麗富士頭を雲の上に出し  
虫の音を愉しみ月を愉しみて  
その間（あひ）を一風吹けり月と虫  
艶やかに月の面と虫のこゑ

点線の虫音と棒線の虫音  
適当に虫の名云へば直されぬ  
新涼の塔婆によきによき墓地の塀  
うろこ雲崩れの沖より戻り舟  
上棟の桧の香交じりに秋の風  
いつせいに鈴振り鳴らす朝の虫  
供花のいろ大方黄勝ち秋彼岸  
朝の虫甘露甘露と鳴きこぞり  
敬老日過ぎて常の日常の母  
秋風を切つて進める弁天丸  
継続は力と散歩赤のまま  
朝寒し犬は糞（ま）るもの糞りにけり  
目新しき卒塔婆の立つ秋彼岸  
足揃え打たれし秋の蚊なりけり  
美術の秋上野にぽんと降り立ちて  
あけすけに墓域の見ゆるまんじゅさげ  
空の澄み一つとっても奥会津  
秋暑くぶり返すもの舗道へ日  
萩を吹きなほ余る風嫁菜を吹き  
二夕筋に川を挟みて嫁菜道  
青栗や思ひ返して別の路  
バタと来て栗吹き落とす山の風  
誰一人拾ふものなき山の栗  
栗たわわ誰も出て来ぬ一山家  
岩道の岩の間埋めまてば椎  
椎の実の累々避けてとほる道  
亭々と無患子礫何時飛ばす  
隣よりこゑが飛びきて「秋雨（あめ）です  
よ」  
縮着て布団取り込む日照雨なか  
秋雨が降れば抱へて取り込みもの  
秋雨が洗濯物に隣は留守  
ぱらぱらと芙蓉を打ちて昼の雨  
鎌倉、宝戒寺  
無患子のよく落つ頃を訪はまほし  
もう一つ寺の自慢に巨（おお）無患子  
無患子の物打つ音も寺のもの  
布団に雨留守居の吾に出番あり  
飛弾人に聞いて棗の砂糖漬  
実のかたち凶鑑で調べ白木の実

虫の音の向うの家が灯に透きて  
新聞のパズル解きをり虫音のなか  
秋の夜の明るさ違え二夕間の灯  
廚より朝顔棚へ灯の洩れて  
再開す芙蓉咲く日をウォーキング  
猫じゃらしこずき妻とのウォーキング  
キス釣りのめいめい陣どる乗合船  
金澤八景、埋立地  
昔日の柳と鯉の川景色  
この辺で昔は鯉の引っ掛け釣り  
泥亀新田跡地柳が植えてあり  
数珠玉のさゆれに偲ぶ川の跡  
新聞を抱え白河夜船の妻  
秋風に飛びたる机のものを拾ふ  
風のなすまゝに虫音の吹き消され  
畳の上泳ぎ渡れる守宮の子  
夜歩きのそそろそろ守宮の子  
守宮の子あたり見渡し這ひ出せる  
守宮の子指のいぼいぼ持て余し  
灯に透きて指の疣守宮の子  
小さうして守宮の畳歩きかな  
秋刀魚の値上げ下げもなく過ごす日々  
秋風が攫ひに来るよ机上のもの  
机下に置く素足を含め秋風裡  
仲秋のひかり潜りてあめんぼう  
一つ拾ひどんぐり臭さどんぐりに  
代々の墓歳々の槍鶏頭  
日当りよき墓地の脇道秋彼岸  
顎の髯おのづから伸び秋彼岸  
鈴生りにふうせんかづらの書道塾  
煮立てる味噌汁の香が朝顔へ  
ウォーキング露けき朝日が真正面  
海はよき空気が流れ浜おもと  
新涼の味噌汁の香が舗道まで

りんだうの一鉢母を敬うに  
 川渡りかう来し猪と事細か  
 言いぐさの猪より荒く猪貶す  
 余所者に聞かせて猪の悪さごと  
 かうすればああ出る猪のいと憎し  
 半ばあきらめ顔に猪出し畑見遣る  
 畑直し猪よりずぶとく生きる婆  
 禍のもと猪出る裏の山  
 峡住みの畑作猪と根ン比べ  
 あめんぼううちよっかい出され遣り返す  
 あめんぼの団子となる迄遣り合へり  
 誕生日より栗づいて栗ご飯  
 目の合へば少しまごまごして守宮  
 へばりつく守宮の吸盤護謨仕立て  
 蹲る蜥蜴地熱と同温に  
 蛇穴に入る隠沼の裏磐梯  
 号令は天に向ひて花サルビヤ  
 だいぶ手を抜かれし案山子のご面相  
 月光に育つくわりんと思へりき  
 梅あげて柿を戴く間柄  
 ののさんに一つことしの庭の柿  
 仲秋の雲片づけに風が出て  
 夕月のくりくりし出すくわりんの上  
 庭へ灯の末広がり良夜なる  
 柿提げて庭から隣りのお爺さん  
 昼月の高さその後の夕月も  
 鯉山椒肴に酒は「末廣」党  
 月見酒鯉山椒こそよけれ  
 昼月の淡さに古りて狗尾草も  
 独酌の間（あひ）を夕月移りつゝ  
 夕月の色のいよいよ栗きんとん  
 三回忌板東太郎の聳つところ  
 酒のあと水恋しくて夕月夜  
 会はざれば浦島太郎めく暮春  
 いただけり中に生傷ある柿も  
 月よりもつつましきもの対ひの灯  
 庭つづきの裏山が見え土瓶蒸し  
 楓（かえるで）の風格を褒め紅葉宿  
 言うなれば奉書の明るさ花すすき

サイクリングロード左右に蕎麦咲いて  
 折紙の屑入れゆで栗殻を捨つ  
 蕎麦の白磐梯山の雲の白  
 露の浜犬にも流行りすたりあり  
 秋潮のにはふ散歩は胸張って  
 うろこ雲海に向ってウォーキング  
 虫瘤もみづる程に冷え込みて  
 蓑虫の空中遊泳何處に糸  
 蓑虫の垂れてジョギングコースの上  
 露けさの首に手拭いウォーキング  
 新松子朝の浜邊は淋しいぞ  
 校庭のバックネットに灸花  
 散歩の途次ははんと寄りて紅虫瘤  
 散歩の足寄らしめ風船唐棉は  
 数珠玉のかすれ音川風引き出して  
 茹で栗の黄のこぼれ屑本のうへ  
 朝顔の種採ってみて遅昼餉  
 菊括る紐長すぎて秋中日  
 湯に漬けて痛み観面日焼け首  
 顔見合はせて松毬と新松子  
 めんだうなヨウシュゴボウの凭れ合ひ  
 つん抜けて本領發揮泡立草  
 露草のもって生まれし審美眼  
 青花に如かじ素直にも見る眼  
 猫じゃらしアスファルトにも根を張りて  
 露まみれ雄日芝そこに信号機  
 廃品の壇・缶置きに露の辻  
 秋草のこの名も妻の知るところ  
 秋草の名をすらすらと侮れず  
 せいぜい知る秋草の名を独りごち  
 我の知る秋草三、四進歩なし  
 秋風に浮き足立てるものばかり  
 ゑのころの古ぶ穂を見て風のなか  
 図書館へゑのころ古ぶいつもの道  
 蚊除けスプレーたっぷりかけて子を放つ  
 母子して蚊除けスプレーかけ遊戯  
 へくそかづら駄花のみかは実もあるぞ  
 秋うらら多めに刻む万歩計  
 花すすき手折るところを妻に見す  
 朝の川鰻の一つも跳ばぬかと

芒採る昔を今に川いっぽん  
 俳のすすき嘗ての川堤  
 金網のまへで足踏み露蔭  
 ゑのころにひたひた朝の車輛音  
 あめんばう一つがぶんと横向いて  
 草原の近道ゆきてあびる露  
 力草手折らんとしてことはられ  
 ゑのころに何も起こらぬ朝の内  
 草は実に婦唱夫随のウォーキング  
 雄日芝はざつくばらんを通しけり  
 秋彼岸親仁（おやじ）に逢ひに田沼まで  
 種子四散後の祭といふはこれ  
 句作りに博識要らずイヌコウジュ  
 絮の他軽んずものに植物通  
 雑草（あらくさ）にいちいち名あり秋の野  
 辺  
 秋草にくさぐさ名ありそれも佳し  
 秋蝶の止まるところが決まりをり  
 おとつと露のまだ干ぬ草っ原  
 雨に遇ふ秋草のそこ凹みをり  
 蓑虫を揺らして図書館開館まへ  
 鶏頭の耄碌立ちを見下ろせり  
 種子零す鶏頭いやはやひどい形（なり）  
 秋雷の何時か止みをり唯雨音  
 鉢植えの花に等しく露降りて  
 新涼の薬王寺の鐘時報兼ね  
 釣具屋のダチュラ吹かれて沖曇り  
 エンゼルトランペット教会（チャーチ）の  
 庭に垂れ  
 馬穴見せ蟹捕り兄弟鼻高々  
 釣具店空色の屋根鯨日和  
 しとやかに宮城野萩の咲きつぶり  
 店頭に早生柿出回る  
 刀根は何處西村いざこ柿の秋  
 蝶飛ぶにさしつかえなき萩の雨  
 菊の丈こんなに伸ばし過ぎては駄目  
 ゑのころも庭草の裡愛で暮らす  
 守宮も出ネダも緩みてわが栖  
 種子採りの蔓這はせ築二十年

木瓜の実をやたらに濡らし朝の雨  
 玉すだれ太田医院はもつと先  
 お隣りのなかなか大きくならぬ柿  
 朝の内雨の烟れる箒草  
 ウォーキングけふもゑのころ伏せる径  
 やぶからしの花秋雨の降る頃を  
 露草の眸は雨に打たれける  
 野辺の草手にす一見感じは萩  
 紫蘇咲かせ一人暮らしのお婆さん  
 明日の良夜待ち切れざれば酒無心  
 明日良夜それに託け頼む酒  
 月祀る前夜祭とてあほる酒  
 今日月ならざる月を朋に酌む  
 二つ程残してしまふ秋団扇  
 横濱の端の海邊の今日の月  
 白帯びて満月の路地愛（は）しきやし  
 路地いとほし今宵良夜と聞きしより  
 満月はいつもここより家並の間（あひ）  
 路地の闇一步さがりて上り月  
 庭石に載りて迎へる今日の月  
 空模様おぼつかなくて明日良夜  
 瀬戸橋の横の芒を摘みに一寸（ちよと）  
 水仕果つ妻と二人の観月会  
 ありあはせの茄子・蒔盛りて観月会  
 相撲の候  
 草津ノ湯温泉番付大関に  
 鶏頭もすっかり没し虫の闇  
 横須賀 良長院 下田稔の墓  
 龍谷山雨に残んの百日紅  
 秋彼岸雨の階（きざはし）一歩づつ  
 たまの墓参下田稔を喜ばさん  
 小鳥くる墓地の高みに汝の墓  
 わが供花の菊を加へて墓賑やか  
 菊尽し祖光浄稔信士の墓  
 稔の墓お隣りの墓菊とりどり  
 病葉の谷戸に振り込む秋彼岸  
 秋灯どぶ板通りバー「テネシー」

ネオン街どぶ板通り秋の雨  
秋霖にジリジリ夜のネオン鳴る  
秋灯燦雨の立喰い焼鳥屋  
焼鳥の脂たらたら秋灯下  
雨の舗道点々櫂の細落葉  
秋霖や長靴履いて映画見に  
秋霖の雨傘すぼめ映画館  
外（と）は秋霖降り継げる日の「アラモ」  
敬老日過ぎの雨日の映画館  
秋雨の入江出でゆく潜水艦  
潜水艦霧雨隠りにその艦尾  
秋雨に艦影烟りねずみ色  
霧籠めに艦船の噴く白蒸気

狗尾草濡れぬやう穂の出来てをり  
こつぴどく雨に打たるる狗尾草  
赤のままなかなか変はらぬ信号機  
竹煮草こんなところに信号機  
長靴でのしのし歩く夢の径

括られて風禍に遇ひし鶏頭花  
夫婦

ど忘れを揶揄し笑へば秋来迎ふ  
ど忘れの話題弾みて衣被  
忘れつぽくなりしとおもふ秋半ば  
紅芙蓉手荒な風を嬉びて  
くわりん酒のとり後ひく三年もの  
雨の日のくわりん酒に夜の更け易く  
くわりん酒に目のなき妻のとんとろり  
気を持たせ雨の長夜の折紙をる  
彩合いを朝見て夕見て酔芙蓉  
いかんともしがたき空やけふ無月？  
浮かぬそらもよう十五夜台無しに  
ゑのころのちよつと白けて散歩道  
早咲きの菊も交えて菊作り  
朝露にあらあら濡れてしまひけり

いちまつの望みはありてけふの月  
気をもんで月の出までの遠(をち)のそら  
明き月望むべく物供えけん  
酔ひいささかたうたう無月に了りけり  
ぬうぼうと無月の家路辿るなり  
ほの白き月見団子と月を待つ  
待宵のとろろを播れる音暫し  
とろろ播る音のぎりぎり秋の暮  
雨の日はだうしてゐるか女郎蜘蛛  
秋雨に時折びくんと躍れる葉  
草っ原小雨ながらも朝の虫  
沖かけて雨のべうべう秋の浜  
撓む荃まつすぐな荃秋晴れて  
秋興の天声人語炭のこと  
河童百圖いちち領き止まぬ秋  
河童ゐて芋銭千里の道の秋  
秋乾き芋銭無給の「農」挿し絵  
芋に露河童日和と申すべし  
筆ささと芋銭のスケッチ秋の生りもの  
あさひ幼稚園 運動会(美雨)  
ひらがなで大きく書いてうんどうかい  
鈴割の玉が割れそで割れなくて  
運動会わが孫どうやらゴールイン  
運動会わが孫五位でゴールイン  
運動会みんな手を挙げゴールイン  
きりん組帽子も黄色運動会  
ちよこまかがちよこまか抜いて運動会  
運動会ミッキーマウスのビニール敷  
綱引の掛声ばかり負けにけり  
写真撮るパパもちよこまか運動会  
お遊戯の最後はヤーで運動会  
万国旗の下でお弁当運動会  
お弁当の色も賑やか運動会  
徒競走シャッターチャンス一度きり  
はつ秋の腰浅くかけ「やまびこ」に

猪苗代

列車音稲田をキタカタキタカタと  
山麓を横へ横へと稲雀  
うち曇る磐梯山(ばんだい)見上げ稲雀  
すすき又すすきの磐越西線ゆく  
稲塚の田舎侍めく会津  
蕎麦畑がぼつぼつ増え来猪苗代  
三組の紅葉狩客会津バス  
稔田のその突き当たり磐梯山  
神寂びて地酒稲川酒林  
磐梯山麓の蕎麦畑雨落ち来  
稲雀何處へ飛んでも磐梯山  
磐越西線稲の睡気が移りさう  
磐越西線稲見て睡気もよほせり  
裏磐梯  
穂芒に泣きだしさうな湖のそら  
中津川多少紅葉はしてゐぬか  
ななかまど一日雨にたたられて  
ななかまど磐梯山すっかり雨隠れ  
棘が決め手アキノウナギツカミは是  
団栗の落つ森リスのレストラン  
民宿の帳場あづかる通草籠  
溝蕎麦に高原の雨止むまじく  
高原の民宿サフラン束ね植え  
ななかまど磐梯山は靄籠めに  
十六夜のピラニア潜む水槽にや  
風颱風トキーに似て傘舞ふ凶  
湖の秋コンビニで売る遊魚券  
檜原湖  
湖畔亭紅葉そこそこ客そこそこ  
檜原湖の紅葉そこそこ遊覧船  
檜原湖に八十島芒生ふ島も  
さ紅葉の檜原湖周遊乗合バス  
檜原湖のさ黄葉三百六十度  
檜原湖の小島の一つもみづれり  
檜原湖の島の砂礫に白セキレイ

さ紅葉の迫れる湖に何釣るや  
秋浅き檜原湖巡りの乗合バス

### 五色沼

がまずみの実の赤零切りにけり  
雨音のなかを一人の紅葉狩  
一鳥も降ろさず秋の沼の雨  
一雨が沼に並べし黄葉かな  
千枚に一枚落葉の猩々緋  
団栗の落つ音紛る山の雨  
急雨来てもみぢし初めし蔦葛  
青どんぐり雨明りして山の道  
讚集めをり山中の櫨紅葉  
虫喰いの雨のみぢ葉先づ散れり  
人絶えし黄葉明りの道ゆくも  
草の絮沼も寂しさ湛えをり  
鮮しき黄葉踏みゆく沼ほとり  
五色沼刻み降る雨瑕瑾とも  
白みては芦衰ふる五色沼  
紅葉狩こゑ掛けられてこゑ返し  
紅葉狩挨拶のこゑ掛け合うて  
がまずみの実に山清水とよもして  
沼の面の空が明るみ初めあきつ  
金秋の瑠璃なす沼に眉展け  
挨拶のこゑも弾めり紅葉狩  
山中に遇ふ櫨自讚の照紅葉  
沼の秋一寸高みに見晴らし台  
鉄気水秋くる径に滲み出て  
水草の黄ばめる沼の雨水輪  
紅葉狩雨の足許ばかり見て  
そこはかともみづる沼の名無し草

### 毘沙門沼

濡れそぼち黄葉張りつく岩明り  
木道の突端水草紅葉して  
沼巡り薄紅葉して蛭蓆  
雨ながら薄紅葉せる沼半周  
葭の間をちらちら雨の行々子

毘沙門沼ぺたぺた足漕ぎボートかな  
雨上がり沼のほとりに殖ゆ蜻蛉

### 喜多方

人參は紅葉型どりわっぱ飯  
松茸など秋の吹き寄せ弁当に  
遠刈田市松模様の明るさに  
張子人形陸軍さんの髯露けし  
露けくも鼠かぢりの招き猫  
蕎麦畠雨がぼつぽつ降って来て  
絡まれしものもみづる蔵の町  
稲刈りがもう済み虚空蔵さんの村  
山麓の刈田の雨水澄みゐたり  
宝の山磐梯山より秋出水  
峠越えバス喜多方へ五里霧中  
喜多方の下駄屋覗いて秋の暮  
大野分稲田に旋毛残しけり  
磐梯の山麓かけて風倒田

### 蔵屋敷

蔵壁に残んの朝顔咲き登り  
虫瘤の赤みますます蔵屋敷  
コスモスのさ揺れも蔵と蔵の間  
土塀越し桐の実が見え蔵屋敷  
秋口の蔵店見学小学生  
味噌蔵の土塗り引き戸秋寂びて

### 大和川北方風土館

秋色の飯豊連峰伏流水  
杉玉に喜多方の秋紛れなし  
今も使ひ古井の酒の仕込み水  
ぐい呑みを買ひ足すこともまた秋意  
案内の果ては試飲の新走り  
秋灯ぼんやり江戸蔵大正蔵  
蔵店は月見名残りの芒活け  
試し飲み弥右衛門さんの今年酒  
一升瓶千本分の新酒樽

コーヒーの水に飯豊の伏流水  
酒成りし証杉玉神寂ぶは

笹屋旅館

鶏頭凶蔵す蔵主旅籠兼ね  
喜多方の蔵もつ宿の鶏頭凶

会津若松

山田民芸工房  
起きあがり小法師ゆらゆら立てる秋  
商秋の白虎堂とは菓子舗なり  
虫の音がぎうとちゃんこ鍋屋のまへ

飯盛山

朴落葉白虎隊ちる山道に  
秋寂びて線香を売る無人店  
毬栗の足に纏はる飯盛山  
杉落葉惨と散り敷き自刃の地  
城望み飯盛山の女郎蜘蛛  
飯盛山城下見下ろす女郎蜘蛛

武家屋敷

椿の実鋼光りに武家屋敷  
武家屋敷廁のまへのかくれみの  
棗の実徐々に色づく女中部屋  
舞い込める青葉いちまい自刃の間

御薬園（おやくえん）

大鯉の水吸へる音梅擬  
御薬園千草とりどり黄葉して  
築山に大茸生ふる御薬園  
薬草より薬草へ飛ぶ秋あかね  
門前に紫苑の立ちんぼ御薬園

秋風に荷葉うらがれ香を放つおん薬園の池

をめぐれば  
与謝野晶子

一つ大きく荷葉（かよう）の葉擦れ泥田中

鶴ヶ城

実ざくろに夕栄え煌と鶴ヶ城  
城壘あゆむ一步一步に西日透く  
鶴ヶ城櫓々に秋の風  
天守閣あきつがこな所まで  
本丸の礎石の上を夕あきつ  
秋晴れの空ゆく団雲鶴ヶ城  
色変えぬ松の上天守閣の影  
秋晴れの天守閣より生徒のこゑ  
城の井の蓋にさくらの落葉かな  
五軒丁濠に病葉また降り  
十六夜をきのふに月見櫓あと  
天守閣色無き風を素通しに  
そこはかと始まる城の落葉搔  
秋雲の移るひ易く鶴ヶ城  
末廣酒造  
蔵店の土間まつさきに秋の暮  
蔵店の帳場取り込む秋灯

喫茶「杏」

秋興の面輪あかるく茶を喫す  
日新町蔵店辞せば火恋し

末廣当主より酒賜れば 自嘲一句  
あつさり酔ひもう老人や夜長宿

ひとり酌む生酒利きて夜長宿  
旅寐また浅く十六夜過ぎの宿  
酔醒めの水に秋意の旅寐かな

串ぜん

ぎんなんの串焼に酌む新走り

車中

秋の遠足鶏舎の如くなる車中  
秋の遠足車内さながら鶏舎のごと  
鶏のごとそはそは秋の遠足子

二本松 大隣寺

供華の菊少年隊士に十四本  
二本松藩主丹羽家累代の墓  
姨百合の横より登り藩主の墓  
小鳥くる藩主累代墓のうへ  
一端を石燈籠に蜘蛛の糸  
小鳥くる墓九代まで数え

内室

陰墓に日を経し色の菊二、三  
藩主の子が自分の生母を陰ながら供養す  
るもので  
墓標などは建てることは許されなかった

大壇口古戦場

田村草二勇士の碑の傍らに  
病葉の香のして戦場たりし丘  
大壇口散りし勇士の碑に病葉  
古戦場蜻蛉のつるむ音すなり

霞ヶ城 菊人形

脛当の如きもありて稲塚に  
稲積みのそれとあらず隊伍組む  
秋あかね一服せる吾にすぐ泥み  
見晴し台蜻蛉の往き来見飽きるまで  
安達太良山晴れてあきつを湧かす谷戸  
親孝行（おやこうこ）てふ名の十六ささげ  
干す  
一茎にすぎり稲子の腹見する

棚田より一村見下ろし稲塚は

山田より婆が降り来る穂蓼の径

あんばんを齧りつ秋嶺安達太良山を

安達太良山別称  
爽やかに土地人の云ふ乳首山（ちちくびや  
ま）

安達太良山ここからは見え蓼の花  
二本松十万石の秋日和  
安達太良の日を吸ひ膨れ稲の塚

菊人形案内の黄旗は黄菊の黄  
東京より俳優（わざおぎ）が来て菊花展  
作り滝栄えあるものに菊設え  
眉太に近藤勇の菊人形  
菊人形池田屋騒動真っ只中

その応（いら）え少し訛りて老菊師  
おん齡に始まり菊師の腕自慢

おもむろに菊師全国行脚談  
出来栄えを褒められ菊師口綻ぶ

菊人形初日と云へど手直しあり  
ボート愉しむカップル模して菊人形

菊人形吉良上野介平伏す  
大砲（おおづつ）を差配の隊士菊人形

菊人形からくり仕掛けの太刀さばき  
初日にも菊師藺をもて菊つくろひ

菊人形浪士狼藉振る舞ふ場  
描けるは禁門の変菊人形

菊人形馬上の隊士黄の羽織  
菊人形菊の着せ替え月五つ度

観菊の接待二本松婦人会  
水打って城の階（きざはし）菊花展

朝一度背より水遣る菊人形  
気がかりなところ手直し老菊師

菊人形歌舞伎英世の十四段  
菊人形去年の歌舞伎は安達ヶ原

菊人形手に銃（つつ）二本松少年隊  
蹲り菊師むしろに根ン仕事

半月で菊の着せ替えとぞ菊師  
菊人形隣り部落の菊用ひ

独眼流正宗の菊差し替え中

繕ひの藺草はヤロウ菊人形

ヤロウは藺草の中でもっとも強靱なもの

で  
暈などに使うもの―菊師の云へる  
けふ初日半年がかりの菊花展

智恵子の生家

秋も半ばの東京より来て智恵子のそら  
妹宛智恵子の直筆露けしや

「花霞」蔵店秋暑の樽積み上げ

秋興の智恵子生家の間取りかな

智恵子生家「田園」流れ秋澄む日

観世寺 黒塚

稲積みのもしや狸の化け損ね

阿武隈川出水瀬に寄り瀬を離れ

蒲の穂の邊を過ぎやがて黒塚へ

出で立ちは郷士のさまに稲塚ら

杉落葉片づけ観世寺和尚さん

みちのくの安達ヶ原の黒塚に鬼こもれりと

聞くはまことか

平兼盛

鬼ならぬ虫音棲みつく黒塚は

足許の夜泣き石より秋の声

鬼婆の岩屋に西日濃くなれり

黒塚の一本大杉落葉して

鬼婆の岩屋を打ちて杉落葉

夕日さす方が西にや稲の塚

二本松拾遺

菊を観に降りて二度目の二本松  
 二本松駅にも佇たせ菊人形  
 菊人形日和のけふの二本松  
 大壇口見てからにせん菊人形  
 菊花展けふより始まる城目指す  
 入場口菊人形のよく出来て  
 菊挿して人形に魂（たま）入れんとす  
 つくろひの菊を束ねて老菊師  
 気に入らぬ箇所をトコトン老菊師  
 仕上りの初日にずれ込む菊人形  
 莫菴いちまい引き延べ菊師一仕事  
 莫菴いちまい丸め着せ替え了ふ菊師  
 五重塔五層の屋根に菊を葺き  
 老菊師修行時代を一くさり  
 観菊の同じところで足を止め  
 その景のあらまし読みて菊人形  
 菊人形面輪面輪に目がゆきて  
 見たきもの先づは菊師の仕事ぶり  
 菊人形どこか見得切るところあり  
 城内の厠借りけり菊花展  
 簡単に見えてなかなか菊人形  
 ひよひよいと菊師着せ替え話の間  
 うち屈み聞くや菊師の佳き話  
 菊師の辺話弾めば去り難し  
 引きつけて離さぬ菊師の話っぷり  
 家苞は菊師の雑談与太咄  
 菊人形胸元疎ならず密ならず  
 馬っこはいささか手抜き菊人形  
 菊人形見ながら女囁けり  
 菊人形「たいしたもんだ」とこゑ挙がり  
 菊人形歌舞伎を暫し遠ながめ  
 隊士らの面輪凜々しく菊人形  
 新撰組隊士の肩に秋の風  
 精気充つ面輪初日の菊人形  
 着せ替えの菊師と対話城日向  
 皆蓄ばかりの城の懸崖菊  
 菊花展備えの菊も設えて

好日の或る日を城の菊を観に  
 在来線乗り継ぎ見ゆ菊人形  
 薫る香も一番乗りの菊人形  
 二本松晴れの或る日を菊花展  
 けふ初日面うち晴れて菊人形  
 城下まで自転車で来て菊花展  
 好奇心先へ先へと菊人形  
 着せ替えの菊師さながら黒子めく  
 霞ヶ城二人ばかりの菊師と遇ふ  
 日当りて着せ替え中の菊師の背  
 菊人形面うち晴れて勢揃ひ  
 老菊師少し生活（たつき）のことに触れ  
 着せながら菊師の一ト生手短に  
 頷き聞く菊師の誇る弟子の数  
 菊師の談「ここに居付きて五十年」  
 自ら云へる  
 二ヶ月で生計たつる菊師とぞ  
 「十年はひよこの裡」と菊師の談  
 菊師皆小柄人形にかしづきて  
 こゑ掛けて菊師の手許おろそかに  
 菊人形けふを皮切り長丁場  
 菊人形勢揃いして忠臣蔵  
 菊人形近藤勇の羽織は白  
 登城めくおもひも少し菊花展  
 客足の先づはそこそこ菊人形  
 城中にバリアフリーの菊花展  
 着せ替えの菊師人形に見おろされ  
 玉砂利を鳴らし近寄る菊人形  
 城内の一隅区切り菊花展  
 菊人形かほりは疾うに飛んでをり  
 ともかくも団栗の坂踏み越えねば  
 菊など見てあちこち坂の二本松  
 得心して菊人形より離る貌  
 露の拂曉横濱駅を発つ電車  
 喜多方拾遺  
 商ひの秋を桐下駄桐箆箆  
 秋の旅伏流水を掬ひ飲み  
 蔵座敷秋を惜しめる夢二の絵

酒林あたり暮れくる蔵の町  
蔵の秋話は明治の大火より  
秋雨のそれほどでなく蔵の町  
秋雨の挙げるはね見て煉瓦みち  
杉玉の下借り秋の雨宿り

会津若松拾遺

落城の炎のいろ夕べのあきつにも  
起き上り小法師会津の家苞に  
柿の下道違へしかへとへと坂  
秋の暮鶴ヶ城出てあらぬ方  
人力車すたすた城の落葉踏み  
手庇に西日当れる鶴ヶ城  
砲弾にゆがみ冷まじ城写真

観世寺

受付を離れ紫苑を剪りゐたり

案山子らに村の鴉の知恵長けて  
たよりなき案山子ばかりと云ふ勿れ  
案山子守る垂り穂の出来のよささうな  
案山子減るそれより迅く田んぼ減る  
秋の旅して来て向き合ふ長雨に  
旅の句を整理す秋の長雨に

白樺の白抽ん出て黄葉山

唐突と云へば米屋の金木屋  
木犀と気づけるときはいつも雨  
またちよつと行って金木屋の家  
金木屋どの路地となく家となく  
こんなに長け上からにほふ金木屋  
はやばやと新聞配達金木屋  
長き夜に飽きしと母が二階より  
熊が出るニュース滋賀より鳥取より  
熊ことし荒れて在所に出るニュース  
麻酔銃もて撃ち山に戻す熊

鶏頭のだう倒れても墓地の中  
シチューでも作りたき日や冷え込んで

コスモスの雨来ぬうちの器量顔  
コスモスにぼろんぼろんと雨の降る  
コスモスの押し花去年のいろ止どめ  
雨の日をひとり咲き閉づ酔芙蓉  
葉鶏頭喰ふ奴どこへ雲隠れ

木犀の芳香に馴れるまへの鼻  
くだくだしき木犀の香に突っ込みぬ  
木犀の大盤振る舞ひ鼻つく香  
金木屋朝の頭を空っぽに  
木犀の匂ふ道なり歩を緩め  
木犀の花屑カレー粉めく散歩  
鯊を釣る頭上を鳶の横ながれ  
日めくりを忘れぬし日の蒲団干し  
花了る芙蓉の下の水溜り  
水溜り朝から光れり木犀も  
芙蓉よりこころ離るゝ日勝ちとなり  
傘を干す芙蓉の花を零す辺に  
評判の歯医者の家金木屋

月と雲その道筋を折り合ひて  
長雨どき日差し大事に女郎蜘蛛  
颱風を頭上にしてラ・カンパネラ  
雨の夜の話題に三の酉のこと  
秋は秋で芙蓉の葉につく青毛虫  
よく肥えて秋芽が好きな青毛虫  
秋霖に首をすくめて青毛虫  
あたりの葉平らげまる見え青毛虫  
ここ残し秋刀魚の食べ方知らぬ妻  
野の菊に濃淡あるは土のせい  
雨ばかり降る日となれり猫じやらし  
木犀が零れて雨の精肉店  
秋嶺見て夢二の面長女かな  
秋愁ひ夢二の女に昏るゝ山  
秋寂びて夢二震災施米之囀  
夢二展出て家苞に芋ようかん  
夢二展出でて巷の秋の雨

三文の徳の銀杏拾ひなり  
ぎんなんを拾へり散歩途上にて  
雨の日の銀杏拾ひ傘傾げ

銀杏の種飛び出してをる境内

金木犀腐してふ雨なかりけり

金木犀香強め寺の築地塀

金木犀零れ土塀の瓦はね

金木犀零れて町内掲示板

家人の云へる

金木犀掃く身にもなつて下さいと

日々通る靴音日々散る金木犀

飛石の間埋め金木犀花屑

秋郊の野あるき目指すは一万歩

秋草の根方を雨水透きながれ

長雨を喜び秋のかたつむり

ダチュラの花ベタと地に伏せ雨まみれ

颱風の真下のくわりん気づかいて

ハイキング気分で葉月のフランスパン

ブルーベリーたっぷり良夜明けのパン

秋霖も愉しからずや一人旅  
禁煙車ばかりの秋の新幹線  
かまぼこの小田原過ぎてうろこ雲

霧雨に箱根七湯めそめそと  
色変えぬ松が見え来て三島宿  
東海道三島の松の秋ついで

午からの駿河の秋の空頼み

三浦晴子さん

自然薯の掘り手巧者が汝が夫で

静岡県 島田宿 大井川川越遺跡

雨の鴨松を伝ひて島田宿  
秋興の足を運んで大井川  
木造の橋あるく可し秋つばめ  
秋郊の賃取橋に雨のはね  
大井川二タ橋並める秋ついで

懐古

川向うざりがに捕りの金谷かな  
轟々と秋の出水も鉄橋も  
水平に且つ脚早に秋出水  
秋出水うち揚ぐ流木足蹴にす  
大井川空より降れる秋黄蝶  
秋黄蝶さまよひ出づる大井川  
はたはたが飛んで賃取橋の方  
はたはたが何血迷ふて大井川  
大井川秋出水して川会所  
銀木犀にほふ札幌の帳場越し  
川越しの賃料こまごま秋出水  
出水して常水二尺五寸の川  
蓼の咲く家並み外れに口取宿  
番宿は人足宿にして暮秋  
秋霖に人足偲ぶ五番宿

四十五歳で口取りに  
人足に定年ありて鳥曇

川留めに人足寐転び居さうな宿  
人足の賃料六倍並蓮台  
乳通（ちちどうし）七十八文川の秋

大井神社

秋祭大井神社の森が見え  
祭旗 徳澤千秋降百祥  
大井神社小流れ巡らせ秋大祭  
安産の神のお渡り帯まつり  
大井川安堵の神の秋大祭  
氏神の大祭濟みて蜘蛛の糸  
川越し人足築きし石垣露載せて  
露凝りて十あまりからかね吊り燈籠  
渡御の杜大王松の露けくて  
露降りて朱き小振りの太鼓橋  
金魚屋の寄進百余尾錦鯉  
彫り露けく金魚奉納三百尾  
道中飛脚奉納燈籠そぞろ寒

島田 帯まつり

大名行列

元禄より百と四度帯まつり  
島田音頭に・・・  
大鳥毛いのちをかけてシャンと振れ  
大鳥毛真澄みの空に投げ渡し  
大鳥毛ひよいと受け取る秋のそら  
中老の扇ひらひら屋台曳  
川越しの島田のきんきら神輿かな  
大奴尻からげしてそぞろ寒  
練り歩くやっこの毛臍秋の風  
足運び気取りて髯の大奴  
大奴安産祈願の札揺りて  
化粧廻し跳ね上げずいと大奴  
大奴ポーズ決まりて帯まつり  
扇手に洩い出で立ち中老連

鹿島踊り

ヨーイヨーイと鹿島踊の道中す  
鹿島踊りの笛方衣裳鞆鞆風  
わらじ履き鹿島踊りの島田の子  
鈴の音をりりんと鹿島踊りの子  
鹿島踊頭巾揺すりて大黒ぶり  
笛横に柿色袴の囃子方

長唄屋台踊り

屋台踊りは屋台の上で踊る「楽屋踊り」  
(別に上踊り(うわおどり)とも呼ばれる)  
と路上で踊る「地踊り」に分かれる。  
上踊りは長唄つきで振り付けは花柳などと  
いった江戸の一流どころを呼んで演ずるの  
が伝統。

長唄は家元が演ずるとあって別名 島田の  
長唄祭

とも呼ばれた。踊手は地元の幼児。

上踊りサアサ島田の夜のとばり

長唄に楽屋踊りの粹こらす

長唄の家元が来て上踊り

後見は花柳演目「藤娘」

藤娘早抜き自慢の上踊り

帯まつり浦島演ず島田の子

橋弁慶舞ふ子長唄引き立てて

三番叟舞ひて島田の夜を更かす

神田祭り

舞囃す「火事と喧嘩は江戸の花」

雨の五郎どすんと見得切る上踊り

上踊り雨の五郎に火蛾飛んで

上踊り杵屋の太棹べんべんと

辻々に奉納踊り灯を煌々

長き夜を島田の長唄祭かな

上踊り一寸法師におひねり飛ぶ

花束を抱えよろけり踊りの子

地踊りはヨーイヨーイソンライと

帯まつり杵屋社中と同宿に

大井川鐵道

砂州削いで真白き牙の秋出水

大井川鐵道すすきと白蒸気

茶の花にけふも濁れる大井川

立柳秋の出水に根を浸し

皚々と砂州の削られ秋出水

茶の花が茶の畝間より貌出して

大井川横に茶の畝縦植えに

木の实など足りゐて猿を見かけぬ里

秋出水体当りして洲を削り

急ぐありゆつくりゆくあり秋出水

きようと叫びごとんと発車高秋へ

秋霖にてかてか黒ん坊SLは

網棚といふものつくづく旅の秋

網棚には人・諸・何でも載せられる

秋興や煙草の喫えるSLに

廃校のさくら大樹がもみづれり

馱蕎麦の天麩羅もみぢ色をして

大井川霧らふ濁流こきまぜて

茶畑の間家家の間茶畠

川霧に川根茶畑ひた濡れに

わずずんとSL発てり稲穂の辺

荒くれる川の中州に小鷺ゐて

濁りても大いなる川大井川

SLが蒸気捨てゆく茶の畝間

川根茶の川根高校霧隠れ

ししうどの花のほとりに捨て蒸気

とんでもなき所に流木秋出水

秋出水くびれ広がり大井川

ぼうぼうと茶畑に吐く捨蒸気

左手に芒下れる大井川

大井川芒の右に入れ替り

捨蒸気かむる芒の幽玄に

目の前で反転秋の出水川

ポッポーと芒に挙ぐる白蒸気

水澄める大井川には程遠し

捨蒸気磧に広げ汽車ポッポ

川根茶を車内販売ポンコツ汽車

流れ込む枝川澄める大井川  
秋の遠足石炭臭さ車内に充つ

入山の下山の時刻露けき文字  
登山帳記す末尾に「無事下山」

寸又峡

大曲り秋の出水に添ふバスも

野ぶだうに湯けむり流れ町営湯  
霧冷えの先客ひとり町営湯

沢鳴りに虫の音紛れゐたりけり

もみぢ見の客は三重より町営湯

秋出水林道よぎり落ち谿へ

客寄せに猿の腰掛お土産屋

吊橋は吊橋秋の出水のうへ

人気なき温泉街の薄紅葉

吊り橋は秋の出水に係はらず

秋霖に取り残されし火の見かな

紅葉狩足に自信のないなりに

通草採りに猿のそろそろ出る時刻

土産さて静岡駅の山葵漬

錦秋の吊橋眼下に針のごと

かもしかの渡りておとす落石も

シャツ透る山気冷まじ寸又峡

金木犀火星接近せしは去年

サワグルミ花序を黒々濡らす霧

鼻の先茗荷のにはふ掌をひろげ

谿風に夜又倍子の実のすがれ初め

庭に出て主の欠伸菊日和

山萩のちぢれ葉枯れの始まりぬ

金木犀侏儒の寸劇始まりさう

蔓枯れて落石防止止めの網

ジョギングの道に散らばり櫟の実

砂州を飛びひとなつこさの秋黄蝶

帽子付どんぐり探せどなかなか無し

寸又峡谿の草木を枯らすあめ

ひよひよと草原の虫野分あと

黄葉山落石監視のボランテイヤ

新松子吹き落としてやよべの雨

早紅葉せる吊り橋へ四百段

団栗など秋のオブジェとして卓に

滑落の跡かもしかの渡る山

颱風来て百葉箱の脚くじけ

隧道を浸して山の秋出水

台風にアンテナ飛びて屋根に人

岩壁にぶち当り折れ秋出水

台風に脚攪はれて糸瓜棚

猿渡る寸又三山霧籠めに

千頭森林鐵道跡の早紅葉

色づける通草を採りに猿・鴉

秋出水へヤピンカーブして山峡

秋出水なかなか暮れぬ白磧

飛龍橋尽きしところが登山口

登山届ポストぽとぽと霧霰

登山帳前黒帽子岳（まえくろぼうし）をピ

ストーンと

霧浴びて湯山林道下りて来し

霧籠めの集落跡はあの辺り

要点のみ記しあるなり登山帳

登山帳最終記入日一週まへ

鉛筆で叩いて蜘蛛の糸の端  
 菊日和足を伝ひて夕冷え来  
 かまきりが飛び来て壁にぶるさがる  
 かまきりが首傾げればその影も  
 かまきりの動向を今ひとり占め  
 家壁にかまきり時経てこんな位置  
 家壁と問答蠅螂達磨めく  
 菊によき冷え込み蓄くりくりと  
 好晴の菊の蒼に来る小虫  
 豆柿の夕暮れ早めしむその斑  
 柿の斑に里の夕冷え覚えけり  
 密集しバクテリアめく柿の斑は  
 ユリ黄葉街の趣変はりけり  
 小鳥来る団地の間の広場の木々  
 枇杷の花一寸早めと通り過ぐ  
 鯉跳ばぬ川を淋しみゐたりけり  
 公園の端々の木のみづれり  
 初鴟のキイーツとあられもなきこゑよ  
 しゃくれたる貌のショウリョウバッタかな  
 けふも亦来啼く初鴟メープルテイ  
 台風を幾つ送りしすがれ草  
 景観にユリの木黄葉馴染みけり  
 朝顔の種の抜け殻まさぐれる  
 日の温み背に朝顔の種を採る  
 ウォーキング海川けふは川巡り  
 蕾み初む菊に日が落ち安息日  
 菊好きとなるも齡のせいならん  
 人様の家の百菊羨しとも  
 定年の間延びせし日々擲揄し鴟  
 指の隙種採りの種すり抜けて  
 堀低く隣り合はせの寺の秋  
 道一つ挟み二つの墓地の秋  
 銭湯一つなくなる噂芙蓉実  
 彼岸経て日は透くばかりくわりんの実  
 ぬかりなく戸締まりせよと鴟啼ける  
 大佛へ向ふ人の頭鴟日和  
 挿し芽せし菊の錦秋迎えけり  
 礼深く八幡様の薄黄葉  
 身に芯のごときものあり日向ぼこ

芙蓉の実高きにつけて風些々と  
 小鳥くる人工浜に松根づき  
 小鳥くる松原縫ふてモノレール  
 坪庭を通りすがりの秋の蝶  
 穴子漁筒の内側色塗って  
 純白を秘めをる菊の蒼とも  
 新松子海の日を受けモノレール  
 通院に妻の付き添ふ石路日和  
 洗濯物干し了へ佇む菊のまへ  
 洗濯機鳴動菊に韻きをり  
 秋小寒地魚まとめ買ひ込めり  
 ご近所に鴟来しことを触れまはる  
 いーしやきいもー湯舟に浸り聞きゐたり  
 菊蓄む寒さ日に日に募りゐて  
 燈火親し徳利の影猪口の影  
 散歩の途次一輪挿しにせんと蓼  
 風募る街一巡し初紅葉  
 病院を抜け出してみる初もみぢ  
 無月なる風呂出て釦の掛け違ひ  
 十六夜の下着まさぐる脱衣籠  
 初鴟を聞いて弾める手酌の手  
 初鴟を聞きしは二三日前のこと  
 しんしんと沁みる夜鰻の南蛮漬  
 妻湯浴む間のげそ煮の火を守れと  
 骨残し夜長の鰻の南蛮漬  
 長き夜の始まる鍋の細火かな  
 玉ねぎが酢を吸ふ鰻の南蛮漬  
 野分中浅瀬に躍る池の鯉  
 大鯉の水を突き上げ野分中  
 関東を直撃颱風常陸へ抜け  
 台風の進路正しく相模灘  
 颱風の雨漏りの音何處ならん  
 颱風の雨漏りの音一つ増え  
 颱風の雨漏りの音二つとは  
 颱風に家鳴り頭上通過中  
 閑日談栗のりへいとつくばかな  
 りへいとつくばは栗の種類  
 稲雀右手に切れて遠磬梯  
 窺ふに日の脚早し女郎蜘蛛  
 夕日照り返しくわりんのありどころ

雲飛んで一日迅し芙蓉の実  
赤のまま吹く風低し牧じまひ  
還らざる日々よ照り合ふ数珠玉よ  
思ひの外数ありにけりくわりんの実  
雨千滴落つ間に一つぎんなん落つ  
秋霖に家鴨も口をつつしみて  
雨垂れの桜もみぢの間あるく  
雨垂れのハネ飛び八百屋の大根に  
赤門の桜並木にもみづる雨  
たまさかに落ちくるぎんなん拾ひけり  
榎の実の異臭を放つ中に佇つ  
惚れ惚れする竹の春みち玄閑まで  
台風過擗裂かれし断面見す  
秋ついで家鴨も終に口開く  
木瓜の実の愚か晒して日表に  
青どんぐり透いてお寺の水溜り  
丹の褪せし仁王に粧ふ寺の樹々  
大井鐵道  
汽車走らす石炭一屯水七屯  
士別線走りしSL紅葉へ発つ  
野分して瓦を飛ばす櫓の枝  
真つ直ぐな櫓被る台風禍  
台風禍神社・仏閣・塔と見て  
台風一過片づけきれぬ櫓の枝  
台風一過片づけきれぬもの諸々  
踏んづけて仕舞ひ榎の実匂ふなり  
踏んづけて即ち榎の実の匂ふ  
コンビニのおでん恋しき頃と入る  
ひたぶるに鶏頭枯れて種子零す  
台風に折らるゝ羽目となり櫓  
寺の木々繁れば折らる台風に  
校庭の青桐の幹身に入みて  
たらたらとかます焙る火身にぞ入む  
秋冷のかます焼く火の透きとほり  
菊月や首をすくめる日もありて  
十月の催しものも全て果て  
辞書が辞書呼び込む書棚読書の秋  
秋の雨太鼓橋打ち池を打ち  
透きとほるカマス焙りて干物好き  
鱈のひらきカマスのひらき日を変えて

秋霖に干物焙る火パチパチと  
深秋の煙草いつかは止めねばと  
煙草いつか止めねば断たねば深む秋  
電波時計電波受信の夜の長き  
夜寒の坐起つて白湯呑み坐につける  
朝寒のポットになみなみ白湯注げる  
いずれ手を離る古本秋深む  
定年万万歳  
答え出す要なき日々を送り秋  
空澄むと旅する定年万万歳  
しわしわのぎんなん拾ふ雨の昼  
椎の実に足をとられてづるりでん  
椎の実にづるりと滑りずでんと尻  
一つ目の台風日本呑み込みに  
ポットの湯底ついてゐる夜長かな  
ありあはせのものを羽織りて夜長かな  
問いたくも妻寝て仕舞ふ夜の長き  
蓑虫のごとく重ね著して夜長  
買い置き煙草の尽きし夜長かな  
長き夜の雨の厠にしんと佇つ  
火の始末などして寐ねんこの夜長  
雨粒の大きさ云へり颱風報  
豚カツのツマのパセリのやうな日々  
翳よぎるごとくに芙蓉花を了ふ  
色草にいちいち感心してゐては  
シヨウリヨウバツタ口きくならば減らず口  
雑草の実にもうち捨て難きもの  
台風と越前クラゲの当り年  
和歌囲む柀も紅葉づる珍袖本  
敬老日番組玄米健康法  
星野立子展 鎌倉文学館  
ポスターに紅葉づる鎌倉始発駅  
江ノ電の踏切女郎蜘蛛見上げ  
踏切より踏切の見ゆ石露日和  
小鳥くる文学館の立子展  
冬館枳殻垣のあけすけに  
初鳴のこゑはすかひに二階堂  
鎌倉を歩こう会の蓑虫貌

眩しみつ桜黄葉の段葛  
江ノ電のごとんと石路咲く辺より発つ  
江ノ電の一寸走って鯨の海  
大佛へ秋日の豆屋通り過ぎ  
さざんかに谷戸の冷え込み激しかり  
土牢見て猿ノ腰掛見て深秋  
確かめに二三歩戻る返り花  
拝観の身を山茶花に慎みぬ  
黄の勝てる酸橘をゆつくり日の通る  
海棠の月より淡く返り花  
さざんかに谷戸の冷え込み一入や  
蜘蛛の囿に最後のあがきを黄金虫  
蜘蛛の囿に一つの攻防見たりけり  
蜘蛛の囿にまざと攻防見る日かな  
蜘蛛の囿の今あらはなり日の角度  
女郎蜘蛛屋敷と云ふに躊躇せず  
屋敷内歩いてぶつかる女郎蜘蛛  
一つだに実のなき通草蔓なりし  
木を渡る通草蔓先目で辿る  
大船の野菊を摘んで小津日和  
簾からし須臾にしてその花の興  
簾からしの花が綺麗と覗き込む  
無花果と云へば石屋のガキ大将  
少しづゝ読む本夜長に慣れまじく  
街並にユリの樹泥み秋半ば  
黄落の街一巡りして埠頭  
秋半ば中途半端に色づく葉  
快晴の旗日ユリの樹黄葉して

浜木綿に校庭の雨夏近む

波間に空瓶ぷかり川崎洋死す秋  
格好いい川崎洋は冬鷗  
冬鷗格好いいじゃん川崎洋

ばった跳ぶはた迷惑な跳び方も  
芙蓉散る真白き月に見守られ  
芙蓉散る真青きそらの奥処より  
草の色天に還りて秋あをぞら  
白き花叩きて秋の昼の雨  
家鴨があが云ふなか水草紅葉せり  
秋小寒長袖羽織り間に合はす  
出来るだけ軽き冬服好みとす  
林檎は駄目柿はなんとか衰ふ齒  
菓屋の灯が溢れをり落葉の上  
竜淵に潜むや海獣葡萄鏡  
新聞の切り抜きジヨリジヨリ冬隣  
花八つ手妻の目敏く目遣る方  
湯呑みの茶もう冷めてゐる冬隣  
長き夜の首を傾げて吾が略字  
腫れものに触るが如く熟柿食ふ  
雲脂頭てる六十路の秋となりゐたり  
鬮牛の山古志村を地震ふるひ  
スダジイの根の暴走も冷まじや  
露寒の鯉の息づき深かりき  
妻母の薬係りを露けき日々  
いつものごと江ノ電混んで石路日和  
雁を見て戻りの江ノ電グズズ選る  
妻一言鴉の鋭声にさしはさむ  
かく渋き柿でありしかおまえさん  
かく渋き柿でありしか舌縮まる  
噛んだまゝまさかの渋柿てふ貌を  
渋柿に妻はとほほと云ったきり  
また貰ふ今度の柿は妹より  
ころころと鳴りて新酒の仕込水  
買い置ききの煙草求めに秋の暮  
つぎはぎの辞書無造作に繰れば鴟  
凡に謝し凡々に謝し栗御飯  
十月の旅し足らぬと思ふ日向  
しじみ蝶躍り越ゆものある限り

しじみ蝶日向の端から端へ飛び  
しじみ蝶股間を抜けてゆきにけり  
椋鳥の脇目もふらずむさぼるよ  
吾は椋鳥（むく）を椋鳥は吾を黙殺す  
薦もみぢ三葉卓の一輪挿し  
犬を見て怪訝なる貌椋鳥十羽  
古代蓮好きの住職鉢並べ

柿食ふは難題にして六十路の秋  
柿食ふ齒いつか失くしてしまひけり  
押入に首を突っ込み冬支度  
押入の中をこそごそ冬支度  
妻置いて行く旅再度秋惜しむ  
ソックスが先づ欲しくなる秋小寒  
辻々の出しもの愉しみ秋祭  
着慣れたるものを掻きだし冬支度  
越して来し子がバタバタと秋の暮  
光る雲脂衣をまるび落つ石路日和  
廃校の草木を染めて龍田姫  
龍田姫いま川越えの大井川  
墓原に沈む雀は群れなして  
鎌倉八幡宮  
常磐木の大匠山（おとどやま）より色鳥来  
初秋刀魚世話焼き口調殖ゆ妻と  
大将のその手に乗らぬ初秋刀魚  
越後に地震播磨に颱風なんてえこと  
住み古りぬくわりん歳々実を殖やす  
強引に柿ぶつ叩き止めぬ竿  
老けて見ゆ渋柿食ひしあとの貌  
初秋刀魚二等分して妻とふたり  
てっぺんのくわりんのほほゑみ古拙とも  
舗道に石榴落ちなば快音放つらむ  
縞柄の雨粒ほどの女郎蜘蛛  
人埋む台風の亦恨めしや  
身に入むや激甚災害風禍あと  
地震・颱風 初冠雪はよき話題  
足許がすうすうしてゐる夜寒かな

疎遠また致し方なし帰り花  
あまりにも薄手の衣類けふ冷えて  
薄れゆくものに記憶と金木犀  
月見だんご供えて妻の横坐る  
熟れ柿に匙が添えられみたりけり  
消防車飛んでゆく日の石焼蕎  
石焼蕎風に飛ばされさうなこゑ  
十月の旅大井川廻り  
遅しき商魂七五三のピラ

薔薇館秋ともなれば蜘蛛館  
秋の遠足小人数にて大佛へ  
土牢にて又遭ふ秋の遠足子  
塩害もありて紅葉づる逗子葉山  
種子零す鶏頭その嵩如何許り  
初鵬につんと突き出す犬の鼻  
冬鷗散らし釣船いざ出立  
鱧釣船出船前の尿に起つ  
オコゼ釣る乗合船は三艘目  
帰り花二三步戻り確かめぬ  
家ぬちより犬に吼えられそぞろ寒  
皆厚着出船前の乗合船  
積み込めるこの筒みんな穴子船  
鱧釣は鱧の貌して乗合船  
椋鳥きよときよと鴉とんとん秋の浜  
団栗は松葉を衾小松原  
ぴんと張る空気の中を松手入  
突堤のとっても温し鯨を釣る  
けふ暖房一寸入れては切ってみる  
妻  
石拾ふ要領をもて椎の実も  
また拾ふ団栗拾ってどうするの  
椎の実はあらかた落ちたか落ちたやう  
けふの団栗加ふきのふの団栗に  
これはこれだと云ひつゝ桜紅葉みる  
雨か風か桜紅葉を斯く染むは  
書割りめく紅葉山見て極楽湯  
懸垂が三回出来て黄落期  
さあ寐よか火の始末して長夜

穴惑居る筈がなきでも居さう  
神社裏野外映画の露天幕  
夜寒さに寝相も海老のかたちして  
風禍・震災こうむる人に澄める月  
暖房を焚けばあぶれ蚊のこのこと  
だだこねて玉砂利蹴る子七五三  
芒いっぽん手折りて山に別れつぐ  
六地藏こんな所に鶏頭花  
冬桜花の手薄なところかな  
青空を伝ひくる冷え冬ざくら  
遊ぶ子の減りて十月桜かな  
青空が冷えて十月桜かな  
夕冷えは穹より十月桜かな  
くたくたになるまで遊ぶ秋の暮  
やたら生ることしのくわりんだうしやう  
菊に佇つ母に一言かけたき日  
精一杯菊に添ひ立つ母なりき  
自転車にて近場の雑木紅葉見に

#### 横浜市立 金沢動物園

平日の動物園にくる小鳥  
平日の動物園の落葉踏み  
紅葉冷猛禽類は眼をつぶり  
飼育員所作てきばきと落葉搔  
小山なす象舎をつつむ落葉の香  
見晴し台段の檜落葉かな  
小鳥くる森の端っこ展望台  
木の葉降るバリアフリーの動物園  
ユーカーリにつれなく落つる秋日とも  
ユーカーリの百幹容れて天高し  
一頭を除きコアラは冬眠か  
コスモスの真っ只中に立ってみる  
コスモスにいつまでこどもの遊びごゑ  
コスモスの広場に集合遠足か  
秋晴れてキリンの生国エチオピア  
もみづる中歩むキリンの右廻り  
秋日中手をもてあます手長猿  
底抜けの秋空キリンの運動場

犀の尻釣瓶落しの日を遠に  
羚羊に落葉吹き飛ぶユーラシア区  
糞バツタと一人が叫べば皆叫ぶ  
鉄柵が温くて蜻蛉そこに居る  
蜘蛛の囿に黝々糞のごときもの  
作り滝雑木紅葉の枝を添えて  
木の葉舞ひ象はステップ踏むごとし  
実体と云ふ語は象に冬ざるる  
駱駝目をつぶるその上を落葉舞ふ  
うそ寒の犀に向ひてグッドバイ

三浦晴子さんより自然薯戴く

じねんじょう萱に包まれ贈らるる  
じねんじょう包むにすすきふさはしき  
お見事と云ふべき自然生届きけり  
自然薯を括る紐解く厚日向  
自然薯の紐解く雅ごころかな  
自然薯は萱被て雅ごころかな  
風流の手すさび自然薯菰包み  
育ちよき太郎次郎の自然生  
次郎長の駿河の自然生戴きぬ  
自然生戴く果報ことしもや  
自然生届けに長身配達夫  
汝が里の何處の山の自然生  
鬚づらの楮土まみれ自然生  
若冲の絵に無きひよる長自然生  
汝が夫の手になる素掘りの自然生  
涅槃せる自然生をば描き給え  
抱えれば嬰兒の重さ自然生  
からかね葺く職人五人秋日和  
花すすき乗合船は出たまんま  
大仰な仕草して抜く力芝  
家の間高さ違へて女郎蜘蛛

目にとまる秋草けふの一輪挿し  
ねこじやらし終の一穂を一輪挿し  
揚舟の艫の下の草もみぢして  
錆錨狗尾草の穂の古りて

これ食へば誰も寿(いのちなが)とろろ汁  
このところ天災繁ければ  
とろろ汁吉凶孕む刻の渦

播るひとの為人(ひととなり)出でとろろ  
汁  
大盛の飯に穴開けとろろ汁  
とろろ汁食うて笑顔の自づから  
一筆箋付の自然薯届きけり  
居心地のよくてかうなる自然生  
苦勞咄に尾鰭がついてとろろ汁

波切つて筒の重さの穴子船  
穴子筒明日が見える筈もなし  
その仕掛け簡單にして穴子筒  
釣船とは別に漁師の穴子漁  
筒積まれ花火船めく穴子船  
皆口を揃えて褒める式部の実

しじみ蝶遣らずの雨に飛ぶほかなし  
庭石にちよんと止りししじみ蝶  
菊花展初日の菊に氣勢あり  
小屋組の裸灯連ねて一の酉  
対岸の雑木一叢紅葉して  
磯菊に屈める母の背のまるき  
地震たびたび海棠の花狂はせて  
くさくさと降る秋霖に倦みたへぬ  
秋燕の翼返すや伊豆相模

この雨はすぐに上がると懐手  
急霰に家鴨の雄声突つ走る  
牛鍋の横濱街路樹紅葉して  
八幡宮ばらばら小鳥来そめけり  
拗ね者の鴨があとから追ひかけ来  
寐溜めせるバクに落葉のはらはらと  
古池を真一文字に瑠璃首鴨

瀬戸際のさざんくわ終に砕けけり  
白米にだぶつくとろろ一啜り  
冬籠雨の日ならでは出来ぬこと  
秋霖に心さだまるすさびごと  
藪に手を汚しサッカ―観戦す

何せむと手持ちの時間石露日和  
次々と石露咲く時間隙だらけ  
水の上に返り咲くもの日曜日  
草の絮やたらに飛んでかえりやんせ  
七曜の魁の菊ひらきけり

はやばやと地階の聖樹灯を点す  
死ぬまでの我が持時間日向ぼこ  
花八つ手通す単細胞的生き方  
この路地の日照時間花八つ手  
かくれんぼの鬼の隠れ処花八つ手  
枝先の空を展げて返り花  
藪を食う指に分厚く藪の屑

白菊にして冬菊のたたずまひ  
枯れ兆す菊の下葉を摘みとりぬ  
菊蕾むことを一途に月半ば  
気まじめさみえゐる菊の固荅  
一区切りつけて目を遣る秋没日  
気が付きしベルトの傷み十二月  
ことしもこの作務衣で通す十二月

下から問ひ上から応ふ松手入  
白鳥くる辺りへ行ってみるつもり  
支払は落葉の札(さつ)で泥棒市  
落葉の香つつめるフリーマーケット  
机の上片して釣瓶落しかな  
潮時とふんぎる釣瓶落しかな  
結へる手のそはそは釣瓶落しかな  
かく窺れ見向きもされぬねこじやらし  
掃除してゐる間もむかご零れさう

隼人瓜ポパイのつくる力瘤  
隼人瓜ポパイに敵ふものはなし  
秋晴れの日毎眺めて寺普請  
追ひつきて手にす零余子を話題にす  
朴散つて禅林奥行深めけり  
彩よりも形舗道の濡れ落葉  
苑の芝桜落葉の突つ立てる

家裏に菊を殖やして籠るのみ  
七五三櫛と櫛の間のそら  
濃く淡く菊の荅と花の彩  
垣越しに見えて隣のさざんくわが

団栗を莫迦云ひながら拾ひをり  
転んだら起きる子椎の実落つる丘  
団栗を孫に拾はせめて後ろ手

竜淵に潜む槽（ふね）より豆腐揚ぐ  
掬ふとき掌におよがせて新豆腐  
がんどき美味き豆腐屋十二月  
豆腐屋の頭でする足し算十二月  
晚酌の肴はさてと新豆腐  
槽底に豆腐屯す神無月  
新豆腐齒に優しきは理に適ふ

横浜市大  
大学の紅葉見守衛に会釈して  
てつきりもみづる筈の漆が小火程度  
ラグビーのマネージャして姐御肌  
大学のぎんなん拾ひとは望外  
大学のとんだぎんなん拾ひとなり  
葉を落とす木々大学の日曜日

十一月日付はピンからキリのピン  
ひたひたと十一月の雨至り  
十一月初日の雨に見舞はれぬ  
何處となく尻に火がつく十一月  
十二月重荷を負へるごとく来て  
スケッチす十一月の塀と坂  
鴨すいすい日曜画家の視野よぎり  
洗濯のあとをうとうと木の葉髪  
日の外に置かれて鴨の心細  
ハイカラな瑠璃首立てゝよぎる鴨  
石路のごと身近にありて立子の句  
路地奥より火のつく泣声秋の暮  
おんおんと路地に子の泣く秋の暮  
そこはかと魚の煮付秋の暮

行楽どき団地の木々も紅葉づれり  
神の留守ダンス預金に手をつけず  
霜月のこゑ聞き新札出廻りぬ  
二〇〇四年十一月一日  
新札の樋口一葉長居せよ

十一月の郵便局員きびきびと  
幕切つて落とせり賀状発売月  
賀状発売初日のこゑを一斉に  
若手職員賀状山積み売らむかな

孫 美雨

吾に優るもみぢ葉拾ひ来て見する

孫 珠海

木の実どき己が弾みで珠海（しゅう）歩む

姉としていつか振る舞ふ冬隣

姉は姉妹は妹冬隣

鴨の眼に飛び込めるピラカンサス  
団栗拾い樹上の鴨に疎んぜられ  
砂踏みてリハビリ日和秋の海  
リハビリの男立たせて秋の浜  
保育園種蒔きの種子何かしら  
鳩小屋に十月の砂敷き込んで  
十姉妹水浴びさせて文化の日  
朝靄にどどと出漁鱸船  
蜘蛛の囀の露にくもれり蟹部落  
雨ひややかに白頭の猫じゃらし  
霜の華朝の散歩の頬締まる  
大胆に舗道わたれり蝸牛  
赤ん坊の喃語ああああああ秋  
縣廳前落葉と市バス駆け抜けて  
落葉してぶつかる市バス系統図  
陸続と落葉降る中市バス来る  
これも違ふバスの行先神の留守  
ダイケアバス黄落に頭を振り振り来  
バスを待つ足許落葉駆けて鳴る  
落葉風引ったくりには御用心  
落葉臭き街歩き来て天井  
そのうち皆聖樹に伊勢佐木町の木々  
デンファレといふ蘭伊勢佐木（ザキ）の露  
地店に  
聖樹用豆電球呼ぶ造花店

三溪園

本牧の桜落葉とからころゆく  
鈴懸散る一寸だらしのない木々で  
踏み鳴らし甲斐ある鈴懸落葉とも  
妻に夫掴まり立ちの櫛もみぢ  
池巡り橋巡りして落葉の園  
莫迦でかき屋敷の飛石散松葉  
冬越しの菊の手入れを口移し  
五号鉢菊のうど芽に日の燦々  
もっこりと菊の冬至芽鉢の縁  
後ろ手に盆栽菊の仕立て聞く

一通り盆栽菊の作り方  
締めくくる「盆栽菊は奥深し」と  
菊購ふに福沢諭吉崩しけり  
いちめんの敗荷飽かなく亀眺め

分隊の鴨本隊に合流す  
白花瓣やっさもっさと厚物菊  
掛茶屋に鴨見て風のひやつきぬ  
風向きの即ち知れぬ冬ざくら  
立ち止まり振り返りみる冬ざくら  
泛び出て松葉に懸かる鯉の鼻  
ひっそり過ぐ白きつつじの返り花  
敗荷に亀のだんまりなほつづく  
鴨のこゑ突如挙がりてがらっぱち  
おだやかな日にゆったりと鴨の陣  
一吹き風の風に凹みて鴨の陣

酉の市

奮発の熊手にとばす不景気風  
熊手を央手締め商売大繁盛  
酉の市見回り南消防署  
酉の市屋台のラッキーボール跳ね  
焼栗の香が鼻先に酉の市

横浜 曙町 荒井屋は鋤焼き発祥の店と聞  
けば

酉の市見て来て牛（ぎう）の荒井屋に

牛鍋の荒井屋楓もみぢして  
あつあつの牛蒡のさき搔き開化井  
牛鍋のぐつぐつ落葉舞ふ夜を  
牛鍋を待つ間のマフラ―横に置き  
会社員風の胡座を牛鍋屋  
牛鍋を堪能しましたモウと立つ  
牛鍋屋ぎうとベルトを締めて出づ  
佃煮の蝗の貌をちらと見て  
佃煮の蝗の脚に突っ張られ  
佃煮の蝗齧れば骨の音  
菊苗の冬越し支度晴れた日に

中越を揺さぶり続け地震冬へ  
梅の木の剪定始まる市有林  
つくだ煮の蝗の脚か白湯呑むに  
椋鳥といふ少し汚れた鳥を指し

スケーター息をぴたりと鴛鴦のごと  
火の鳥めくフィギュアピンクのコスチュー  
ム

チャールストン伴奏（バック）にスケート  
露西亜ペア

フィギュアのリフト高々ニューヨークニュ  
ーヨーク

フィギュア解説ニコライステップとは何ぞ  
アイスダンスアトラクションのぬいぐるみ

華麗なる氷片飛ばしスケーター  
疾風また旋毛ともなりスケーター

スピン今旋毛の落葉スケーター  
スピンの脚いま針となるスケーター

熱演にフェンスの迫るスケーター  
氷上にワルツの流れスケーター

スケーターステップ刻む氷面鏡

厚物の菊苗風采佳かりけり

菊苗売る見本の鉢を横に添え

大股に菊をまたぎて菊苗選る

菊苗のビニール小鉢抓み選る

菊苗にも不易と流行あり菊展

軍港は鏡のごとく十二月

極月の無風無音の横須賀港

文化の日潜水艦の日章旗

探偵の車内広告十二月

金星に木星睦む露寒空

夕鴟をしみじみ聴ける火の見裏

一湾に漂へるもの秋没日

空瓶のゆたのたゆたに鯨を釣る

背後より気安くこゑ掛け鯨日和

徒（あだ）牡蠣の張りつく磐透けて見ゆ

琵琶島の端（はな）にて鯨のよく釣れる

神の鳩そこ退けそこ退け落葉搔

街中を駆け抜け落葉と郵便夫

空風吹く街をタタタと郵便夫

くわりん酒のレシピを付けてお裾分け

黄くわりんのおででこしゅんしゅん日を浴

みて

こりやあびつくり菊に跨りゐる蠮螋

もうそんな季節か風邪のコマーシャル

木の葉髪昔話に尾鰭つけ

弾き語り木の葉降る夜を綾戸智絵

枯るゝ夜をダイナマイトの綾戸智絵

月末の財布空っぽ神の留守

大学キャンパス黄葉のもとの生演奏

チアガール黄色いこゑを大学祭

秋天に肢体をひねりチアガール

花八つ手息せき切って郵便夫

葉屋に银杏落葉が駆け込みぬ

お年寄り許りの結社虎落笛

妻

堂に入るもの一つに障子貼  
云ふことをきかぬ障子を外し遣る  
八畳間虫閉じこめて障子貼  
障子貼最中と云へど動く口  
水仙の用土作りを庭日向  
枇杷の花私道細々つく民家  
冬来ると通学少女の二本足  
蔦紅葉同型の美を誇りけり  
花終嘗て通勤せし路地に  
葉を落とすなんきんはぜに冬青空  
立冬の園児手つなぎ通園路地  
椋鳥の横貌ちよつと貧相な  
蛇の髯咲く我家の前を通園児  
えのこ草秋を惜しんで舗道脇  
水仙の球根植うる深き鉢  
通勤の昔の通路終咲く  
通勤の通学の路八つ手咲く

大船植物園

階に攀落葉の歩道橋

壁面に国芳「百種接分菊（ももくさつぎわ  
けぎく）」

車椅子連ね連ねて菊花展

懸崖菊（けんがい）を何やら評す韓国語

懸崖菊を縦から眺め横からも

植物園リヤカー持ち出し落葉搔

大塵取植物園の落葉搔

植物園腐葉土となる落葉搔

落葉搔熊手に応ふ園の土

極月の旗立て空き巢のキャンペーン

ポスターの標語拙く火の用心

防火ポスター壁に犇めく最寄り駅

小学生クレヨン描きの火事ポスター

小学生の防火ポスター炎の拙し

駅にポスター展示などして防火月  
火の用心ポスターに「火はおこりんぼ」

ポケットに溜まるレシート十二月  
豆腐屋の豆腐も日暮れ猛り鴉  
人ごとのお歳暮月がやって来ぬ  
北風聴いて心張棒のごとき日々  
数え日を心張棒のやうにゐて

酢牡蠣酸し生活（たつき）も籠が緩みゐて  
冬来ると植えたくなりぬ球根もの  
球根の日本水仙深植えす  
中天に月と種採済みし蔓  
一花咲く朝顔棚を外しけり  
朝顔の蔓といふ蔓ご苦労さん  
菊苗売一つおまけに持ってけと  
懸崖菊あらまあ真つ正面にかな  
菊苗を選びつゝ去年の苗のこと  
植物園職員にして落葉搔  
搔き鳴らす熊手と熊手枯れ園に

青信号落葉と共に渡りけり

青信号落葉が先に渡りけり

食意地張る子規ならずとも毎日柿  
とろとろ柿種子の廻りが甘かりき  
朝顔のはなが了ってしまったあさ  
ゆっくりと辺りが暮れて花八つ手  
膝に冬日とガーデニングの大型本  
冬の蘭百鉢大型園芸店

菊につく虫にいろいろあり対応

後向き鴨見て野鳥観察小屋

培養土自転車に積み十二月

菊の用土作りすぼかぼか小春日に

菊日和奈良の最中を貰ひたる

初鴉に昼餉のうどん顔に湯気

初鴉を聞きつゝ箸の上げ下ろし

黙々とうどん啜れば初鴉来

放心の水鳥ならん池の央

午前中一度出たきり冬籠

起伏なき家居そのまゝ冬籠

あをあをと葉にも勢い厚物菊

靴・冬着などなどフリーマーケット  
露天市古着に釣瓶落しの日  
露天市釣瓶落しに子の売り  
立冬と聞けばああさうかと内心  
ベビー服に冬日ぬくぬく露天市  
ひしひしと水の暮れ来て鶉に鶉影  
植え替える手許に秋のしゅうねき蚊  
菊苗に夜盗虫（やとう）を退治する菓  
鉢底に夜盗虫（やとう）の越冬誰ぞ知る  
夜盗虫菊苗食むこと今明らか  
夜盗虫（やとう）誅す菓大枚はたき買ふ  
三毛猫の木（ボク）に爪研ぐ冬はじめ  
枯木攀ずあの猫金魚盗った猫  
札つきの三毛猫通る十二月  
球根を選びあぐみより冬はじめ  
木枯しが来るぞの予報外れけり  
水仙の球根植えてあと待つ  
水仙の球根幾つも植えてみる  
ゆく秋の後姿を見せつゝ逝く  
この部屋のぬくくて溢れ蚊来しならん  
本の山退けて障子を貼りにけり  
貼り替えし障子の部屋の読書灯  
花八つ手昨冬質屋は店閉めて  
いつの間に雨降ってゐる冬珊瑚  
腐葉土の足りなくなりて冬支度  
立冬より幾日を経たる夜の雨  
菊苗の鉢を殖やして冬籠  
クロッカス鉢の古土交え植う  
籠り居にかはりばんこに菊咲いて  
嵯峨菊のこんな時から華奢な苗  
伊勢菊の頼りなき苗植えにけり  
嵯峨黄菊古風と云へば古風なり  
古典菊のコーナーそこに来てゐたる  
つかつかと柎に寄り匂へると  
雨吸うて倒れし菊を起こしゐる  
強くなる雨脚を菊怖れけり  
一団の観菊目当ての車椅子  
雨ありて一色増しぬ山紅葉

菊作り読本仕立てに難易度付し  
花を見る菊を見ると生き足りて  
断つてばかりの家居秋ぐもり  
家居とは断る稼業秋ぐもり  
百種の売り込みがあり石露の昼  
魚食べ骨太らしむ文化の日  
蜘蛛の囀にさうさう獲物なかりけり  
足の筋違ふへまして冬籠  
初鵝の全姿を見する一番木  
冬はじめ頁繰る音も愛（は）しきやし  
痴呆すすむ母と小春のメープルティ  
柎にたつた一度の生享くを  
柎の銀漢なせる葉叢中  
雨に弱き菊の雨滴を払ひ遣る  
我が狭庭歳々菊の彩殖えて  
雑菊に籠り居づめの日を送る  
冬菊に白暮漂ひ初めにけり  
垣越に覗きて菊を絶やさぬ家  
茎ばかり伸びし雑菊雨に揺れ  
満開の菊に囲まれ珠の刻  
至福感いつ通りても菊の家  
ひたひたと菊の零せる白雨滴  
雨の日は雨の風情の菊見かな  
いちねんを花見菊見と骨休め  
日向ぼこ骨がとろけてしまひさう  
咲ききって菊はこれより下り坂  
ベーコン入り野菜スープや冬はじめ  
一悶着ありしや蜘蛛の囀の破れ  
数え日を園芸講座古代米  
潦さざんくわどつと四散して  
夕日いま秋咲きダリヤのかなたかな  
菊その他冬越し園芸講座かな  
口汚すのみかは熟柿啜れるは  
コスモスの一花一花に風配られ  
肌身には感ぜぬ余震柎に  
走り根を洗ひて夏の雨あがる  
サイダーのごとく気抜けし日暮際

紅葉狩装備に加ふ万歩計

紅葉見る柄ではないが奥多摩へ  
マイペース崩さずにゆく皮ブーツ

靴音も路も単調皮ブーツ

皮ブーツ一直線に路は伸び

屋根に鳩地面に杜の総落葉

乗り合はす電車にぼつぼつ皮ジャンパー

御獄駅廂の脇の嫁菜かな

団体用乗降口ある駅の秋

高きものあれば縋りて葛黄葉

鳩ノ巢溪谷

紅葉谿手すりがありて大助かり

谿底に舞い込む木の葉見届けて

紅葉づれる断崖秩父古成層

紅葉でも讚えん英語かぺらぺらと

紅葉川聞けばカヌーで下るとよ

吊橋に降りる白露そこをゆく

連なりて露の屋根屋根紅葉宿

山越しに日の射る村や柿鈴生り

身の裡の何處か弾んで紅葉狩

紅葉狩眼鏡を拭いてさあこれから

錦繡の秋パノラマの鳩ノ巢荘

露湿り鳩ノ巢小橋渡りけり

双竜の滝

瀧けむり双竜の翳帯びにけり

滝を見る朽ち鉄柵も秋寂びて

殷々と滝秋冷を募らしむ

殷々と滝秋色を深めけり

玉川水神社

紅葉して多摩川守護の水神社

溪谷の崖紅葉して水神社

水神社祠の屋根の朽ち落葉

水神社かえでを染むる一山水

一片の紅葉をとどめ大磐

攀じのぼる岩場の足許橡落葉

息継ぐ間ほろほろ零れ黄の木つ葉

紅葉見て命の洗濯とは大仰

紅葉見の吾らに階(きざはし)魚道にも

紅葉散る魚道押し照る峽の日に

紅葉川いつか彼岸に日の移る

タイミングよく来て溪の木の葉浴ぶ

木の葉時雨今しもグッドタイミング

鳩ノ巢の紅葉愛でつゝ見ず知らず

鳩ノ巢の木の葉降る谿すたすたゆく

黄落のダムを家鴨の独り占め

ハイカーに山の挨拶木の葉降る

紅葉どきカヌー教室持ち方より

初心者のカヌー教室紅葉晴れ

両腕をこすりつゝゆく紅葉冷え

手も足もこりやあたまらん紅葉冷え

木の葉降る山に向いて一息入れ

音すれど電車の何處に紅葉谿

紅葉冷え薄着後悔してみても

山風に染まらん紅葉ならずとも

二つ目の吊橋こども紅葉佳し

この村に火の見健在薄紅葉

たち混じる紅葉いっぽん檜山

原色のカヌーを浮かべダム紅葉

秋風にかヌーのオールひらひらと

御しがたきものに紅葉のタイミング

八百紅葉止むる溪の俎岩

鳩ノ巢の喫茶ぼつぽに紅葉愛づ

紅葉見て一会の出逢ひ嬉びぬ

溪谷の秋納めんと画架を組む

吊橋より描き始めて紅葉川

木の葉散らすその又上の谿の木々

木の葉散る岩場の上に川の上に

木の葉散り岩場を川を選ぶやつ

鳩ノ巢溪谷此岸彼岸に降る木の葉

振りあふぐその頭上より木の葉降る

無線もて後尾と交信紅葉狩  
木の葉浴ぶ吾らと谿の岩々と  
紅葉谿巡るその足滑らせじ  
紅葉川散策岩場上り下り  
滑るまじ滑るまじとぞ紅葉谿

### 奥多摩

日原川（にっぱらがわ）川波躍る紅葉どき  
日暮まで日原川の山女釣  
山女釣れ紅葉に腹を返しけり  
吊橋の三つめ小さし紅葉川  
二夕川の合ふ瀬の紅葉濃かりけり  
日原川多摩川（たま）の横腹突く金秋  
人去つて落葉のしじま日原川  
檜暗く桂明るく紅葉川  
山紅葉ひやひやするからもう帰ろ  
奥多摩の日向日陰の村紅葉  
足許に目を転ずればノコンギク  
一興又一興紅葉の谿をゆく  
梅沢の紅葉日和の駐在所  
椎の実の袴ばかりがのこる梢（うれ）  
ちりばめて漣に蒔絵のごと落葉  
軽々と泛けるカヌーと谿落葉  
穴あくほど見つめて柚子の青空を  
紅葉冷え纏ひつ介護の妻想ふ  
奥多摩の氷川の紅葉目に納む  
紅葉冷えそれに加はる磧冷え  
散り込める紅葉呑み込み日原川  
さ紅葉に優しき風と厳しき風  
シャツ通す多摩奥谷の紅葉冷え  
危うきに近寄る性（さが）持ち紅葉狩  
吊橋を濡らすは雨かはた露か  
吊橋のずぶ濡れ紅葉の数馬峽  
落葉きな臭きに落石注意書  
無人店三箇百円奥多摩柚子  
紅葉川臨みゆく径アップダウン  
山里は朝露の領数馬峽

奥多摩のその奥谷の朴落葉  
奥多摩の日がにこにこと柚子の木に  
紅葉冷え薄着のシャツの上よりす  
紅葉見て話の種に入る出湯  
吊橋を独り揺らして秋惜しむ

奥多摩の紅葉ところに焼きつけて  
落葉蹴り吊橋わたる女の子  
紅葉谿ダダとバイクで乗りつけて  
一片の紅葉となりて谿巡る

はじらへる紅葉と勢ひある紅葉  
滝見茶屋ざつくばらんな紅葉かな

紅葉見の序で氷川の三本杉

散り込める木の葉はらはら山葵沢  
これみんな札束ならばと踏む落葉

山里の紅葉げつくり日が墜ちて  
磧より杉の間をくる紅葉冷え

黄落や湯に浸りつゝ杉の空  
黄落や出湯にむつつり男どち

紅葉川日暮れて瀬音空ら韻き  
油漑青（アブラチャン）紅葉づる日原街道  
ゆく

秋の暮駅間長き八高線

真ん中に鳩みて落葉ごそつかす  
産土に隣る床屋の落葉搔

その奥に在すもの神社の総落葉  
その奥に鎮座せるもの総落葉

歌謡史にのこるこの唄年忘れ

本降りでないのが救い柿紅葉  
柿紅葉やっぱりよかったこの径で  
足が向き鯰と柳と橋の景  
あきらかに潮引いてゐる鯰の川  
冬の虹のこのこ蟹が這い出して  
冬籠り古りし牛乳鱈のごと  
冬青空歩きたくなる日を歩く  
一団の鳥に襲はれゐる冬木  
空とまた別の青さに冬の川  
冬空に青き処のあるにはある  
日暮れんとする街冬木に鳥置きて  
水飴のたゆたふごとく冬の川  
灌仏のごと佇ち銀杏黄葉のなか  
晩酌を独りでつける冬の暮  
厠にも菊の明るさ持ち込めり  
おばさんを先生にして菊作り  
積年の憶ひは熱爛などつけねば  
心しておくと答えて年逝かす  
風前のともし火いろの石露の花  
極月の真只中にそろそろ入る  
暖房は茫々と逝く年の音ぞ  
あたたかく家族をつつむ暖房音  
努めゐて努め足らざる今年もや  
ぐい呑の底に師走の渦文様  
鱒ちりの箸を落としてもう酔ふや  
鱒ちりが冷めて話のちぐはぐに  
湯豆腐のつらつら煮ゆる万太郎  
柵に地震とテロとが相俟って  
立冬の雨を見てゐて阿弥陀籤  
もの古りし頭突きだし柵に  
トンカチはリズムと心得十二月  
昼はうどん木枯し予報出し日なり  
冬の虫啄みに来し庭雀  
紅葉川搔いて朴葉のカヌーの櫂  
白湯もってポットを充たす冬始め  
卓上にいつもポットが冬はじめ  
紅葉川岩滑らかに調べあり  
冬の雨孫とビー玉遊びかな  
雨の日のぐらぐら雑炊柚子削ぎて

妻にとり我は口きく八頭  
冬厠かはりばんこに席起つて  
押し合つて波の過ぎゆく紅葉川  
極月やわれに極まるものもなく  
その中に貌煤けたる柚子があり  
柚子があり砂糖湯にでもしてみんか  
日に日に香飛ばせる柚子でありにけり  
並び泛く柚子の寒山拾得と  
傷つけて柚子匂はしめ納得顔  
マチスならだう描く柚子の静物画  
庭のもの叩きて立冬過ぎの雨  
彩極むもの一つに冬珊瑚  
一区切つけんか焼諸など食(を)して  
菊苗を抱えくる帰途富むごとし  
老人の紅葉みるとき庭師の眼  
階に紅葉とんとん女の脚  
嵯峨菊に京の女のおかめ顔  
庭石に苔に紅葉の在るがまま  
板の間に八入紅葉(やしおもみじ)の照り  
返し  
長谷寺の高み高みに斑紅葉  
長谷寺の八入紅葉のはすかひに  
百段を降りゆき末枯れ紅葉寺  
雨聴いて女人高野のみぢかな  
山寺の紅葉の日照時間かな  
吹き寄せに紅葉・柿・栗且座喫茶(しやぎ  
きつさ)  
小春の散歩貰いつぽん喫つてから  
健やかな脱糞露けき眼をして犬  
ねこじゃらし吹かれし果ての穂の透きて  
九十の起居菊より凜として  
朝が来て冬のハーブのむらさき花  
満天星が受け止め四、五枚柿紅葉  
朴落葉掃くといふより片づけぬ  
雑魚中の雑魚の鯛が好みなり  
とり落とす画鋲を探す十二月  
桜紅葉正しく日の色放ちめて  
我が来し方桜紅葉に透けて見ゆ

明るさは桜紅葉に優る君  
枝揺るゝばかりさつさと鴟何處へ  
好きなことばかりしてゐて深む冬  
球根の植え付け蚯蚓庭追はれ  
日向ぼこ吾を脱け出て吾を瞻る吾  
敗荷の辺に千年も居るごとし  
敗荷に天下泰平たるまなざし  
対ひ合ふ吾に気づきて敗荷見  
気が付けば池むかうにも敗荷見  
片づけて片づけきれぬ杜落葉  
鎌首のごときを捻り鴟を聞く  
町川に木の葉舞い込み潮が満ち  
植木屋に鉢でも買ひに秋日和  
否応なく踏むべくありぬ落葉かな  
虚子  
棒棒と返れる年をいひなせる  
紅葉狩済めば落葉を詠むことに  
木の葉時雨人のやり過ぐすその時に  
木の葉時雨積の岩に川中に  
球根を植えて日の経つ小春の土  
両手もてたまらず覆ふ木の葉風  
いつの間に秋逝きいつの間にか冬  
冬に入る憶ひひしひし並木の梢  
風も出てたうたう雨の七五三  
町川の映せる空より落葉かな  
赤きもの脳裡を掠める枯野かな  
葱を買ふ侘びしきことはせで来しよ  
鋤焼の煮える音先づ葱を見て  
代書屋が在ったあたり冬木立  
ユリの木も街に馴染みて木の葉どき  
青竜の如き山葵の擦り下ろし  
薄紅葉夢二の女佇たせし  
綱とりのかかる角力を晩酌に  
純白の雪載すツリ―洗濯屋  
先づ牡蠣が頭に泛かび晩酌どき  
鋤焼をつつくに淋し頭数  
肩すぼめゆく路地月のかぼそきに  
命延ばす海鼠も食うぞ生きぼとけ  
愛の羽根病院帰りの妻うがひ  
首傾げ手品番組冬籠り

先頭の見て見て見ての紅葉みる  
あつあつの紅葉見茶屋の蕎麦と湯葉  
せせらぎを耳にし出湯肌もみぢ  
冬至芽のいつか出てをり鉢の縁  
冬雀らしき声まだ一声も  
初鴟がさんざん啼いて暮るる路地  
ご近所に徹るあのごゑ初鴟来  
初鴟のごゑ張り上げてご挨拶  
初鴟よもう判ったから啼き止めよ  
さんざんくわの破片といふを見下ろしぬ  
鼻毛まで枯れてゐるとは鏡のまへ  
慣れつこなつてしまひぬ大噓  
白式部賢者の智慧を見るごとし  
そそくさと咲き急ぐなよ鉢の菊  
伊勢菊の何か知らんが明治ぶり  
菊と刀てふ一文があつたつけ  
蓑虫の常着を小春日ぐるみかな  
蓑虫の無口を真似るにもあらず  
枯蠟螂一太刀手合はせ願います  
山茶花のガックリ逝つてしまひけり  
ポストまでボロ着を隠す厚着かな  
遅咲きの菊にて寒菊とは違ふ  
陽をそこに呼び込んで咲く黄菊なり  
球根植う間合をいとも厳密に  
山茶花の日毎日毎に白深し  
凧と葉っぱのフレディ囁けり  
ピラカンサは陽気さんくわは内気  
度忘れは人ごとでなし枇杷の花  
さんざんくわにけさの冷気を云ひにけり  
一段と冷え込む朝の鳥無言  
菊活けて後片づけの葉のかほる  
一段の冷気に石露の目を瞞る  
そつちよりこつちが綺麗櫟の実  
球根を五球ほど植え冬迎ふ  
落葉が足に纏はりついて急がせし  
足鍛ふこと課してゐて冬の朝  
けふより上掛一枚足して迎ふ冬  
突つ立つて何咲かせぬしこの枯茎  
落葉搔一隅搔きてつく溜息  
セーター着て少し大袈裟この冷え込み

はや入れり風邪がうろろする月に  
われ除き妻孫ワクチン済んでをり  
大巖が行く手を塞ぐ紅葉川  
拾両のほのぼのビニールポット売

聖夜来てすずらん通りの電飾樹

この冬に着るもの並べ一思案

忘年の合唱東京ラプソディ

予報士が雲を動かし霜予報

鱗雲鱗崩れてただの雲

東奔も西走もなく年逝かす

凜々と月のやうなる厚物菊

忙殺は昔のことよ葛湯とく

まろぶ落葉紙幣（さつ）の感触伴ひて

デザートとはそくはぬ言葉食後の柿

器の数三人分やクリスマス

大小の柚子取り混ぜてこの値段

これからの落葉が愉しみ裏参道

太陽と睦める彩や鈴生り柚子

ぽかぽかと柚子を浮かべて湯に長居

山茶花冷え募れる床を素早く起つ

天気予報一と足早き冬を告ぐ

百円ライター釣銭嵩む落葉どき

柗に気が付くときは散ってゐる

呼び止めて柗咲ける方を指す

柗のいま盛りなる新聞屋

木曾川蜷愛知浅蜷が店頭に

鰻屋の主好みの歌麿絵

小春日の鰻屋の昼ごはめきて

鰻屋の親爺小春の亀飼って

蒲焼に呪文のごとく山椒かけ

鬘を立て来る冬のまつしぐら

我がこの年評せば釦の掛け違ひ

振り返り見れば釦の掛け違ひ

煤の湯に冬もすててこさと脱げり

八つ手鉄砲弾の木がまだ残る家

八つ手鉄砲籐生ふ山の今もあり

八つ手の家母艦遊びの基地の家

付録つく雑誌の重み極月へ

目を通す雑誌の年間回顧記事

立ち読みの正月気分の文芸誌

紅葉宿料理が自慢温泉が自慢  
樟脳のほふ着膨れ始めなり  
竜田姫灌の柱は粧はずに

幹を見てそれから梢を見て元日

実作と一つ覚えに亀鳴けり

昼寝覚五臓の位置が不確かで

横文字を車中に拡げ木の葉髪  
待ち合はすその眼に聖樹とハチ公と  
ジングルベルサンタ出づるに早き街  
ファッションの澁谷経巡る木の葉髪  
皮ブーツ肩に手をかけ試し履き  
極月へ軍艦マーチのパチンコ屋  
屋台店がんじがらめに落葉どき

明治神宮

凧に乗馬倶楽部の看板鳴る  
白息を吐きつ一体馬と騎手  
躍動する馬と女とその白息  
西の衛士詰所の前の落葉掻  
幔幕貼り新嘗祭の下準備  
にいなめの祭ことほぎ百鳥は  
若き神官新嘗祭の床作り  
供えもの白き敷布に新嘗祭  
神宮の齋に百菊かほり立ち  
菊展へ玉砂利の音畏けれ  
大君に献菊笠間稲荷より  
玉砂利のうへに樟の実ご本殿  
玉砂利を踏む音蹤きくる菊花展  
大君を祀りし杜の木の実浴ぶ  
億兆の木の実降る森抜け来たり  
神域を告げゐて枯れどき拡声機  
南の衛士詰所で道訊く木の葉髪  
菊花展即ち煙草たしなみぬ

代々木公園

黄葉して代々木の一つ大銀杏  
大君の森背に冬越す風太郎  
冬の噴水モービルアートめく動き  
公園の小鳥来てゐる水呑場  
公園の厠落葉にうづもれて  
ゴンズイの木の実つまみに来し禽か  
行く先に森が展けて総落葉  
枯れ急ぐものに鴉声と森の木々

風太郎眠るほとりに落葉の香  
風太郎緋色の毛布引っ被り  
摩天楼残る紅葉のその向う  
落葉に靴なじませてゆく並木道  
公園の落葉に心身枯らし来て  
黄葉且つ散れる銀杏の一光芒  
常磐木の中の銀杏の一光芒  
練兵場たりし跡地を落葉馳せ  
大銀杏散り下土を荘厳す  
亭々と菰巻きの松日に安んじ  
身ぬちより時間脱け墜ち冬青空

内科B外来咳を持ち込んで  
小児科に聖樹ありてもよささうだが  
先生になかなか呼ばれぬ木の葉髪  
東京の落葉こそつく通院日  
凧が吹きゐる東京目まぐるし  
嗟峨菊に瘦せつぽつちの女学生  
師走来て出廻る鉢もの猩々緋  
木屋を散らして夜間飛行音  
千両にいい値がついて街師走  
暇乞ふ挨拶「是非是非」石路日和  
焼鳥屋提灯一つ椅子七つ  
黄の小菊花菱アチャコの笑顔して  
とっかかりこんなところに秋日和  
見不知柿を呉れるが慣ひ会津つぽ  
見不知柿や妻の冷え症月日経て  
冬至芽のやうに過ぎてこの冬も  
顔叩き力士勝気を呼び込めり  
首捻り宙を睨んで負け力士  
振り返りはあはあぜいぜい勝力士  
あの人の字面斯く斯く旧賀状  
昨年で途切れし縁旧賀状  
旧賀状取り出し偲ぶその字面  
彼の人の片鱗を知る旧賀状  
回想の落葉が未だ舞ふてゐる  
木の葉千切なく降るや風太郎  
通院に着古しカジュアルウェアー冬  
散りざまよく木の葉の一生（ひとよ）終り

たる

蟪蛄のよろよろとして吾が前に

盛り場の裏の横町冬灯

冬雨といふ物音の今四辺

冬雨と云ひ陋巷に満つるもの

木の葉時雨挿し絵のごとく摩天楼

木の葉時雨股旅姿の吾となり

下田稔兄

割干の辺の雑談が最期となり

鉛筆は皆とんがらせ冬ごもり

裸木となりて歴然瘡瘻

冬帝に云はれてそこに立つてゐる

櫛いまずつぽんぽんに気負ひなし

花ちよんぎり菊の冬至芽作りかな

本二、三聖樹に躍らされて買ふ

土のこと水遣りのこと菊作り

まどめ買ひなどして柚子の使い途

一卓に不可欠の品冬ごもり

紅葉見の身ごなし少々大仰に

盗人のごとき煤柚子貰ひたる

こすりてもおちぬ柚の煤何の煤

いつよりも早く暮れたり花八つ手

樹を奔るイルミネーション街へ冬

落葉のなか四圍の梢を見まはして

菊作り齡に似合ひのすさびごと

書店出づ脚へ落葉のつむじ風

稔入れて見て過ぐ旧家の庭の菊

着膨れを疎むも余生に違ひなし

着膨れの初日を悦に入りゐたり

落葉踏みしだく韻きの新世界

靴先に当たる落葉の心地佳し

羽抜鳥沽券も意地も疾うに無し

飛ぶときは貌を斜めにしてバツタ

烏瓜山中に日が当り初め

あさつてのこと云ひ目遣る烏瓜

蔓みんな途中で切れて烏瓜

山歩きここで憩へと烏瓜

腕前は不問落葉の景を描く

あをあをと水仙墓に育ちをり

花八つ手干物いつか日陰かな

のこのこと出て来て予防接種かな

遅咲きの菊のある家羨しとも

厚着もそもそ腕まくりして注射かな

切り取る景まちまち寺の紅葉描く

小春日の辞儀一つして墓域ゆく

肩に楽器ケース揺りゆく柿日和

まだ染まぬ櫛黄葉が愉しみよ

山峡の鄙びし柚子に日が余る

けふ旗日櫛黄葉の枝に鳩

万遍なく小春日花舗の花鉢に

光沢も魅力の一つ 蔦紅葉

小柄といふ他なき鳥の秋日和

烏瓜点々として洒落た景

独尊の茫々も佳し花すすき

滑り台欠伸してゐる落葉どき

柿紅葉溜りあたかも火事場あと

柿紅葉葉にしたき一級品

鳴子のやう鳴る日もあらむ柿紅葉

どこまでも紅葉明りの水路かな

片岸を染め抜く桜紅葉かな

球音も銀杏明りも空に抜け

蜜柑出づ店頭柿は追いやられ

この冬瓜買ひゆけば妻何と云はむ

蔦紅葉茎も一緒に散ってをり

注射あと何處かだるくてホットレモン

もたついてつるうめもどきといひおほす

植木屋のグラスファイバー聖樹かな

寒山は箒選ばず落葉搔

下仁葱煮ゆる前から崩れさう

薄皮のむらさき如何にもふかし諸

実南天庭窺ふに鳥を見ず

様変れど冬の子供の遊びかな

花八つ手まだ遊びゐるこどもごゑ

空風にこどものこゑの舞ひ上り

舞ふ落葉緑政局の管轄下

柿もみぢ明りに何ぞ云ひたくなる

樺もみぢ若木ばかりの並木道

香水と毛皮に挟まれ初電車  
携帯電話ルルと鳴り告ぐ暖房車

中越地震 三句

地震襲ふその轍（テツ）忘れ紙懐炉  
花鳥風月なんのかんのとマグマの上  
御正忌の鯉を空輸の一仕事

もう一つ夢中になるもの欲し冬へ  
蜂の巣の容が風邪の熱の眼に  
紅葉坂見上げて憑きぬ休み癖

水仙の芽が土破り空覗く  
必殺の機を窺ふや枯蝟螂

紅葉の類（たぐい）拾ひ来て置く妻の癖  
妻

バイエルン抱え師走の教室へ  
師走のレッスン無音の電子オルガンに  
注射して片腕だるき小春径

地に砕けゐる花あれば山茶花と  
上野山一嵐来て総落葉  
てのひらに桜落葉の移り香す

さざんくわを砕いて雨の降り止みぬ  
冬迎ふ暮しのリズムアンダンテ  
一軒宿川を前にし紅葉映

最寄駅紅葉疲れの腰下ろす  
夕されば一嵐来て映紅葉  
紅葉川絶えぬ風あり出湯あり

野毛飲屋街に繰り出す冬帽子  
カラオケの「鳴くな小鳩」に年忘れ  
岡っ晴れたうたう出たか年忘

嗚呼 下田稔兄  
亡き人の十八番を唄ふ年忘  
一悶着ありて又唄年忘

のどちんこ震はせ唄ふ年忘れ  
極月の飲屋の壁に裕次郎（日活映画ポスタ  
ー）

一棟に飲屋犇めき冬の月  
酔漢の駅指しあるく月光裡

酔漢の覗くや野毛の冬の川  
逝く年を洒落てわが酒ジンライム  
酔漢の背を押す夜の落葉風

酔漢の月下のパンツマイムかな  
極月のタンゴの集い共白髪  
北風吹くなか横濱ポルテニア音楽会

受付にて冬帽預かる音楽会

極月はそこまで来てゐるエルチョコクロ  
タンゴ好き北風を厭はず集い来て  
カナロ忌の珠を転がすかに LAMOCHA（モ  
ローチャ）

LAMOCHA = 小麦色の娘

ドーナツ盤拾ふノイズは霰雨（ついで）程  
極月の針跳ぶ ALMA TANGUERA（アルマ  
タンギーラ）

ALMA TANGUERA = タンゴを踊る人の  
心

タンゴ聴きリズム取りゐる皮ブーツ  
タンゴ聴き踊り出したき膝・手・足

タンゴなどに係はる妻でなかりけり  
固苦しき君よタンゴを聴き給へ

染め残るところがありて寺楓

蓑虫が首出し外出心かな  
熱爛や出逢へるひとを大切に

天気圖に笑顔マークの小春ちゃん  
有難味薄るゝ旗日枇杷の咲く  
万太郎さらりと冬を詠みにけり

添え書も冬めく一句万太郎  
紅葉坂鯉のごとくに喘ぎをり  
けふ発売年末ジャンボ宝籤

年乗り切る術の一つに宝籤  
きっぱりと告げて初霜初氷  
野分に落つ今年と去年の松毬が

コンビニに聖樹玻璃戸に雪模様  
コンビニのドアの開閉早師走  
パチンコの勝組のゐる焼鳥屋

コンビニを出で凧の真只中  
外は木枯し餃子の美味き中華店  
青空に檸檬の容見惚れけり

冬麗の蟻の腰部の深くびれ  
世は進み飾る聖樹は新素材（グラスファイ  
バー）

助っ人に聖樹歳末商店街

ポインセチア今年流行りの新種とか  
独りでに点く冬街灯（ふゆともし）世は進  
み

失うものもう何も無く冬籠り  
年金を貰ひ唯々冬籠り

ポンジュースなどに温もり冬籠

ポンジュースは夏みかん汁入りの砂糖湯  
湯気上げて祖母の世の味ポンジュース  
ベイブリッジ

横濱のハイカラ橋に冬の虹

冬薔薇妥協なき色不二の白

焼酎は好きでなければ森伊蔵

焼酎ブームに

焼酎のオンザロックに年の果

冬籠手許に置ける園芸誌

中越地震 小千谷

大鯰暴れし村の新嘗祭

日向ぼこ別の私が其処起って

万両や庭木庭木に見下ろされ

万両や地べた伝ひに夕冷え来

夕映え呼ぶ柿とタンゴと蓄音機

ふくよかにあらせいとうといふ言葉

鉢植えのあらせいとうと年越さむ

鉢替えて菊の冬至芽育まむ

百鉢を日向に並べ冬籠

水仙の球根植えて水ぞんぶん

身ほとりに大き屑籠冬籠り

冬は赤き実の生る植木多き庭

吾が家に無き万両を暮に買ふ

金柑の苗木大きくするつもり

残菊と云ふには早き菊括る

白式部庭の夕冷え募りけり

金柑のたうたう夕日に見放され

万両の植処あれこれあれこれと

金柑に徹る隣家の話しごゑ

これは飾りこれは売物聖樹なる

毎年のことよ聖樹の新趣向

難かしき顔して菊を作る勿れ

水仙の芽立ちさながら未来都市

ダチュラの鉢大層小さく纏足咲

土塊を退け水仙の角ぐむ芽  
葉ぼたんの意気軒昂を買ひ来たる

白式部孔子基督釈迦の智慧  
千両を殖やして年金生活者

千両を持ってど万両無き生活（くらし）

挿し芽にて殖やせし菊の花屋敷

ののさんに供えむ菊の露浴びて

錦木の錦見しようぞ芳春院

斑の入りて桜もみぢは一寸地味

三峯山もみぢの葉裏朱を控え

小春日の声が先づして猫がゐる

五十年鬻ぎし湯屋閉づ年の暮

身に入みて湯屋閉屋の当主の辞

湯屋閉屋年の瀬を前にして

五十年ばかり入りし銭湯（ゆ）閉ぢ師走

落葉搔袋の幾つあれば足る

銭湯の煙突月と睦むかな

否応なく自分と向き合ふ日向ぼこ

犬の尿ぺんぺん草の枯れし穂に

冬籠り妻と足型見比べて

賑やかな暖房音の朝迎え

朝刊を取りてポストの露零す

猫が居て旭の当る露の屋根

大露に衿搔き合はせ驚きぬ

触るもの全てに露の影し

突き上ぐる水仙の芽に来よ風雪

水仙の潔き芽の片鱗見ゆ

冬の雲八幡船の形なす

かろうじて走り根落葉に埋もれずに

子供広場おしくらまんじゅうなど見ずよ

極月の茹で海老食すにマヨネーズ

色白の福助作りでありにけり

紅葉狩崩れの酒に酔ひにけり

紅葉狩赤城山（あかぎ）下りの岩根道

鴛鴦の水脈阿字ヶ池うち渡る

初鴨の羽繕ひをまた始む

暮早し角力差し手の探り合ひ

間を持たすものに角力も悪くなし

角力見てをれば辺りの暮れて来ぬ

取りつけるものは岩でも山桜

マンションのおねしよの布団あつかんべえ  
マスクして歩行の何處かしやちこぼる

葉山 南郷上の山公園

鳶の輪の真下里山紅葉かな  
ぱらぱらと鳥を渡せる冬の川  
穂芒の油が少し脱けぬたり  
枯尾花枯れ猫じゃらしと日に呆け  
校庭の端を打ちばたと桐の葉落つ  
冬の蝶小さき畑を折り返す  
畑隅にわんさと積み上げ諸の蔓  
山を見てライターばうと落葉季  
身ぬちより何か削落散る木の葉  
テニスコート金網落葉刺さりをり  
山中の木卓落葉と対峙せる  
银杏黄葉無人のテニスコートに散る  
黄落期テニスシューズのきゅつと鳴る  
银杏黄葉電話ボックスノックせり  
何鳥の地鳴きか木の葉時雨のなか  
疾うに葉を落とす木もたまたしてゐる木  
ぷらぷらと梢に桜もみぢかな  
リハビリのノルマ黄葉の苑三周  
桜又佳かり紅葉のこの山は  
転進といふ語のふつと稲雀  
セキレイの純白飛びり里山を  
蔦紅葉古き桜の幹を借り  
水仙の葉の剣なす北斜面  
爐紅葉雑木紅葉を抽んでて  
林間を滑り出て舞ふ木の葉かな  
極月の魚佐次に雑魚漁りをり  
逗子葉山長井の潤目鯛かな  
あんこ腹あづけて力士がぶり勝  
深植えと百合の植付注意書  
残菊を冬至過ぎの日弄ぶ  
鉢植え柚子大きくなれと朝な夕な  
明朗な赤廃り無しポインセチア  
老人の我流体操枇杷の花

枇杷咲いて介護施設の街に殖ゆ  
枇杷の木の間に鶉の頭見え隠れ  
地玉子の色の満月上りけり  
派手は捨て地道で通す勝相撲  
その巨漢待める力士ポカ多し  
山椒の実ピリツと垣添てふ力士  
三の酉消防署員体操す  
昼月に虚色深めて猫じゃらし  
よるべなき身をなほ立たせ枯尾花  
新聞を読みさし鴟の擦過音  
掠めゆく目白続いてもう一羽  
万両植え庭の淋しきところかな  
サルビヤのながなが咲いてさびれ雨  
寒卵卓袱台で飯喰ひし世の  
枯尾花翁のごとく日に耽り  
花八つ手その上に蠅の静止せる  
猫じゃらし末枯れ始め節度なし  
夢と夢ぶつかる綱取り相撲かな  
推奨  
枇杷の花こんな匂ひでありたるよ  
枇杷の花葉巻の匂ひでありたるよ  
これよりは日々澁刺と冬木の芽  
着膨れて外出の妻のオバサン帽  
マスクして潤む眼長身女学生  
松毬のスプレー染めしてクリスマス  
武州金澤明けて朝月松の上  
乙臚の冬の日の出はドックより  
抱きつゝチワワと冬の日の出見る  
松ぼくり拾ひ今年も逝けるかと  
花八つ手過ぎゆくものの脚迅し  
冬に入る海近ければ日の出見に  
くるぶしを暮れにぶつけて大きくじり  
顔叩きことし納めの相撲かな  
土俵掃く箒の数も千秋楽  
子供広場独り落葉が遊びゐる  
これよりは妻に勤労感謝の日  
御前様つづけ勤労感謝の日  
初冠雪雲上一万二千尺  
朝日影海より根府川蜜柑かな  
突っかけしものは落葉か夜の舗道

朴散つてもかく寺の広きこと  
余震なほ雨冷え募る中越に  
貧村の金の防鳥ネットかな  
排気ガス紅葉づる櫛も骨だろ  
う  
街路樹の木の葉舞へるやマネキンに  
年金を小出しに使ひ年の瀬へ  
来年もひとつ頼むと寒ごやし  
鉢持ち込む居間が温室胡蝶蘭  
年の瀬の何時の日選び髪刈らむ  
家居して身につくものは唯ものぐさ  
亘る日に今日も明るくそよごの実  
流されてゆかむそのまゝ年の瀬へ  
月明や母船の如く家ありて  
冬紅葉北風がしごきにかかりけり  
この小径冬の紅葉があればこそ  
根の生えし家居即ち冬籠り  
暮の秋執して妻の習ひ事  
冬晴れに飽くといふことなくけふも  
根室産鱈を捌く冬隣  
髪型は短めに刈り冬隣  
六腑まで釣瓶落しの透るなり  
連れ立ちて落葉運河へまろび落つ  
運河べりもう冬草と云へる青  
風つらき日の川端の裸木  
透きに透く青空ねずみのこまくらに  
川風に桜手放す幾木の葉  
一木の川面に韻く紅葉騒  
一川に木の葉舞ふ景瀬戸橋より  
吹かれゐる櫛もみぢの細葉かな  
繭玉のごとき白実のなんきんはぜ  
遠の街遠の並木に冬至の日  
青空に筋通すごと冬木立  
マネキンに首なし北風の賞与月  
横須賀  
諏訪神社  
ぱらぱらと手締めありけり三の酉  
星の夜の所狭きに熊手売る  
その筋の人の買ひ上ぐ大熊手  
古熊手去年の光りを放ちをり

小屋組の三、四軒ほど三の酉  
昼月のいろの綿飴三の酉  
焼鶏の串を数へて扱て何ば  
焼鶏の串が五本で五百円  
立ち喰いの焼鶏鼻を突き合はせ  
焼鶏の釣銭脂ぎる掌に  
横丁に屯し立喰ひ焼鶏屋  
星月夜どぶ板通りのラスベガス  
北風に吊る NATO の軍服星の街  
北風に乾く眼瞳りゆくばかり  
SOUVENIR SHOP スカジャン北風に吊り  
散る木の葉肖像画店の玻璃戸打ち  
聖樹置きどぶ板通りの福引所  
クリスマスセールに NATO の軍服も  
庭木 三題  
総領の甚六の赤実万両  
次男坊めく気安さに実千両  
末娘唐橘のうるはしゆう  
昼の月落葉踏む音に耳を借す  
走者過ぐ風の煽りを散る木の葉  
果たし状突きつけらるゝごと凧  
極月へバトンタッチの雲と風  
寒木瓜の花の隙間に差し込む陽  
散歩道こんどは何の返り花  
手の届く所には無し烏瓜  
十二月一日の白湯顔包み  
年も末こんな遅く返り花  
家裏にひっそり干し物枇杷の花  
海軍の街の納めの水天宮  
炊き方も上々新米粒の立つ  
昨夜今日と風の荒れたる牡蠣雑炊  
燈火親しごはん革命なる新書  
旨けりやよい諸の器量を云ふ勿れ  
唯年を迎ふ無策でありしかな

茶房の窓スプレー描きのサンタかな  
冬日輪朝月の空渡り初め  
冬の暁光朝月の空犯し初め  
霜旦の漁場へ逸る穴子船

霜旦の大地蹻音返すなり

下駄で来て近所の蕎麦屋の柚子切り蕎麦

なほざりの鉢のさつきの返り花

波間より出船見送る鳩の首

鱸船湾一ぱいに始動音

駅員が落葉追いかけて掃き掃除

布団より出るのがつらい朝が来た

風太郎末枯れもせぬ青テント

じつと見て蕪に目鼻のあるやうな

下仁田葱そのふやふやに沁むる味

枇杷いつも高みに咲いて寺前町

掛大根富士見ゆる日も見えざる日も

窓飾り立てる電飾極月へ

青桐の落葉を蹴りて大きな音

猫じゃらし骨の髄まで日の透きて

葉牡丹を買ひ来て鉢の置きどころ

海辺の家柑橘類をやたら植え

暖冬の土破りここ芽ぐむもの

海星釣り笑はれてをり鯨日和

玄冬の杭に海鳥薄墨に

数え日を渋柿のごと捨て置かれ

冬の虻蜜の少なき花渡り

ぷらぷらと散歩桜のみぢ見て

鳥渡し冬の庭木は隙だらけ

羽根伸ばす暮の漫才大会に

瞠りてまなうら赤き日向ぼこ

少年

鯨釣の君らの今日の釣果はと・・・

空缶にばしゃばしゃ行末談ず鯨

冬潮より鯨釣の眼は冥かりき

唯集まるだけの集会日短か

もんもんのもんを破れず縞鳥

行き当たりばつたりの議事日短か

建設的意見とやらを木の葉髪

耳袋して三人の釣仲間

釣人の呟き鯨に落としけり

鯨は水底で釣師は岸辺で虎視眈々

水底の冥さ帯ぶ鯨釣られたる

午後如何にせむ残菊の曇る白

釣られたる寒鯨何處か目が坐り

武州 金澤八景

実時の殺生禁ぜし江に鯨釣

鯨釣の泛子に流せる眼の寒さう

缶からに釣られし鯨の跳び上り

鯨釣の一匹とはこれだう話さう

釣果無き魚籠の底まで見て曰く

鯨釣の北風に天麩羅談義かな

この川と東京湾の鯨の形（カタ）

正月の甘露煮に佳き鯨を釣る

冬籠る鯨を釣らむと意気軒昂

上ツトに寒鯨釣の一人づゝ

鯨釣のくしやみ連発して橋上

三人の鯨釣仲間川挟み

ダボハゼにあらざ釣りしはマハゼとよ

ダボハゼとマハゼの違い判らぬか

水面に張りつく寒鯨釣師の眼

冬紅葉せる一枝に鳩十羽

瀬戸神社

人形と朱文字に師走の大祓

三宝に積みし人形押え石

ずきずきと師走の人形朱力文字

この人はこゑ掛け易さう寒鯨釣

釣れぬ訳釣師が北風に問ひをるよ

場所替えても釣れぬ寒鯨衿立てぬ

寒潮の流れと釣師いま一体

だぼ鯨の二束三文うち捨てられ

だぼ鯨は命拾ひして海中

釣師の眼寒潮よりも尖りをり

並木より並木へ街の冬雀

軍艦と鴨の一団入江統べ

軍港の一隅を占め鴨の陣  
一望に潜水艦と浮寝鴨  
鴨の陣犯し鴟の闖入す  
潜水艦繋がれ数え日の入江  
軍港の入江入江に小春の日  
軍港を暮れしむ鴨の旅団  
泛く原理鴨と同じや軍艦は  
リヤカーに屋号小春の小漁港  
焚火して出漁前のドラム缶  
クイと啼き鴟冬帽掠めゆき  
冬の靄東京湾はことも無げ  
冬麗の東京湾に茫と彳ち  
公園の掻き出し落葉だう使ふ  
年祝ぎの餅召せ井戸神厠神  
長湯して浮きくる躰柚子程に  
飯茶碗こんなになくくと或る朝  
じつくりと厠窓より初景色  
寒蘭を瀟洒といふに物足らず  
数え日をどすんと学生相撲かな  
曲のある幹あり北風受けて佇つ  
舟小屋裏枯れ浜木綿を濡らし雨  
正月の藁刺し小物飾りかな  
この家あの家電飾ごっこして聖夜  
イヴの電飾庭木をうまく使ひけり  
冬休路地に溢るるこどもごゑ  
雲破る日差し当れり残菊に  
枯菊や己は己人は人  
おのづから朋は疎遠に残る菊  
一を知り十を知らざる枯尾花  
残菊の白を眼にして稿半ば  
残菊を刈らずにおくも程がある  
残菊は姨の髪いろ透く雨に  
残菊の残に力を込めて云ふ  
残菊も枯れ木の賑はひ昼月に  
残菊は白に極まり二十日月  
残菊の日を経て汚れ易きいろ  
残菊は薄日をこよなき朋として  
残菊に暇を告げに冬の蝶  
残菊に雨の匂ひのありやなし

玄冬の日を捉えゐる大公孫樹  
走り根を入れて落葉の吹き溜り  
錦木の錦を蔵ふ季来たり  
公園の落葉集めて花壇に敷く  
暖房音どすんと耳から温もれる  
マネキンに更に短くなる日差し  
残菊の刈り時を亦逸しけり  
菓局の前を転べる落葉かな  
極月の何をか云はむ貴誌分厚  
だうなつてゐるのか又牡蠣晚酌に  
焼酎のお湯割り試して年忘れ  
湯豆腐に箸を伸ばして万太郎  
湯豆腐のしかじか是を叙したとて  
湯豆腐に魅入つても句の生まれ来ぬ  
起上小法師笑み初め七福神  
選ばれて残さる杉の枝下ろし  
一体に年寄りじみる歳末吟  
優（やさ）海鼠何を付度して寸評  
鮫肝にくるくる酒の廻り佳し  
氷川丸年の湊に繋がれて  
氷川丸老骨飾りクリスマス  
数え日をアルデコ調船室に  
正月を置くごとみかんを横に置く  
大將が蜜をうんぬん冬林檎  
和してみぬ「いしやーきいも」の長音に  
いしやーきいもそんな季節となりました  
こんもりと鳩は寒暮に耐ふ容  
裸木に間近き櫻鳩止めて  
瘦せ瘦せて閉じ金（がね）現るる古暦  
冬の裡ちから溜め込むさるすべり  
くろぐろとねずみのこまくら雨清し  
初蜜柑これが最期と手渡さる  
初蜜柑俳句仲間が送り呉れ  
机に蜜柑もう正月といふ風情  
落語など聞いてことしも年逝かす  
冬籠り落語を聞いて隠居の身  
机に蜜柑その一つより部屋温もる  
落葉踏む鳩は脚より枯れゆかむ

平明に鷹工夫して鳩に  
人日の耳搔きの塗り剥げてゐる

鎌倉八幡宮 御神楽

囃子方庭燎（にわび）に浮かび上がりけり  
夜神楽の末座に加はりどっこいしょ  
庭燎いま公暁の公孫樹染め上げて  
神楽笛火の粉が先に舞ひにけり  
神真似て神の遊びを巫女の舞  
神楽歌和すに和琴（わごん）の蛙ごゑ  
「其駒」に四隅の庭燎冴え冴えと  
其駒は神楽歌。「其駒ぞや 我に我に  
草乞ふ 草は取り飼はむ 水は取り  
草は取り飼はむ」  
見そなはす三日月神楽舞ひ始む  
人長（にんじょう）のそろりそろりと神遊  
び

人長は御神楽を演ずる楽人の長  
人長の神楽の先触れ「鳴り高し」  
楽人は埴輪のごとし神遊び  
神々の遊びを三日月見そなはす  
鼻をつく松煙の香や神楽舞  
常夜燈御神楽の夜を更けしむる  
神遊び笛はしゃかりき中天へ  
笛・和琴調べ尽くして神遊び  
神楽舞奮ひ立たせて笏拍子（しゃくびよう  
し）

笛颯颯和琴淙淙神楽歌  
お神楽の庭燎に加え月あかり  
笛走り和琴は転び神遊び  
夜神楽の庭燎に匂ふ巫女袴  
北庭に庭燎拳がれり神楽歌  
神楽果つ森を遍く照らす月  
段葛枯木の間の常夜燈  
浄妙寺界限

寺の名を告げては小春のバス停まる  
靴の向き直してをりぬ十賊の辺  
方丈の横手の其処が紅葉茶屋  
紅葉茶屋小さき石橋一つ架け

水仙の一叢毎に山日向  
とんがれるあぢさゐの芽に白日差  
最期まで痩せても枯れても冬もみぢ  
暖冬のコートを楯のごと提げ来  
浄妙寺二丁目日暮れて花八つ手  
水仙を前にし何やら探し物  
冬帽を被りしお人誰に空似  
千両と万両の実の付け処  
水仙の目線といふは低かりき  
暖冬といふこゑのあり水仙に  
二タ谷（やつ）にまたがる墓域烏瓜  
関伽桶と蛇口とぼたぼた落椿  
強霜のありあり地獄の釜の蓋  
と或る日の強霜地獄の釜の蓋  
方丈の西より差せり冬至の日

報国寺

槓手入れしてあり冬の禪の寺  
五輪塔片寄せられて竹の春  
玄冬の苔もうち寂び五輪塔  
この銀杏立派といふを仰げば散る  
タクシーを待たせておいて紅葉寺  
気の付かぬところに十月桜かな  
万両や厠へ伸びる石畳  
万両の先づは三年実を付けぬ

烏瓜ずんずん山を登りをり  
火恋し田楽辻子（でんがくずし）の路なり  
に

田楽辻子は田楽師が住んでいた小路の意  
薦堀に沿ひゆく田楽辻子のみち  
寒鯉に愛称欲しきところかな  
寒鯉を三郎丸と称しもし  
寒鯉の流れに任せ川下る  
寒鯉に夕日傾くこと速し  
寒鯉の鼻先に顕つ水の光ゲ  
紅葉寺この辺あたりと聞き来しが  
寺の名が即ち地名地虫鳴く

釈迦ヶ谷

鶴鶉珈琲喫茶「古典派」に  
落石と残る紅葉の釈迦ヶ谷  
冬木の芽鋭さ増しぬ地鳴の中  
夕凍みの杉木っ葉踏み釈迦ヶ谷  
朽ち葉の香落石注意の釈迦ヶ谷  
切通しよぎる羽音も夕凍みて  
山を染め海に没らむとする冬日  
つらつらと山に射す日の凍みて来ぬ  
冬紅葉同士張り合ひ暮れむとす  
さざんかは骨片の白崩れけり  
生業に見合ふ聖樹を珈琲店

鎌倉は脇道だらけ猛り鴟  
短日の袋小路で日の暮れし  
残照のほぼ真横より冬紅葉  
白菜と一緒に売られ水仙花  
うすぼんやり骨董店の冬灯  
ひっそりと水仙暮れてぽっくり寺  
ぼんぼんと飛石とべり水仙寺  
寺寶なき寺こそよけれ冬紅葉  
暮の店竹箒など目白押し  
駅前木の五、六本聖樹とし  
遠足子猫も杓子も鳩サブレ  
辻説法跡に響ける咳払ひ  
滑川紅葉の中に昏れむとす  
ここよりは幅員狭し落葉径  
瀬に残る落葉と流されゆく落葉

枯葦を雨渡りゆく古江かな  
パソコンの電源コードの煤払ひ  
もち古りし辞書の繕ひ十二月  
数え日のルビ付小説ビルディング  
数え日の百円シヨップに無駄遣ひ  
鮫鱈の今も揚がれり古湊  
胸の辺の古創の透く冬至風呂  
寒雀音立ててゐる古庇  
蝌蚪生れしはきのふのごとく古瀬かな  
正月の古墓にわが翳も添え

吉相の椰を叩けば冬の音

とりどりの彩に古瀬の落葉かな  
ゼラニウム一鉢部屋に持ち込み冬  
部屋咲きのハイビスカスもあと一花  
哲学の一つも持てと冬林檎  
断ち割りて空気に触れぬ冬林檎  
北風の中新紙幣（さつ）拒む販売機  
筆無精だうする今年の年賀状  
煮え切らぬ吾を叱咤し書く賀状  
ザラ紙に鉛筆とりて歳旦吟  
冬越しの鉢のああでもかうでもなし  
シヤコバサボテン咲くと泡立つやうに云ふ  
どんど火に雨がじゃんじゃん降って来て  
冬の雨受けて庭石蘇る  
緞帳が下りて来さうな暮れの空  
うすらひを未だ見ぬ首を引つ込めぬ  
冬に入り兀と鷺鳥の鼻の瘤  
鴨一羽後れをとりてその羽風  
俳諧に遊んで煤の日を送り  
年の瀬の渡しにみたりそぞろ神  
句に欲しきものは枳殻垣の隙  
十二月使い途なき日を余す  
思ひ当る名案に似て返り花  
狭き穹大きく使ひ冬かもめ  
冬の雨明け方一度降ったきり  
つむじ風落葉と羽毛捲き上げて  
街の輪郭樹々の輪郭冬夕焼け  
絵空事などではあらず冬そうひ  
山梔子の実をもて染めむわが句風  
引つ掛かりをり彼の辻の実山梔子  
暖房音入ると思ふや事切れて  
烏瓜の種埋め生やすと気長妻  
単純と云へば単純綿虫は  
サンタも出て歳末商戦巻き返し  
熱爛に生きてひやひや豆腐の味  
熱爛やもう過去のこと想はざり  
爛熱くつけてあつあつがんどき  
熱爛やこの徳利と幾星霜  
見たきりで買はぬ箱詰みかんな  
昔なら船で温州みかんな

煤払ひ妻の一言ある前に  
力み癖抜けぬ真冬のさるすべり  
覗き見る眼のちかちかと花柵

思はずの薄着にたじろぐと或る朝  
葉牡丹に震撼と朝来たるなり

椰の木の皺くちやの実に年の寄る

万年青の実年々えにし薄くなり

片隅の紙屑籠と冬籠り

階の温きに一輪冬すみれ

舌鋒は寒雀より鋭き批評

蒲の絮飛ばす合図をそぞろ神

着膨れ妻よると手かせば「だいじょうぶ」

魂胆を見透かすごとく返り花

古稀祝ふことなく過ぎし返り花

寒雀振り向く鬼のゐる方へ

寒雀舌つ足らずは嫌ひなり

球根いろいろ空想共々植え込んで

冬かもめうす汚れたる空の端に

今は日を取り込む仕事冬木の芽

剛直を貫く葱に霜の日々

葱の管後生大事に何封じ

暇人の覗いて不思議な葱の管

起き抜けを明晰にして冬の雨

煤の日の塵の不可思議光世界

蜜柑一つ置けば浄机に早変はり

一芝居搏つてやろうか枯月夜

唄ひ初めごまかしやうのない国歌

かまくらの雪の横手に「よぐ来たねし」

本廻り主として暮れの大掃除

天津栗歯の悪ければ割り喰って

予め下手とことほり聖夜劇

電飾電球凝りに凝ったり三万箇

白鳥の着ける画像に首伸ばし

歳晩のライブ舞台にオートバイ

腕に刺青（タトウ）レーザービームの初舞

台

年忘れどいつもこいつも不勉強

年越し番組他にないからこれを観る

ぶっちぎる年越し番組無き晦日

年の夜を阿弥陀籤めく番組に  
笑ひ転け晦日も締めの大みそか

おきりこみⅡ群馬の郷土料理

ふうふうして風の群馬のおきりこみ

電飾電球ここと思へばまたあちら

自販機の原理は

つり銭出すオートマトンといふ学問

冬雨に瞬き止めぬ潦

十二月八日を風の横須賀に

熊手買ひ昔軍人さんの街

石畳擦りてまるべる杜落葉

搔き集む落葉に走られつく吐息

どの山もみんな低くて里紅葉

半島の雑木ばかりの尾根紅葉

電気毛布するかと云はれ「まあだだよ」

湯気立てて四囲を障子に囲まれて

煙草買ひにちゃんちゃんこではおかしいか

真白にて小出しに咲ける冬小菊

眼が生きて佐島の潤目鯛（うるめ）活魚店

千葉県 印旛郡 本埜村

耕起しせぬ田に白鳥待てる村

二番穂を残しいただき白鳥に

初詣参道だだっぴろきかな

大つごもり飛行機音のこもる空  
つくねんと飛行機が航く大晦日  
川に沿ひ晦日の空を冬かもめ  
千両より万両似合ふお寺には  
柿の蒂つくづく年も詰まりけり  
釣れたとも寒の鰈のこんなのが  
葉がよじれひねた水仙淡島さま  
曳き込まる海の深みへ冬の鯨  
鯨釣れり村井商事の鼻先で  
年末まで一週残し浪花節  
意気挙がる熱燭とでもたかが知れ  
目の前に来てゐる正月さて何を  
二つ三つありて吾にも年用意  
熱燭に首を擡げる虎造節  
浪曲がかかる年の瀬手酌して  
浪曲に魂（たま）揺すられて逝く年か  
懐旧  
年の瀬の柱に凭れ虎造節  
熱燭に思ひの丈をぶっつけ節  
老人の首傾げゐる冬木の芽  
うすずみに辺り暮れゆく冬木の芽  
冬の暮見え得るものは見ておかう  
カーテンを閉ざせるまでの冬の暮  
意地境地そんなものとは年逝ける  
立ち停まる冬木がありてその空を  
師走妻夫を忘れて立話  
蛤は雀にならむと日々精進  
鯉に鰓などと云ふより鯉に髯  
なほざりの鉢のものまで末枯るる  
刈り込みし茎の突っ立ちゐる寒暮  
ボディシャンプーももいる容器に湯浴む冬  
あさつての方に日移り干蒲団  
向ひ家の向かうを通る冬至の日  
干蒲団掠めて通る日の低し  
そこ起てば冬の日に透く部屋の塵  
球根植う等間隔にがまたやっかい  
これよりは一気に没る日残菊に  
手始めに先づは眼鏡の煤払ひ  
眼鏡の煤払ひ次はと部屋物色

もう三時横から射して冬至の日  
喝采の真つ只中に白鳥降る  
檜は謹言樟は実直冬に入る  
忘れしを妻がおぎなひ冬籠  
身ほとりは勝手に暮れて花八つ手  
安定を嫌ひ落葉のまた駆け出す  
湯ざめとは何處かが違ふ日の没り際  
冬至の日干物を除け天の邪鬼  
やおら身を引き締む思ひ冬の暮  
向ひ家に日差しを堰かれ干蒲団  
広がりて日差しは薄し枯葎  
櫟もまた格別な季迎え  
櫟は止まり易くて冬の蠅  
寒釣のつれなき返事返りくる  
寒釣のこちらも見ずに釣れねエと  
水仙の先に照る海帰帆亭  
数え日の舗道汚せり鳥の糞  
鶴鴿もとことこ師走歩きして  
冬暖の渚の尽きるところまで  
枯はまゆう沖には鴨のたゆたひて  
柚子の家金柑の家散歩道  
口鉄砲あまりに鴨の多ければ  
鴨光り海は正月気分かな  
正月の光まみれに鴨浮きて  
年賀用生菓子鶴亀しつとりと  
旅番組はやコマーションヤル成田山  
ベトナム陶器  
ホットレモンにとんぼの絵柄パッチャン焼  
サツカーに数え日の昼潰しけり  
白鳥の来る村の地理電話にて  
正式には香港カポック年越す樹  
暖冬の桜とはこれ見つけもの  
素通しの庭の残菊刈らずおく  
鴨と云へば横須賀波に揉まるゝ鴨  
柚子湯の柚その出来何と評さうか  
冬至一日経たる夕べの川景色  
混み具合覗いて冬至の散髪屋  
土擦つて真昼の落葉裏がへる  
冬至経し日輪韋駄天走りかな

冬の暮見とがむ雲脂のよそよそし  
風の夜を年越し番組目白押し  
冬至湯に身を折り畳み臍を張る  
柚子湯など沸かしてそれから晩酌でも  
斜め射しこれが冬至の日なるかや  
玻璃越しに狹くしゃみする洗濯屋  
北風に貌削がれむばかり跨線橋  
神の留守ゴミの分別微に入り細  
東風吹かば匂ひ起こせる水仙花  
暮れに見る正月映画二本立  
くすくすして漫画に魅入る暖房車  
電飾の仕掛け昼にてあらはな樹  
無為に過ぐ家居浮寝の鴨に似て  
吹き抜けのホールに聳ゆ大聖樹  
冬かもめ群れなす鴨と距離置きて  
庭木には庭木の晩年冬日差  
年の瀬の老人居並ぶ散髪屋  
散髪屋覗く冬帽「こりや駄目だ」  
輪郭を際立たせゆく冬至の日  
手に取るはただ何となくこのマフラー  
絵はどうでも冬の廁のカレンダー  
椰の木のこんもり冬の大祓  
温ければよしマフラーの柄間は  
冬至夕映水際に立つごとし  
鶏のごとく布団に悴む脚  
一区切何處でつけよか日短し  
人よりも松早く立て木材屋  
真夜に目が覚めて布団をずらす癖  
短日の電燈慣れて暗しとも  
煤掃きの真似事われも箒もて  
わが勝手罷り通れり三ケ日  
紅玉の皮煮崩れずクリスマス  
料理番組正味五分の青菜の味  
袈裟合ふ大柄スタイリスト  
誤植訂正はやばやと載せ新年号  
映画見て聖樹見てあと帰るばかり  
松手入れ頼まれてをり隣家より  
熱きもの熱き裡にと出すおでん  
手を遣りてこんな硬さか冬木の芽

旅人の眼にはやばやと松飾り  
松飾る郷には郷の流儀あり  
熱演熱唱了りて除夜の鐘を聞く  
歩かねば錆つく脚や烏瓜  
若きらに冬くる町や電飾樹  
熱き湯に声を挙げたる木の葉髪  
ぐらぐらと湯の沸く音も冬のこゑ  
一陽来復けふを境に伸ぶ日差し  
詰まる日差しポンと転じて伸びる日差し  
熱海より現場中継冬至梅  
数え日の昼は手を抜くコロツケに  
鯨漁廃れ鱒漁残る浜  
花八つ手まだ見えてゐるうすあかり  
尿に起つ零下の廁午前二時  
大年の足の痺れて横坐り  
渡良瀬の葭刈蒼天震はせて  
萱刈の廃る日そこに見えてをり  
渡良瀬の古老の自慢葎と萱  
柚子に爪立てて匂はず鼻の先  
律義にも暦に合はせ寒波くる  
あと五枚だうにかかうにか賀状書  
橋脚にへばりつく牡蠣歳晩へ  
郵便貯金記帳の音もはや師走  
懷中より取り出す師走の買ひ物メモ  
能く空に目がゆき野辺のなづな摘  
柚子湯して数え唄など途中まで  
衣食足り団地布団の満艦飾  
鰐口をがらんがらんと初詣  
鞆を漕ぐや思はず骨の音  
健忘症などののんきな年の暮  
聞き分けの出来る赤ん坊林檎の頬  
大根に酵素茶碗に熱き飯  
暖冬のいたづらに梅騙されて  
細字もて妻の賀状の事細か  
蟪蛄のしゃっちょこ立をしてみせぬ  
冬かもめ引き込む町の川なりけり  
海より来て川遡る冬かもめ  
初句会選はまちまち当てにせず  
川あれば空は広がり冬めく雲  
齒朶あををあを辺り払ひて冬社

山攀づる径は幾つも冬すみれ

颱風の眼窩豁然青菜畑

不覚にも古巢醜態晒しをり

露西亜より正月目当てにサーカス来

豁然と大年の日の日向に出づ  
冬休子供群がる福引場  
逝く年の片棒担ぎゆくごとし  
ブルゾンゆくポインセチアの繁華街  
鳩は餌漁りどうしの冬日向  
公園に餌漁る鳩と日向ぼこ  
擦り傷の傷口見せに厚着の子  
戻る雲三時過ぎればもつと冷ゆ  
顧みる年も淡々昼月も  
年逝くと宣ふ鹿のやうな貌  
イヴ近き街ゆくブルゾンポッケに手  
木が傷む故にもがるる夏みかん  
間引きをる賀状宛先リストかな  
万両を鉢に仕立てて年迎ふ  
千両に応え万両瞬きぬ  
はびこれるアロエそのまゝ漁師町  
町医者にして藪医者の方年青の実  
屑籠の影が伸び来ぬ大三十日  
初刷のこの頁もう読んだっけ  
灌水に一刻使ふ大三十日  
目途立てて取り組む仕事大三十日  
潮澄み竜宮城も松の内  
さる家の  
愛車ポルシェびしょびしょにして年用意  
夏みかん採る気配なし年の内  
干支の判子（はん）磨滅するまで賀状書  
冬麗の入江に鷗の舞納め  
三桎の太枝小さな鐘吊りて  
栈橋に朝日を向ふ百合鷗  
冬麗の桜を包む皮の張り  
畳屋の畳のしごき納めかな  
この家ももう松飾り町内路地

紅玉を探し求めて幾八百屋  
紅玉煮る砂糖どっさり使ひけり  
紅玉煮て砂糖の多寡を問はれもす  
煮リンゴの冷ゆれば沈んだ鍋色に  
林檎煮て煮過ぎてすこし焦げる香も  
林檎煮る香が厨より本を読む

飴色の日差しに林檎煮上がりし  
林檎煮上がる冬至の太陽いろにかな  
箱売の蜜柑の味見丹念に  
味見して納得箱売蜜柑買ふ  
箱売の蜜柑納得して買へり  
大みかん臍の辺りの柔らかさ  
なんだこれ皮のぶかぶか蜜柑なる  
正月用みかんにもあるLサイズ  
籠城の兵糧の内箱みかん  
正月花千両まことにいい値して  
山東菜白菜と何處どう違ふ  
吾が俳句歩を進めしや初山河  
古本の海の波間に煤籠  
木乃伊取り木乃伊に月の冬の暮  
帆立雑炊玉子の黄味を色どりに  
帆立雑炊帆立はこれかもっこりと  
帆立雑炊白一色に紛れけり  
雑炊の帆立の淡々飯粒も  
海螺負けしあきらめ顔に夕日射す  
会津より酒粕腹に熱き酒  
酒粕にちびりちびりと冬の暮

おやおやこれ暮の八百屋の仏手柑  
手に取りしその掌に余る仏手柑  
どれ一つ縁起担ぎに仏手柑  
正月の縁起担ぎに仏手柑  
祖（おや）の手の様なつかしき仏手柑  
耳搔の化け物大の仏手柑  
千載の一遇仏手柑求む  
正月を薫れと飾る仏手柑  
風流の始め茶の間の仏手柑

妻

実家より金柑貰ひ来て甘煮  
金柑のことし小さめ数貰ひ  
クルスマスツリー点ると点らぬと  
クリスマスイヴならではの大花火  
セーターのニュースキャスタークリスマス  
アナウンサーポインセチアの朱を装ひ

イブの日を東京夜景バスツアー  
ショッピングモール光の人工雪  
クリスマスツリー電飾シンプルに  
クリスマスキャロルティンドンティンドン  
と

クリスマスセール正月ものも売る  
氷点下割りしその日の聖夜劇  
クリスマスライトアップの世のツリー  
モニュメント聖樹聳ゆる大ホール  
クリスマス嘉す発光ダイオード  
バタ臭き大道芸やクリスマス  
歌声もスパーク紅白歌合戦  
短日の餌漁り暮れて神の鳩  
飾売小屋建つ辻は風荒き  
一点の雲無き浅黄の師走空  
年用意歳々妻は手を抜けり  
桜井菜緒さんより贈らる  
みちのくのキチジが味とよ笹かまぼこ  
着膨れて唯成り行きに任す体(てい)  
爛熱し弁明する気さらさら無し  
寒竹の子程にシャキツとした句欲し  
さるすべり雪気払ひて払ひても  
力むもの寒の仁王とさるすべり  
寒気憑く枝くねらせてさるすべり  
八頭めく日々家居も長くなり  
鋤焼の箸が纏れて見合ひけり  
なまはげの髪のごときが牛鍋に  
鋤焼の煮えてぐつぐつしか言はぬ  
鋤焼の鉄鍋大方漁り了へ  
牛鍋や昨夜の脂が浮きあたり  
おでこよりふらふらと起つ日向ぼこ  
日向ぼこ朦朧状態まだ抜けず  
不意打ちの寒の極みといふに遇ふ  
懐炉などみつももないが取り敢えず  
古曆太田とあるは通院日  
住職は同級生よ除夜の鐘  
町内に三つの寺の除夜の鐘  
黄泉にても鐘百八ツ聴こえをらむ  
吾もいつか彼岸で聴かむ除夜の鐘  
活魚店水ふんだんに冬の暮

恒例の種割れ手品年忘れ  
師走妻少しは休めここに坐せ  
茶の間からはみ出す笑ひ大旦  
虎河豚の獲れたれば頬緩むてふ  
冬あたたかシルバー料金映画にも  
十二月それも半ばの思ひかな  
新築の家正月に間に合はず  
反古ひねる快感冬はもうそこに  
煤の湯に新しき創古き創

霜柱ことしも煙草止められず  
危ぶまる人いざしらず年立てる  
飼犬を座敷に上げて冬籠  
心臓弁膜症  
霜柱坂がかるときわが病  
年逝かせ迎え六十余度ほど  
人集まる集まるところに飾売  
売声も正月気分飾売  
飾り買ふ中年同士言交はし  
歳末商戦なんとか脱す人の渦  
うる覚え唱歌張り上げ初湯殿  
更に街遠(をち)に押しやり寒茜  
鐘聴いて年の内から浮かれ酒  
気のつけば財布も持たず暮の町  
漫然と町巡り来て冬の暮  
起つて見て坐つて見ても冬茜  
手に足に掛け湯じんじん冬至風呂  
わが身丈妻の身丈に冬茜  
ことも無く今日が了りて冬茜  
妻の云ふ冬夕焼けのどれどれと  
はつはるの役者が決めて天皇杯  
鶏旦の賽銭箱を落つる音  
初夢に千両箱の鉄の鋏  
はつはるの失敗手品舌を出す  
慈姑一寸韃晦の味噛みしめて  
海馬の人間臭きその背筋

暮れの安房行

冬帽を目深に被り乗船客  
乗船客海猫のごと屯して  
東京湾渡る帰省もありぬべし  
カーフェリーにての帰省もあらむ暮  
カーフェリー船首にいつぽん松飾  
鳩大き波紋を残しけり  
洋上に寒の釣船模型めく  
冬の実模型のごとく釣船が  
デッキ吹く北風に泪目波の果  
寒風の吹き起こす波洋いちめん  
カーフェリーデッキ寒風吹きまくり  
時化風に貌殴られて冬の航  
カーフェリー渡り納めの水脈太し  
甲板に冬日眩しみしかめ面  
もう一働き師走の火力発電所  
冬空を仰いでけふの雲の多寡  
冬雲のおもおも水平線迄覆ふ  
首筋にマフラー絡めカーフェリー  
冬休船首に陣どる子供たち

安房蜜柑など物色し船待つ間  
カーフェリー土産売場の安房花菜  
土産とすストック色の組み合わせ  
夕凍みの浦賀水道かもめ啼く  
船影の刻々濃くなる凍み水道  
東京湾残照海鷗の翅凍みて  
船室の一席とりてあらせいとう  
船室の暖房利いて芽を出せり  
船室に暮の子供の鬼ごっこ  
船室の暖房に皆のぼせけり  
甲板に出づれば北風に面張られ  
雲間よりスポットライトめく冬日  
馥郁たる正月花を安房土産  
気が気ではなき花抱え上総より  
髪に憑くストックの香も安房土産  
夕栄の広大無辺年の果  
夕栄に火の島包み込まれ冬

木の葉髪パタと書を閉じ下船せり

落鱸（はらふと）漁東京湾のとば口に  
鮫肌の海に着水百合鷗  
水ごと背黒鯛（せぐる）を揚げて漁納め  
鱸跳ね天羽（あまは）漁協のトロ箱に  
石鯛を槽（ふね）に泳がせ年の果  
焚火槽がくりと崩れドラム缶  
漁納め黒凍み鱸揚げられて  
潤目鯛（うるめ）干すかたへにアロエつん  
つんと  
アロエ咲くほとりに潤目鯛商へり  
蠅追へば飛んで隣の干潤目鯛  
集（たか）る蠅ところを替えて潤目鯛の上  
浜金谷驛前セキレイ歩みをり  
小じんまり安房の磯宮注連飾  
あと五日ばかりを残し浜焚火  
数え日の海底透きて稚魚遊ぶ  
数え日の雨降って来ぬ釣仕舞  
正月用佛花にと売る安房小菊  
金魚草交れる花束購へり

冬あたたか安房の湊の赤燈台

安房 岩井 富山地区

駅前佇てるポストと水仙花  
里見古戦場  
海臨む枇杷の花越し古戦場  
八房が齋か刈田に徹るこゑ  
セキレイの尾の振り納め防波堤  
水仙の保田の二つ目先で降り  
水仙の里へは村の循環バス  
地図をもち水仙ロード女連れ  
枯篠やいちにち村に音の無く  
咲きたくて花菜うづうづしてゐたり  
小春日の畑の蚕豆親指大  
寒禽の発ちて揺れゐる枝二本  
対峙せる寒禽花鳥圖さながらに  
水仙を斜めに登る径や佳し

みつみつの山の水仙畑かな  
水仙に徹る地鳴の今しばらく  
暖冬の水仙なれば剪り急ぎ  
水仙のなだるる径をなほ登る  
斜面畑黄房水仙立ち交り  
分け入れる里山水仙ただならぬ  
水仙を人影のごと日の退きぬ  
水仙の守人のごと梅ありぬ  
水仙は下からみるもの登りみち  
水仙のしゃんとしてゐる山日陰  
きしきしと水仙畑を過ぐ羽音  
ゐるはゐるは養蜂箱に蜂ゐるは  
水仙を斜めにのぼる径よけれ  
早咲きの水仙を剪る年の内  
展望台小春の椅子を譲り合ひ  
水仙の花掲げをる半日陰  
山道にはみ出す水仙厚日向  
日に温む落葉を褥水仙花  
水仙の咲ける農道一直線  
黄の旗を連ねて水仙フェスタかな  
電柱と水仙鄙の道つづく  
冬日向婆らの目医者談義かな  
林間に水仙折々笹鳴けり  
里山をひよいとのおぼりて水仙畑  
新しき木柵水仙遊歩道  
水仙の唯唯咲けるいっぽんみち  
冬たんぽぽ三軒で守る畑の墓  
きりぎしに年を送れる一樹根  
アロエ咲き季節民宿作次郎  
花アロエ漁師臭さの脱けきらず  
保田  
水仙は舟で運ばれ江戸おもて  
安政の日本水仙根づく地ぞ  
水仙の花見どころか俄雨  
保田駅の構内埋む水仙花  
年の瀬の一日を遊び安房海辺  
金盞花くるみ呉れしは千葉日報  
水仙の保田に吟行納めかな

水仙に富士を配せる入賞作  
水仙をテーマに絵画コンクール  
玄冬の雲あかあかと燃え尽きぬ  
黒凍みの枝は微に入り細に入り  
寒暁と一語厳しき韻きあり  
身の締まる寒暁真正面にせり  
寒暁の矢面に立つわが瘦軀  
寒暁の貫けるものが視野に  
寒暁の光の痛棒啖ひけり  
寒暁に射し貫かれ地の一切  
萬物のうへに寒暁日を遍く  
寒暁のその光が徐々に白を増し  
冬の朝勤しむものの靴の音  
冬の暮切羽詰まって翔つ羽音  
冬曙菘求む町無人  
飾り了ふ輪飾風を呼びにけり  
年の火の揺らぎをるなり杉の間  
瘤のある樗樹根に年立てり  
新築し晴夜ケーキのやうな家  
水辺より冬始まれり芦刈屑  
数え日の干鱈むしりて熱き酒  
十二月二十六日  
やや温く石垣りん死すその凍て夜  
あと五日ばかり残せり冬青（そよご）の実  
年内にまさか紅梅咲けるとは  
素浪人風に立ち枯れ棒葎  
忘年の空日が通り枇杷の花  
枯枝の水平なるは鳩の為  
鳩のよな貌して作句枯園に  
数え日の空改めてみる日中  
万歳のすたすたと来てすたと去る  
町内の獅子舞八百芳の親爺  
年の酒浮世話に花咲かせ  
冬雨のハネ浴びてをり一樹根  
大年の日向に見出づ返り花  
年も瀬の薄日のなかの返り花

裕介

温泉にでもと末子の賞与呉れ

積み上げられ百軒分の鏡餅

達磨のごとしこたま着込み探梅行

暁光は海より寒林貫きて

鳩糞（ま）りて路上に咲かす冬の華

数え日にあたたかき日も交りけり

市庁舎の冬木の配置全しや

いや高き枝寒禽を放ちけり

切なきは汝のみならず寒雀

寒雲の染まらぬところ染むところ

冬雲のもやつと昏れぬけふあたたか

スピードスケートカチカチバックストレッツ

チ

スピードスケートダントツリンクレコード

出る

上々の句とは慈姑のほろ苦さ